

---

# 姉びっくばん + (ぷらす)

埼

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

姉びつくばん+（ぷらす）

### 【Nコード】

N0873E

### 【作者名】

埼

### 【あらすじ】

義姉<sup>ねえ</sup>さん、義姉さん、夏休みも終わってしまったってあつという間に新学期ですが楽しみですか？僕のクラスは面白い人が多くていつも飽きないんですよ。義姉さんはどうです…って自転車の後ろで寝ないでください、本気で危ないですから。だからあんなに夜更かしはいけないと言ったじゃないですか、もう…。                    こんな感じ（どんな感じ？）まったりと進む日常を僕の目線+アルファでお伝えします。おもしろいかは…どうなんでしょうか？義姉さんはどう思いますか？って二度寝しないでください。

姉びつくばん+（ぷらす）

## 第一話 はじまりはじまり（前書き）

と、いうわけで季節を無視した新連載ですよ、奥様。ちよいと長くなるかもですがお付き合いいただけると嬉しいですよ。

元は短編なのでそちらを先にお読み頂けると話の把握は楽かもです。ちなみに短編同様文章ルールがちよっと特殊なのでお気をつけください（主人公は基本的に「」を使わない、など）。

前回、入れられなかった設定を入れていくのでちよくちよくシリアスが入るかもですが、まあ気にせずに。

あ、あとちよくちよく小ネタを突っ込んでいきますので評価欄などでツッコミを入れてくれると作者が喜びますです、はい。

## 第一話 はじまりはじまり

さあ、始めようか。

彼と彼女の面白おかしくて幸せなお話を。

例え結末が面白おかしくて幸せでなくとも。

突然なのですが現在、僕は少しだけ焦りながら自転車のペダルをこいで、朝の住宅街を疾走しています。定員は僕を含めて二名です。

「あらあら！ 朝から大変ね」

…おはようございます。矢作さん。

「あんまり急ぐと危ないわよ」

…気を付けます。篠原さん。

朝独特の冷えた空気を切りさきながらすれちがったご近所さんたち  
に挨拶を交わします。

やっぱりご近所付き合いは大切だと思います。お醤油とか切れたら貸してくれますし。

ちなみに後ろの荷台に乗っている人は器用に眠りについていて  
危ないっいたらありません。

…落ちちゃいますよ、義姉<sup>ねえ</sup>さん。

「……んんん、落ちないよう」

姉びっくばん+ (ぶらす)

僕の言葉に反応したのか、はたまた自転車の揺れに反応したのか、自転車の後ろに乗っていた僕よりも一つ年上で、高校二年生の義理の姉が目覚めました。

「…まったく誰のせいで遅刻しそうなのよー」

義姉さんは後ろから僕の頭を叩きながらブチブチと文句を言っています。

そうです。僕たちは今、遅刻しそうになっているのです。

理由はベタに寝坊です。

ちなみに今日は九月のはじめ。つまりは新学期なのです。

「ほらー、誰のせいかこたえてみなさい」

未だにべしべしと僕の頭を叩いている義姉さんが僕に詰問します。

…痛いです。痛いですよ義姉さん。それとお願いですから暴れないでください。危ないです。

叩かれるたびにぶれる視界に若干の危機感を覚えてなんとかやめてもらいます。

あと一応訂正しておきますが、義姉さんは僕に非があるように言っています。原因は間違いなく義姉さんです。

寝たまま家中の時計の電池を抜き取って自分の枕もとに集めると、いう奇行のせいで、今こうしていつも乗らない自転車をこいでいる訳です。

僕たちは大きくはなく、かといって小さくもない一戸建ての家に二人きりで住んでいます。

僕たちはもともと孤児で、義理の両親に養子として迎え入れられるまで同じ孤児院で生活をしていました。

両親は二人ともんでもない変わり者で尚且つとんでもない金持ちでした。

そんな二人がある日、ふらりと出かけた先で事故に遭い、あっけなくこの世から去ってしまいました。

そこから、改めて話す必要もないくらいドロドロでデロデロな展開が僕たちを待っていたわけですが、今ここで思い出してしまつと朝から泥沼のようなテンションで一日を過ごさなければいけないになるので、またの機会にでも。

「あとちょっとだね。ほらハイヨーシルバー！」

…どこのカウボーイですか。それにさつきも言いましたが叩かないでください。結構危ないんですよ。

駅まで残り数分というところで再び僕の頭をべしべしと叩く義姉さんをなだめてすかして止めると、駅までの道のりの中の最難関、いわゆる心臓破りの坂に向けて勢いをつけます。

…しっかりつかまっててくださいね。一気に上りますよ。

「……ねえねえ。ここで一つ、ゲームでもしないかい？」

僕が腰を浮かす直前、義姉さんがそんなことを口にしました。

…ゲーム、ですか？ 一体どんにゃっ！？

僕が言い終わる前に、義姉さんは手を動かしていました。  
僕のわき腹に。

「ぐっふっふっふっ、相変わらずここは弱いみたいだねえ」

義姉さんはまるで悪代官のような笑い声をあげながら、僕の急所であるわき腹に指を這わしてきます。

…い、一体にやっ！

「ほれほれ、ボディーがお留守だぜえ」

…自転車をこいでるんですから当たり前でえっ！

「では、ルール説明！ この坂を私の妨害に屈することなくテッペンまで上りきれたら君の勝ち！ 今日のごはん当番を私が代わろうじゃないか！」

拳をグツと握って、フフンと義姉さんは勇ましく鼻を鳴らしています。

その自信満々な様子に僕は一抹の不安を抱きます。

そしてあまり聞きたくはないのですが、聞かなくてはならない重要なことを聞きます。

…じゃあ、僕が敗けた場合はどうなるんでしょうか？

「うーん、そーだなあ。…じゃあ『一日私に逆らえない券』を発行ってことで」

…なんだかとしてつもなくリスクな博打を強制させられている気がするのですが。

「男の子が細かいことを気にしない！ 残すところあと少し、頑張れ〜！」

義姉さんは『頑張れ』という言葉とは裏腹に、両手を再びわき腹

に戻してピアニストよろしく、指を動かしてきます。

体をよじってその魔手から逃れようとしますが、当然、自転車をこいでいるわけですからうまくいきません。

すつと前を見ると義姉さんの言うとおり、頂上ユールはもうすぐです。

避けることを諦め、覚悟を決めて一気に頂上を目指します。

「うわっ！ 急にからだが固くなった！」

…ふふふ、そう長くは保ちませんがからだ全体の筋肉を張らせてますからね。半端な妨害こうぼうは効きませんよ！

「なんですって!?!」

僕が得意げに鼻をならす様子を見て、義姉さんはぐうつと唸りながら黙りこみます。なにがしかの対策を練ろうとしてるのでしよう。しかしながらそれは遅いのです。戦場いくばくではその一瞬の躊躇ちゅうちゆいが死を招くのですよ！

「……………くっふっふ」

何でしょうか…？ 若干の余裕すら見せている僕の姿を見て義姉さんがニヤリと笑った気がします。しかしながらそれと反するようになその手は止まっています。

ものすごくイヤな予感がしますが何にせよ今がチャンスです。最後の力を振り絞りからだを硬直させたままペダルをこぎます。

…この勝負！ 僕がもらいまし

「…ふっふっふ、だから君は若いというのだよ義弟君おとうと」

僕の勝ち名乗りをさえぎって義姉さんが眼鏡を直す仕草をします。ちなみに義姉さんは眼鏡などかけていません。

「剛を制するのはいつも柔なのだよ」

そう言うと義姉さんは立ちこぎをしている僕にくつつくようにして半立ちの状態になります。坂を上っている状態で全体的に斜めになっているなか、難なく立つバランス感覚はすさまじいものがあります。

端から見れば何がしたいのかわからない意味不明な格好ですが、やられている方からすればちょっとマズイ格好です。特に背中が…。しかしながら頂上まではあと少しです。このまま…。

「ふつつふ、喰らいなさい！ 我が必殺技、『ごつどぶれーす』  
！！」

義姉さんは高々と必殺技の名前を叫びながら 僕の耳に息を吹きかけました。

…い、い、いやあああああッ！！

当然、腹筋と背筋に力を入れていた僕はなす術なく脱力してしまいました。

そしてこれも当然ながら自転車は上ってきた坂道をすさまじいスピード逆走を始めました。

…結局、学校は遅刻になりそうですね。

「アハハハハ、はやーい！」

逆走する自転車の上で僕はため息をついて現実逃避気味なつぶやきを洩らしてしまいます。

姉びつくばん+ (ぷらす)

…それにしても、これどうやって止めましょうかね。  
「ジェットコースターだああああ!!」

誰にともなくつぶやいた僕の疑問に答えてくれる人はいませんでした。

## 第一話 はじまりはじまり（後書き）

結局、新学期早々遅刻をしてしまったわけですがとりあえず急げば始業式に間に合うかもです……。

…ともかくにも、相変わらずやたら滅多に僕の心配をする義姉さんを電車で詰めて、僕も急がなくなっちゃいけませんね。

次回『愉快な仲間と義弟君』

お楽しみに！

## 第二話 愉快な仲間と義弟君

友達つてのは割と大切な財産だ。

金でもなく、打算でもなく、体裁でもない。

何かをしてくれるでもないが、いつも隣にいて話を聞いてくれる他人。

人生にはそんな人間が必要になることが必ずある。

一度どん底にまで落ちた彼はその辺りをよく把握している。

昔の彼の回りには、そんな人間がいなかったから。

「へい、橋たかはなはこれでペケ三な」

息も切れ切れに教室に飛び込んだ僕を迎えたのは、体育を担当している男性教師、橋本はしもと先生の慈悲無きお言葉でした。

急ぎに急いでここまで走ってきたのですが、結局始業式には間に合いませんでした。

それもこれもあのようなよからぬゲームを始めた義姉さんのせいなのですが今さらなにを言い訳しようと無駄なのでなにも言いません。

ちなみに『橋』とやたらに画数の多い苗字は僕のもの……といいますか義母の家の名字です。

「何だ？ 何でそんな遠い眼をしてるんだよ」

…何でもないですよ。近い将来、僕の顔には一体どんな落書きがなされるのか恐怖におののいているだけです。

「安心しろ。目立たないように蛍光ペンで落書きしてやるよ。ま、その日の授業は全部暗い部屋でビデオだけどなあ！」

橋本先生はふははと笑いながら手元にある名簿に少しだけペンを走らせませす。

たぶん、僕の出席欄に遅刻ペケをつけているんだと思います。

このクラスの方針は破天荒な先生の性格を見事に体现しています。遅刻であったり、無意味な欠席はなんらかのペナルティーが科せられるのです。

このご時世にそういうスパルタ的なことをする先生は得てして嫌われるものですが、この人に至っては無駄にほとばしっているカリスマ性がそこら辺の不満を中和させているのです。

あ、ちなみにペケが五つで一日落書きされた顔で生活しなくてはいけないので何としてもこれだけは避けたいところですね。

それにしても…、先程から先生の後ろに気になるモノがあるのですが、何かツッコミ待ちのような顔をしている先生に素直にツッコミを入れるのは釈然としないものがあります。

かといってこのまま放っておくと、先生の性格からきつとそのまま進んでしまうので、やはりなにか言わなければならないのでしよう。

…で、一応聞くのですがその黒板に大量に書いてある僕の名前はなんですか？

「んあ？ ああ、委員会の役員だよ。だれも手えあげないから遅かつたお前に」

…いえいえいえいえ。物理的に無理って言いますか、そういう  
たことを大きく通り越してもうこれは単なる嫌がらせにしか見えな  
いんですが？

「……まあ、何だ。オジサンとしてはもうちょっと上手なツッコミ  
を期待したんだがなあ。ちよつとがっかりだ。がっかりついでにお  
前の所にペケをもう一個書いちゃおう」

なにか変なところで期待されているのはこの際目をつむりましょ  
う。

ただ、それでまた一步落書きに近づくのは困ります。

その行動をどうにか止めようとした時、とつぜん飛来してきた教  
科書が先生の頭に直撃して先生の行動を止めました。

ちなみに先生の頭を直撃した教科書はふわふわと宙に浮かんでい  
ます。

普通なら騒然となる事態ですがこのクラスではそうだったポルタ  
ーガイストまがいの出来事は理由も原因もハッキリとしているので  
誰も騒ぎません。というか皆さん雑談がすぎませんか？

「……ヒロ君をいじめちゃダメ」

「なんだよ……ちよつとした冗談だろ？ そんなに怒んなよ新宮」

ぶう、といい年をした男性が頬を膨らませている姿は通常ならち  
よつとアレなのですが、橋本先生は教師の中でも群を抜いて容姿が  
いいのでそんな姿もさまになります。

先生が難しい顔をしながらなだめている女の子 肩口まで伸  
びたきれいな黒髪に吸い込まれるような黒い瞳が印象的な新宮波音  
さんが目を細めて先生の真意を読み取るうとしています。その間、  
浮かんでいる教科書が先生の頭を何度となく叩いています。

彼女　　波音さんは俗に言うエスパーさんなのです。感情の高ぶりとともに手を触れずに物を動かせたり、否応なく人の思念を読み取ってしまったりと、なかなか大変な能力を持っていたため色々辛い思いもしたようです。一学期のころに彼女が教室でその能力ちからを暴走させた事件は記憶に新しく、このクラスを一つにまとめさせたい思い出でもありません。

現在は彼女も強い意志を持ち、その能力の制御も出来るようになったらしいです。色々と大変でしたが結果的に大団円となつてよかったです。

さて……さすがに先生の頭を叩いている教科書は書道のものでかなり薄いとはいえ、このまま放つておいたら先生の頭がパーになつてしまいます。波音さんが……

「……エスパーだけに？」

……波音さん。僕にそれを聞きますか？　ボケは説明してしまうと死んでしまうのですよ？　それと僕の心を読まないでください。

首をかしげて僕の方を見ている波音さんに苦笑いを返します。

波音さんは純粹で非常に可愛らしいのですが……

「……………」

……はい、波音さん赤くならないでください。それと何度も言うようですが僕の心を読まないでください。

「はあ……、とりあえず新宮も落ち着いたようだし橘も席につけ」

叩かれていた部分を手で押えながら先生が僕に指示を飛ばします。その手元の名簿が閉じられているところからペケをつけるのは諦めてくれたようです。後で波音さんにお礼を言わなければいけませんね。

「……気にしない」

……。

こちらにVサインを出す波音さんの姿に、僕は気付かれないようにため息をつきました。

「ははは、ヒロも大変だなあ、朝から」

…タロ君、お久しぶりです。しかし、実際問題これは笑いごとではないのですよ？

「そうだよなー。一日落書きされたままってのは正直しんどいよな」

僕のグチを難しい顔をして、それでいて妙に楽しそうな顔をして肯定するのは、隣の席に座っている体格のよい男子、伊田いたたろう太郎君

通称タロ君です。

この色物クラスの中にいて、特殊な能力ものを一切持っていないその存在感は虚無皆無に限りな……

「オーケー、聞こえてるぞヒロ。ってか、わざとだろ？」

…バレましたか。笑われたお返しですよ。

ニヤリと笑みを浮かべるとタロ君も同じように、いえ、僕なんかとは全く違う。誰とでもすぐに仲よくなれる明るくて邪気のない笑みを浮かべます。

先程、彼に特殊能力の類が一切無いと言いましたがこれはもう立派な能力なのかもしれません。

そう、僕なんかには到底手が届かないような素晴らしい能力です。

……何故だかわかりませんが胸に痛みが走ります。

「どうしたの？ 難しい顔して？」

…いえ、何でもありませんよ。真君。

視線をタロ君の逆側に向けるとそこには中学生、見ようによつては小学生にも見えるやたらと小さくて可愛い男の子  
小川真君  
がカクンと首をかしげてこちらを心配そうに見ています。

何といたしましようか……その姿はまるで天使です。髪に浮いた天使の輪はきつと彼が天使であった名残りなのです。服に隠された華奢な背中にはきつと純白の両翼がある筈です…っ！

「全面的に同意せざるをえないです」

僕の心の声が聞こえていたのか、真君の前の席の長身美麗な女子  
立川茜たちかわあかねがくるりと振り向いて、落ち着いた雰囲気を持つ彼女にしては珍しくグツとサムズアップをしています。

茜さんはこのクラスの委員長さんです。いえ、委員長さんでしたかな？ 新しい学期になったのでもしかしたら違う人が委員長になるかもですが、無意識的に発揮してしまうリーダーシップからおそらく今学期も委員長さんになるのでしょうかね。

そして、どうやら茜さんは真君と夏休み前に付き合い始めたらしいのです。本人たちは何も言いませんが信用できる情報筋からのお話ですのでまず間違いのないと思われれます。

まあ、本人たちの態度を見ていれば大抵の人は気付くんですがね。

だって『ば、僕らはそんな関係じゃないおっ！』とか『え…ええっ！？』  
そ、そそそんなわけじゃ、ないじゃないですかあ！』など、

もう二人とも日本語が話せないほどに動揺すればさすがに…、です。本人たちはそれで隠しおおせたと思っっているのですから、恋は盲目とはよく言ったものです。ん？ ちょっと違いますかね？

「ちなみに翼は生えてませんでした」

…あはは、そんなのは冗だ…ん…っ！？

人差し指を立てて僕の冗談に本気で答える茜さんに思わず戦慄を覚えます。隣ではその言葉の真意を読み取ったのか、タロ君が引きつった笑顔を浮かべたまま固まっています。

「おーい、どうでもいいが真面目に委員会を決めるぞ。このままじや昼を跨いじまう」

どこからツッコミを入れればいいのか全力で右脳（左脳でしたっけ？）を働かせているところに、今まで黙っていた先生の声が響きます。

昼をまたぎそうなのは先生が最初から真面目にやらなかったからなのですが、今はそんな無責任な言葉にも救われた心境です。

「どうしたの？」

「どうしたんですか？」

僕とタロ君のただならぬ様子に二人が何事かたずねてきますがぶんぶんと首を振って何でもないとアピールします。

「……………やったん、だ？」

僕の後ろに座っていた波音さんの齒に衣を着せない眩きが妙に大きく聞こえました…。

## 第二話 愉快的仲間と義弟君（後書き）

僕の心を読んで口に出してしまう波音さんをなだめてすかしてとりあえず黙ってもらい、女の子がそんなことを言っちゃいけませんとたしなめます。

ぶうたれる波音さんの頭を撫でてこれからの学園生活に思いをします。

…はあ、やっぱり大変そうですねえ。

次回『放課後でいず』

お楽しみに！

### 第三話 放課後でいず

彼女が喚けば世界は変わる。

彼女が泣けば世界は変わる。

彼女が笑えば世界は震える。

全てを、世界を塗り替え潰す力を持つ彼女は、孤独に震えて怯えている。

虚ろな瞳で手を伸ばし、誰にでもなく声をあげ、世界に、人間に、変貌を要求する。

一人にしないで、と。

…やはりと言いますか当然と言いますか、二学期も学級委員長ですね、茜さん。

「ほとんど満場一致だったもんね。さすがだよ！」

「……………他に適任がいなかったから当然。次点は…北条さん？」

某有名ファーストフード店のテーブル席に僕と真君、茜さんと波音さんが向かい合って座っています。

今はいわゆる放課後、とはいっても半日授業なのでまだ一時を回ったくらいの時間です。

ちなみにタロ君はバスケット部があるので学校でお別れしました。

あのあと、委員会や体育祭、文化祭の委員役員を決め直して帰宅

となりました。その間、ものの数十分とかなりのスピード決議でした。

橋本先生が本気になったときの処理能力は過去に『鬼神』と呼ばれていたとかいかなかったとか噂の校長先生に匹敵する……らしいです。違うクラスのちょこまか動く姿が印象的な女の子に聞いたので真偽のほどは不明ですが。

閑話休題です。

そして、いざ解散となったときに真君と茜さんに昼食に誘われた、というわけです。

義姉さんが心配でしたがそう遅くならなければ問題ないと思います。

……まあ、真君も『仲良く』一緒に学級委員長になれたんですから万事うまくいった感じですよ。

「……………こっちも圧勝」

感慨深げにもらした僕と波音さんの言葉に二人がお揃いで買ったシエイクを同時に吐きだしました。

ちなみに真君の委員長が決定したのは茜さんのあとだったので男子の若干生温かい視線（男子の大半は二人の関係に気付いています）と女子の若干熱っぽい視線（女子の半数ほどが真君のファンクラブ、もしくは茜さんのファンクラブに所属しているらしいです）を受けながら二位にトリプルスコアをつける大差で見事に男子の学級委員長に選出されました。

二人ともぱつとみて分かるほど真っ赤です。

相変わらず二人はにゅーにゅーきゃーきゃー日本語として成立していない言い訳をしているわけですが、何て言いますか、こういう姿

を見てると和みますよね。

僕がグレイプジュースを飲みながらハイハイと生返事をうっていると視界の端になにか写った…気がしました。

…ちよつと、家に電話してきますね。

「えっ？ …うん、わかった」

未だにやんにやんと弁解をしている真君は僕の唐突な言葉にきよとんとしながらも首を縦に振りました。

二人の弁解の対象が波音さんが変わったのを心の中で謝罪しながら…

「……………気にしない」

相変わらず心を読まれていることにため息をついて席を立ちました。

「要求通り情報委員になってくれたようっすねえ」

お店を出て、すぐ隣の路地に入ったところで開口一番、目の前の制服を着た女の子がそう言いました。

その女の子の身長はかなーり小さく…

「ちっさいとか言わんでください！」

声に出てました。

やり直します。

その女の子は身長は真くんと同じくらいで、頭の上に結われたお団子の髪とクリッとした目が特徴の…

「情報委員会所属一年A組、神津クイナっす！」

…僕の説明を奪わんでください。

グツとつきだした手を握っている同学年の女の子、神津クイナさんはその小さな姿にぴったり合う元気な声で僕の説明を遮りました。小さい体に大きな声。さながらその姿は小学せ…

「小学生じゃないっす！ ぴっちぴちの十五才ですっ！」

…ちよっとした冗談です。あまり本気にしないでください。

ぶりぷりと怒っているクイナさんをなだめてなんとか落ち着いてもらいます。

なんとなくですが、姿形を抜きとすれば義姉さんにすごく似ている気がします。

クイナさんが所属する（あつ、僕も所属するはめになったんでした）情報委員会とは学校の配布物の編集がおもだった仕事です。なんと学校で配布されるプリントの九割が委員会で作られているらしいです。

ただ、彼女はなにをどこら辺から勘違いしたのか『探偵』とか『情報屋』とかの仕事だと思い違い、なにやら今でも暴走を続けているのです。

本来、知り合いとしては止めてあげるべきなのですがなにを言っても聞き入れてもらえずに今にいたるわけです。

で、です。今回僕は彼女に一つのお願…というよりも脅しを受けてしまい彼女と同じ情報委員に入るはめになってしまったのです。

「…やっぱり、無理やり委員会に入れたこと怒ってるっすか？」  
…まあ。怒っていないと言えば嘘になりますね。

少しの間とともにクイナさんが口に出したのはそんな言葉でした。  
少し意外な気がしましたが、僕がやたらと彼女をいじめていたから勘違いしたのだと思います。

…嘘ですよ。そんな暗い顔しないでください。

泣きそうな顔をしてしまったクイナさんの顔を見てるとちょっと可哀想になってしまいすぐさまフォローを入れます。

んー…やっぱり義姉さんと対面しているような気分になります。

僕の言葉にクイナさんの顔が少し明るくなります。が、同時にぶうと顔を膨らまします。

「…ヒドイっす！ 私は私でけっこう気に病んでたんですよ！」

…だってあんな強引にことを進めるとは思ってもみなかつたですからね。少し位は気に病んでもらわなければ僕も溜飲をおろせません。

僕がわざとらしくうんうんと顔をしかめるとクイナさんがばつの悪そうな顔をして目をそらしました。

彼女のお願ひ…もとい脅しは僕の『ある情報』について黙っているかわりに孤軍奮闘している彼女の委員会に入って（おもに彼女を手伝え、というものでした）。

その『ある情報』とは、僕が夏休み前に他校の男子生徒数人を裸に剥いてちよつと恥ずかしい姿に縛り上げてそのまま街中に放置して帰った、というものでした。その時の一部始終をクイナさんに見られてしまったわけですね。

あつ、もちろん僕にそんな趣味はないですよ？ ちよつと彼らにイラツとしたので、物理的な死と精神的な死のどっちがいいですか？ っと聞いたらどつちかというと精神的な方が…、と言うのでそこから辺に捨ててあつた荷造り用のビニールロープで縛り上げたのです。

「だって一人じゃさすがに限界があつたし、なんか最近空回りばかりしちゃうつす……」

…わかつてます。僕もクイナさんが頑張ってるのは知ってます。けど、そんなに焦らなくてもいいんです。少しずつ、自分の納得するように進めばいいんです。僕も少しですがお手伝いしますから。

「ううう………あうう、ありがとうつす」

クイナさんは少しだけ涙がにじんだ顔を制服の袖でぐいとぬぐい、気合いを入れ直すように頬を叩きました。

「そうと決まればちよつと学校に戻ります！ スクープが私を待ってるつす！」

…僕は今日はお手伝いできませんが頑張ってくださいね。あ、ところで今はどんなことを調べてるんですか？

「教頭先生の不倫とその壮絶な女性関係についてつす！」

ビシツと学校がある方角に指をさして目に見えるほどやる気をみなぎらせているクイナさんの後ろ姿をみて心の中で思つのです。

教頭先生ごめんなさい…と。

### 第三話 放課後でいず（後書き）

結局、かなり微妙な心境でクイナさんを見送り、席に戻った僕なのですが、なんとなしに真君の様子がおかしいことに気付きました。はて、そんな思いつめた顔をしてどうしたんですか？  
真君にそんな顔されると僕まで悲しくなってしまうですよ？

次回『放課後でいず おまけと絶対守護人形』

お楽しみに！

**第四話 放課後でいず おまけと絶対守護人形（前書き）**

作者のパソコンがへそを曲げているため、しばらくは他の小説ともどもまったく更新です。はい。

あ、あと後々訂正を入れていくかもです。

#### 第四話 放課後でいず おまけと絶対守護人形

我は護るのだ。

彼に迫る有象無象、あらゆる脅威から。

我が幼少の頃より学ばされたあらゆる武を用いて護るのだ。

理由は明快。

好いているからだ。

愛しているからだ。

しかし、彼を前にしてそれを口に出すのは憚れる。

だって、だって…

女の子だもん。

誰かを愛するって大変ですよね？

きつと人が人として生きていく中で一番悩ましいことなんだと思います。

だって、良きも悪きもこれ一つで人生の転機を迎えてしまうこともあるわけですし。

そうですね…。例えるなら平坦なはずのサーキットコースに突如として現れた『バナナの皮』だとか走っている車と併走するくらい速い『カメの甲羅』だとか。

で、ですよ。僕がいきなりこんな話をしはじめた理由なのですが、目の前でしょげかえっている天使君の話を聞いていたからなのです。ちなみに波音さんと茜さんはお手洗いに行っています。

「どうすればいいと思う…?」

探るような目線で僕に問いかけてくる真君。

彼にしては珍しくひどく難しい顔をしています。

今回、真君から相談された内容なのですが、なんでも真君の『友達』が恋愛について悩んでいるらしいのです。

往々にして『友達』とか『知り合いの』とかいう話はその人自身の話であることが多いわけですが、僕も一応、空気が読めると自負していますからそこら辺は華麗にスルーします。

で、その友達はひどく迷っているのだそうです。付き合っている彼女と二人きりであらぶするるのが怖くてたまらない、とか。

普通に考えればおかしな話です。矛盾していますよね。

好きで好きでたまらなくて一緒にいることを選んだのにそこから怖くて踏み出せない。

まあ、正直その気持ちは痛いほどわかるのですが。

…たぶん、その人は一線を越えることを恐れているだけなんですよ。「……一線?」

…そうですね、一線です。大切な人だと『思っていた』人が本当に、それこそ体でも心でも本当に大切な人だと認識し直す一線です。

…そこでためらっちゃうのは、実は彼が彼女のことをあんまり好きじゃなかったってことなのかな、かな?」

僕の見解がよほどシヨックだったのか某竜宮さんちの娘さんのような口調になっている真君に苦笑いを返します。

…違います、とは言い切れませんがたぶん違います。原因は他に  
あるんですよ。

そこで一つ息を吐いて氷が溶けきってしまったグレープジュース  
をすすります。

あー…、改めて自分のことを話すのは辛いですねえ。傷口に塩と  
キムチを同時にすりこまれる気分です。

まあ、すりこむのは僕自身なのですが。

…たぶん、真に恐れているのは今の自分が変わってしまうことなの  
ですよ。

私は少し考え事をしていた。

何を、と聞かれれば好きな彼にあまり相手にされてない気がする、  
とかさつきから壁一つまたいで向こう側にいる彼の心の中に何か霞  
がかっているけど女性の笑顔が浮かんでいる、とかそこら辺を即答  
する。

「どうしたの、波音ちゃん？ 難しい顔をしてるけど」

場所は洗面所、平たく言えばお手洗いなわけだが、一際大きな鏡  
には確かにムツとした私の顔が写っていた。

昔から両親にもよく言われていた。

『笑えないのか？』

「もっと楽しそうに出来ないのか？」  
「何が納得いかないの？」

別段、つまらなかつたわけでもないし納得がいけないことがあつたわけでもない。何となく笑顔を浮かべるのが苦手だっただけで、心の中では割とその日あつたことを反芻したりして楽しんでいた。しかし、まあそんな親の態度で更に表情の乏しい人間になつた気がするけど、他人のせいにするつもりはない。そんな風に思えたのは私の思い人が私を止めてくれたから。叱つてくれたからだ。

「今度は笑顔。どうしたの？」  
「…何でもない。気にしない」

いけない、いけない。  
彼の顔を思い出したらニヤケ顔になつていたらしい。  
隣にいる可憐で綺麗でモデル体型な（身長は百八十位はあるのではないか）女の子　立川茜に出来るだけそっけなく返して内心を読み取られないようにする。

下手をすれば相手が不快に思いかねない私の返答を、かつてしつたるか右から左に受け流して私の髪を「人形みたいだ」と言いながらいじりだした。

彼同様、彼女にも相当にお世話になつているため、私も無下には出来ずにされるがままになつている。

彼の友達のちょこまかと動く姿が印象的な女の子　名前を思い出せないが、彼女曰く「立川さんはちっちゃいものに目がないです。私も何度襲われたことか」。あやうく私の純白が汚されるとこでした』だそうだ。

彼女の情報はそれなりに信用できるので最後のところ以外は鵜呑みにしていいと思う。

そんな猫みたいな習性を持つ彼女にいじいじされながら本題に入る。

「…で、どうしたの？ わざわざトイレにまで来て」

私がそう聞くと彼女の動きがピタリと止まる。

私は生まれつき人の心を読むことが出来るのでそんなことを聞く必要もないが、現在、そこら辺の力は閉じている。そんなことを出来るようになったのはつい最近のことで彼の協力なしにはなしえなかったことだろう。

まあ彼に対してはこの力をガンガン使っているわけだが、そこは気にしてはいけない。

「実は…、友達のことなんだけど……」

かなり言いづらそうに切り出した彼女の顔は真っ赤だ。

友達とか知り合いとかそこら辺の前置きは、自分のことだ！ と大声で叫んでいるのと同義な気がするがそれは置いておく。

「この反応、この前置き。正直、次の言葉が予測できる。たぶん、

『こ、恋の悩みが、あ、あ、あるんだって！』とかそこら辺だ。

「こ、恋の悩みが、あ、あ、あるんだって！」

まさかの大正解に頬がひくつくが彼女にそれに気付くほどの心的余裕は無かったらしい。

「…で？」

先を促してみるがもじもじしてなかなか言い出せない様子だ。

彼女は女の私から見てもかなり魅力的だ。

勉強では県内有数の進学校である我が学校で、一学期の一学年最優秀生徒賞をとるほど図抜けている。

運動では一年であり、何ら部活に所属していないのにひっきりなしに至るところから勧誘が来ている。理由は体育の時間の体力測定で校内一の成績を叩き出したからだ。

見ての通りの性格、前述した容姿、無言の内に発揮されるリーダーシップ、そして運動に勉強と非の打ち所がない完璧超人な彼女にも致命的な弱点がある。

それが蛙と恋愛沙汰だ。これらは如何な彼女でも、どうにも苦手なようでそれに直面したときは顔を青くしたり赤くしたりしている。

「な、なんかね、その友達には彼氏がいるらしいんだけど……」

「…よくある話」

私が無言で彼女の言葉を待っているとたっぷりと間を持って話し出した。

一見、何らおかしい話ではない。高一とは多感で恋多き年代だ。斯く言う私も彼に熱烈攻撃中である。

まあ、彼女の言う『友達』はイコール自分のことと捉えて問題無さそうなので間接的に恋愛相談を受けていると考えてもよいのだろう。というか彼女は未だに、自分があの小さい男の子と付き合っていることがバレてないと思っているのだろうか？ それに気付いていないのはいつも彼女に勝負を挑んでは負けている北条さんくらいだ。

「そ、そのね、彼との関係はうまくいってると思うんだけどどうにも相手の押しが少ないと思うんだ。……って友達が言ってたの！」

この期に及んで未だ隠し通そうとする気概を汲んでまあ、知らない振りを続けてみる。

「たぶん、大丈夫」

「ほんとかな……？」

私の根拠のない言葉に更に心配そうな声を出す彼女。

一応、私も彼女の友達だ。何かしらの言葉をかけて彼女を勇気づけてあげたいとも思う。

「…彼の心の中は彼女でいっぱい。思いが空回りして動けないだけだと思う。男女とはそんな感じ。それでも不安なら……」

そう前置きしてから、私は鞆の中に入っていたハウトウ一本（女の夜這い初心者編）を片手に彼女の説得を開始した。

自分の過去をあることないこと脚色しながら真君に話していた僕は少し長めにため息をつきました。

「アルフにそんな過去があったなんて…」

真君は僕の話聞き終えて目を潤ませていました。

ちなみにアルフとは架空の小説の架空の人物です。自分のみつともない過去を赤裸々に話すのはさすがに恥ずかしかったので小説の話ということにして話していました。危ういところもいくつかありましたが、なかなかうまく誤魔化せたと思います。

…で、どうです？ 決心、と言いますか心の整理はつきましたか？  
「……………うん。覚悟完了だよ」

先程までの弱々しい瞳が嘘のように今は覇気で満ち満ちています。  
なにか最後の方は『友達の』恋愛相談ではなかったように思いますが、やる気を出しているところに水を差すのも気が引けますし、再び華麗にスルーしようかと 思ったのですが。

隣の通路を歩いていた学生集団の鞆が波音さんの飲んでいたオレンジジュースを倒してしまいました。

「あー、カバン汚れちゃった」

「ハハハ！ ばっかじゃねーの」

「きったねえな、オイ！」

まさか物理的に水を差されることになるとは、とため息をついてテーブルの上のジュースを拭こうとした時に、学生集団から出てきたのはこんな言葉でした。

ムカツときたのも事実です。ですがここでことを大きくしてもお店に迷惑です。それにクイナさんの件もありましたから、うかつに動くのはちよつと避けたい…

「ねえ、まずはこっちに謝るのが先じゃないの？」

と思っていたのですが、真君は彼らの態度が気にさわったのでしよう。ムツとしながら彼らに食って掛かります。元来、正義感の強い真君ですからガラの悪そうな学生集団にも気後れしないんですね。

「ンだどっ？」

「テメエらがそんなとこに座ってんのが悪いんだろ？」

それに対して、ヤクザよろしくに肩を怒らせていちゃもんをつけてくる茶髪の男子学生の顔を見て…妙なものを感じました。

…あれ？ 前にどこかで会いませんでしたっけ？

「アアツ!? んな訳ね…………… ああああツ！」

僕がカクリと首を傾げてその男子学生に問い掛けると、彼は一瞬眉を寄せましたが次の瞬間には声にならないといった様子で悶絶しはじめました。

それにつられるようにして後ろにいた男子学生の何人かも同じような表情を浮かべています。

その様子を見るに、僕と彼らにはなにがしかの接点があるのでしよう。

えー…………… あっ、思い出しましたよ！ 件の事件で僕がぐりぐりくだんと縄で縛った人たちじゃないですか！

ポンと手を打って立ち上がる僕に恐怖で強ばったままの表情が張り付いている数人の男子学生。意味がわからずにポカンとしている真君と残った男子学生数人。

時が止まったように静まり返った状況の中、最初に動いたのは僕のことを知らない男子学生でした。

とりあえず倒すべき敵として判断したのでしょうか。先陣をきる形で飛び出して来たのは僕よりもだいぶ大きな人です。

僕を掴んで動きを止めようとしたのか、腕を広げて走ってくる彼に僕もスルリと近付きます。

距離は数間歩。

彼の手が僕の肩を掴むより間合いをつめた僕の掌が彼の腹部にそ

えられる方が幾分か速かったようです。

軽い踏み込みと重い踏み込み。

緩やかなスピードと瞬発力をいかした短距離走のようなスピード。  
絶対的な体格差。

僕には、突進してきた彼に勝る有利な条件はないはずなのですが  
吹き飛んだのは彼の方でした。

ずっとずっと昔の話です。

裕福な家に拾われた僕と義姉さんは、いの一に叩き込まれたこ  
とがありました。

それは単純に身に振りかかる火の粉を払うだけの力とそれを行使  
するだけの技術でした。

その中でも、身体の小さかった僕には義母<sup>かあ</sup>さんが独自に練り上げ  
た、ある格闘術をことさらみっちり教え込まれました。

それがこれです。

「知ってましたか？ 人っていうのはただ歩くだけでもとてつもな  
いエネルギーを使ってるんです。だってそうでしょう？ 日常的に  
何十キロもある体をいとも容易く動かしているんですから」

呆然とその場に立ち尽くす彼らが聞いているかはわかりませんが  
僕はことさらゆっくりと話し続けます。

ちなみに吹き飛んだ彼は気を失ったまま通路に転がっています。

「だから、です。その力の流れを障害しないようにすれば、強い踏  
み込みも力もスピードもあまり必要ないんですよ。……もちろん床  
がすり減るような訓練と魂がすり減るような応用訓練は最低限必要  
なんですけどね」

自然、カタカタと笑い声が漏れてしまうのは昔の修行と称した

死業』を思い出したからです。

山奥にいる茶色くて大きくて八チミツが大好きなああの生き物とか、遠くアフリカとかの川辺にいるバナナが似合うあの生き物とかとの衝撃的な出会いは今も鮮明に思い出されます。

「そんなご託はいいんだよ！ 動くんじゃねえ！」

ヒステリックに叫んで僕を制止するのは最初に僕と会話していた男子学生でした。

…男の子のヒステリックはみつともないんですよ？

「うるせえ！ 減らず口叩くな！ こいつがどうなってもいいってのか？」

取り出していたのはずいぶんと切れ味の悪そうなサバイバルナイフでした。そのナイフで僕の隣の真君を指しています。

…知ってますか？ ナイフって切れ味が悪いと刺されたとき痛いんですよ？ 傷口から化膿もしやすいですし。

「だからうるせえって言ってるんだろ！」

そう叫びながら駆け出す先には真君がいます。彼を捕まえて僕の動きでも封じようとしているのでしょう。お店の中は狭いですが乱戦になれば僕とて彼を守りきれぬ自信はありません。

いい狙いです。ですが残念ながら彼には…

「……真君に、何してるんですか？」

絶対守護人形ゴレムがついているのですよ。

結局、お手洗いから帰ってきたばかりの『ゴーレム』こと茜さんが真君に危害を加えそうな輩を、その規格外な身体能力を存分に使って地に沈めていきました。

さながら拘束具が外れた汎用人型決戦兵器のような暴走っぷりでしたが、一人も重傷者を出さなかったところから一応は理性もあつたようです。

一方僕は、軽々空を飛ぶ(飛ばされている)学生たちが他の人たちに迷惑をかけないように避難してもらったり、備品を壊さないように彼らを受け止めていたりしていました。

そのおかげか、あれだけお店に迷惑をかけたのにお咎めはありませんでした。なんでも彼らにはお店側も困っていたそうで、ちょうどよかつたのかなんとか。

それにしたつて無罪放免とは…、店長さんもずいぶんと豪気な方です。

彼らの処遇をお店に任せて、好奇の視線から逃げるようにして僕らは帰路についたわけですが、途中で真君と茜さんが二人で話があると言つて別れました。

二人がどうなるかはわかりませんが余計な詮索や心配は不要でしょう。

唯一気がかりなのは、二人の別れ間際に波音さんがニヤリと笑つたことくらいでしょうか。

で、今に至ります。

時間は何だかんだで四時すぎです。少し遅くなりましたが問題ないと思います。

嫌がる波音さんを電車につめて、いつものようにニッコリマートによります。

晩ごはんたるしょうが焼きの材料を買い、ついでに義姉さんの好物であるアロエヨーグルトなども買っておきます。

物で釣るといふのはあまり好きじゃないのですが、おそらく遅くなったことをぶちぶち怒っているであろう義姉さんを懐柔するには必要不可欠なものでしょう。

怒っているようにみせて、心の中ではいつも笑顔を決やさない。

太陽のように、ひまわりのように、底抜けに明るい彼女はぶつぶつと文句を言いながらもきつと僕を許してくれる。最後には笑顔をを見せてくれる。

そう、思っていたんです。

『…………一人に、……………しないで』

義姉さんの涙を見るまでは。

第四話 放課後でいず おまけと絶対守護人形（後書き）

わかっていたんです。知っていたんです。  
もしかしたら、こうなってしまうのではないかと。

僕はきつと、忘れたかったただけなんです。  
僕の罪と義姉さんに負わせた心の傷を。

次回『おそく起きた朝に』

…僕の護りたかったものは

## 第五話 おそく起きた朝に

少年は夢を見ました。

それはとても懐かしい夢です。

大きな大きな家がありました。おいしいおいしいご飯がありました。そして何より暖かい家族がありました。

まるで絵本の中のようなそれは、孤児院にいた頃から求めていたモノで、大好きな人に恥ずかしさに顔を赤らめながらもつい話してしまうほど夢と希望に満ち溢れた青写真。

それが突然に叶ってしまったのです。少年は純粹に、ただ純粹にそれを喜びました。

ゆつくりと、歯車が動き出したのにも気づかずに。

まどろみの中から完全に目を覚ましたのはつい先程のことでした。いつもと違うところに置いてあるデジタル時計に目を向けると七時三十分と表示されています。

あれ？ タイトルと違うよ……ゴニョゴニョ。

脳内自動ツッコミ機能を解除してぼーっと天井に視線を這わせる僕ですが、不意に隣でもぞもぞと動く気配を感じました。

「……んんん」

寝言と言いますか呻き声と言いますか、そんな声をあげたのは僕

の腕の上で眠る義姉さんです。  
僕たちは今、義姉さんの部屋にある少し大きめのベッドで横にな  
っているのです。

やや……、一応説明しておきますが僕たち、服は着てますからネ  
？ と言いますか二人とも制服なんですが。

結局、あの後そのまま寝ちゃったんですね……。

腕の上でうごめく髪の毛の感触にこそばゆさを感じながら空いた方の  
手を義姉さんの顔に近づけます。

涙の痕が残っている頬をなぜ、少しだけ罪悪感に苛まれます。

『一人に……しないで』

胸にズキンと痛みが走り、たまらずに義姉さんから視線を外しま  
す。

『護るから……今度は絶対に、ボクが護るから』

無責任に言い放った約束事が頭の中をぐるぐると回っています。

僕はきつと、それを言うことで少しでも自分の中の罪悪感を和ら  
げようとしたのですよ。

義父さん、義母さんが死んだという情報が流れてから、関係者の  
人たちの搾取が始まるまではそれほど時間はかかりませんでした。

まるで最初からそうなるのがわかっていたような手際の良さで債  
権や株式、その他を僕たちの知らないところで根こそぎにしてい  
きました。

子供であり、経済的な知識など皆無に近かった僕たちでしたから、なすすべなくそれらを喰い破られ、蹂躪されていきました。メチャクチャにされたのはなにも資産だけではありませんでした。心も、それに引っ張られるように体も。

時計の秒針のように確実にゆっくりと。掌の中の砂のように確実にゆっくりと。

気が付けば僕の前には倒れている義姉さんがいて、僕は膝をついていました。

『一人に……しないで』

その時、義姉さんが漏らした一言は、僕のその後の人生を決めました。

…ダメじゃないですか。

ぼつりと、頭の中で考えていたことが口からこぼれました。

わかっていたはずです。

義姉さんがあの一件以降精神的に脆くなっていることを。たまに幼児退行のように幼い部分を見せることを。なのに、僕は……僕は……

「そんな悩まなくてもいいんじゃないか？」

思考の渦に飲まれそうになった僕に、聞き覚えのある男性の声が

掛かりました。

声の発信源、先程まで閉まっていた部屋の入り口にはキツネ目にビシッと決めた黒髪、それと対照的によれよれのスーツを着こんだ長身の男性がコーヒーカップを片手に壁に寄りかかっています。

「久しいな、坊。一年ぶりくらいか？ 相変わらず女難の相が浮かんでるぞ」

…余計なお世話ですよ竜也さん。あと最後に会ったのは二ヶ月前です。

そうだったっけか、と笑いながらトレードマークのキツネ目をさらに細めて笑うのは僕たちの恩人、この家や日々の生活費を他の人たちから守り抜いてくれた義父さんの側近である水無月<sup>みなづき</sup>竜也さんです。

「坊にしては珍しいな、こんな時間まで眠ってるなんて」

…土日くらいはゆっくり寝かせてください。

「ハハ、なんか言うことがジジ臭いな」

…放っておいてください。

昨日は金曜日でした。新学期始まってそうそうに土日と二日休めるのは嬉しいことです。

特に今日みたいな日は、です。

「それにしても、その、なんだ……？」

…どうかしましたか？

眉根を寄せて微妙な顔をする竜也さんに僕は自由になっている首だけを傾げて聞いてみます。

「坊も意外と大胆なんだな。義姉の部屋に夜這いとは……。しかも制服プレイだと？　ちくしょう……。羨ましいぞ、ちくしょう……。っ！」

「いやいやいやいや、もうどこから説明すればいいかわからないんですが。てかもう最後の方は僕もツッコミきれませんからねっ！？」  
「しかもだぞ！？　そういうオプシヨンは別料金発生のスステムがあつてそれがまたけっこう高いんだ。けど一度それを体験すると俺の「ピヨピヨ」が「ピヨピヨピヨ」で……」

事のあらましを説明しようと試みましたが残念。僕の話をお聞きせず、に竜也さんはぶつぶつとなにかを呟いています。

ちなみに「」内は不適切な発言だったのでヒヨコの鳴き声を被せておきました。かわいいですね。

この小説のジャンルが変わってしまった前にどうにか止めなければ、と頭を捻っている。援軍は思わぬところからやってきました。

「ん……んんん……」

義姉さんが漏らした寝言です。

それに気付いた竜也さんはぶつぶつと呟くのを止めてこちらに向き直ります。

「……こんなところで騒いだら嫌なこと起こしちゃうか。とりあえずリビング行くぞ」

心持ち、声のトーンを下げた竜也さんに従い、腕を義姉さんの頭の下から引き抜いて替わりに枕を入れます。

最後に義姉さんの寝顔を見ると、どこか悲しげな表情をしている、気がしました。

コーヒーの香ばしい匂いがキッチンを占領するなか、それを切り裂いたのは僕の話の話を黙って聞いていた竜也さんでした。

「ふむ、それで結局お前はどうしたいんだ？」

新しく入れ直したコーヒーに砂糖を大量投入しながら竜也さんが僕に話を振ってきました。

僕たちの事情をおおよそ把握している竜也さんに説明をはじめて十数分。話しながら気持ちの整理をしようとしたのですが……。

…正直、どうすればいいのかわからないんです。

「ま、そうだろうな」

僕が漏らした一言に、気抜けするほどあっさり竜也さんが肯定しました。

なんとなく怒られるかと思っただけに意外でした。

「別に坊を怒る必要はないだろ」

僕の顔色から心中を察したのか、そんなことを言いながらコーヒーカップに口をつけました。

「やりたいことなんて分からないやつの方が圧倒的に多いんだ。何だかんだで就職なり恋愛なりして過ごしちゃいるがみんなそれを本当に求めちゃいないからな」

…そんなものですかね？

「そんなもんさ。人はそういうジレンマの中で生きてるんだ」

「コーヒーがまだ苦かったのか、はたまた嫌なことでも思い出したのか、苦い顔をして言葉を吐き出す竜也さんは虚ろげな瞳で天井を見上げています。」

… 実験ですか。

「まあ…… 肯定だな。あの人達に拾ってもらうまで、俺もぼちぼち悪いことに手を染めてたんだ。生きるためにな」

あの人 義父さんと義母さんのことでしょう。あの人たちは底抜けにいい人たちでしたからきつと竜也さんもお世話になったんでしょうね。かくいう僕も、お世話になりっぱなしだったんですが。

「坊の人生はまだまだこれからだ。もちろん嬢もだが、まだ考える時間は山ほどあるんだ。なら考え続ける。自分の生きる道と、嬢との関係をな」

… 考えても答えが出なかつたら？

「出せ。それが坊、お前の命題だ」

いつものようにひょうひょうとしながら、それでいて強い調子で竜也さんが断言します。

話はそれで終わりだと言わんばかりに鼻を鳴らしてコーヒーカップに口をつけましたが、その中身が無くなっていることに気付いて立ち上がりました。

いつもとどこか雰囲気が違う竜也さんの姿を見て、僕は少しだけ考えた後に口を開きました。

… 竜也さん。

「なんだ？」

…シリアスは似合いませんよ。  
「うるせーよ！ わかってるよ！」

僕の言葉に先程以上に苦い顔をして怒鳴る竜也さんでした。

なんやかんやで竜也さんは自作のコーヒーを飲み干して帰っていききました。

相変わらず元気な人だなあ、と呆れると同時に感謝の念も沸いてきます。

たぶん僕らの状況をどうにか知って、わざわざ朝早くから駆けつけてくれたのでしよう。

そういうお節介なところも昔と変わりません。

けど、本当に……ありがたかったです。

…よいしょ、っと。

腰を上げ、空になったコーヒーカップをカチャカチャと音を立てながらキッチンに運んでいきます。

早く洗わないと食器にコーヒーの跡がついちゃいますからね。

水音。食器の音。外から聞こえてくる子供の声。

色々な音が混ざりあって、それでいて静寂を称える奇妙な時間が過ぎていきました。

…こんなところでしょうか。

タヌキのアップリケが付いているエプロンを外して手を拭きます。テレビの上に乗っている時計はいつの間にか十時を過ぎていきます。

何となく主婦の悲哀を感じながらご飯の用意をするか思考します。  
お米だけでも炊いておきましょうか？ あー、けど……。

義姉さんの昨日の様子を思い出して、少しだけ心が折れそうになりましたが同時にあの様子だと夜ご飯は食べていないだろうとも思  
い至りました。

……。  
……。

よし！ 今日のお昼は冷蔵庫の大掃除と称して思い切り豪華に  
きましょう！

グツと握りこぶしを作って気合いを入れたところでリビングのド  
アがやや乱暴に開きました。

竜也さんが帰った今、この家にいるのは僕と義姉さんだけで、そ  
のドアの向こうに立っているのはやっぱり義姉さんです。確かに義  
姉さんなんです……。。

…な、なぜに麦わら帽子……ですか？

「海賊王に、私はなる！ ……じゃなくて」

水色のワンピースに麦わら帽子と典型的な夏ファッションな義姉  
さんに、今は秋だと教えるべきか悩んでいると、当のご本人である  
義姉さんはビシッと北の方角を指差しています。

「野郎共ッ！ 海に行くわよ！」

…そっちには山しかありませんよ。

「帆を張れ！ 酒を用意しろー！ ヤイサホー！」

僕のツッコミを華麗に無視する様は、まさに海賊王のそれでした。

## 第五話 おそく起きた朝に（後書き）

用意を済ませました。

日焼け止め、ピクニックシート、おにぎりに水。

濡れてもいいように替えの靴下をリュックに詰め込んだ所で僕は思わずため息を吐いてしまいました。

…何にせよ、元気になってくれるのなら問題はないのですが。

次回『海と夢のあとに』

…義姉さん、スイカは持っていきませんって。

## 第六話 海と夢のあとに

交錯する思いは、届いているようで届かず。

伝えたい言葉は、口に出せているようで出せず。

届けたいぬくもりは、稚拙な行動でしか現せず。

振り切ったと思った過去は、いつまでもあなたの目の前に立ち塞がり続ける。

……まるで、あなた自身の墓標のように。

「うわーっ！ 広い！ 広いよ海！」

砂地に足を取られながら歩く僕の前で、齢十七になる義姉さんが非常に新鮮なりアクション取っています。

少し恥ずかしいのですが、それくらいいい反応をしてくれると連れてきたかいがあるというものです。

それにしてもです。

…意外と人が多いですね。

「そだねー。しかもカップルばかり」

そうなのです。すでに秋だというのにこの砂浜には意外と人がいて、なおかつそのほとんどがカップルなんです。

なんと言いますか……、目のやり場に困る光景です。

…有名なデートスポットだったりするんでしょうかね？

「そ。この前テレビでやってたんだよ。静かでキレイな穴場だ、つて。やっぱりデートスポットになっちゃってたね」

…分かってて来たんですか？

「分かってて来ました！」

風で飛びそうになった麦わら帽子を押さえながらニヤリと笑う義姉さんを見て、思わずため息が漏れます。

…なんでまたそんなところに

「いいじゃん、いいじゃん。たまには”でいと”しようよ！」

一見ふざけた様子の、それでいて一切含みのない義姉さんの言葉に心臓が一瞬、凍りつきました。

「……………ん？ どしたの？」

…な、何でもありません！ 荷物を置く場所を探しましょう！

内なる動揺を見透かされないように顔を逸らして辺りを見回します。

そんな僕の些細な抵抗は義姉さんの次の行動で見事に打ち崩されます。

僕の腕をぐいと引き寄せると、そのまま抱きついたので。

「あっちなんて空いてていいんじゃない？」

…あ……………あう。……………え、ええあそこにしましょうか。

「んん、どうしたのかなあ？ そんな玉のような汗をかいてえ？」

…にゃ！？ や、やめてください！ 耳はッ！ 耳わぁッ！！

何とというか、形容しがたい妙な感情と闘っている僕の耳を義姉さんの息がかけります。

全身の毛が逆立つような感覚に身震いが止まらず、同時に顔が赤く染まっていくのが自分でもわかりました。

「気持ちいいくらいの反応だねえ。義姉さん”いぢめ”がいがあるよー」

…のおおおおおおおお！！

身を振って逃げようにも捕縛された腕が抜けずに奇妙な踊りを踊っています。

あれ？ ものすごく既視感が……？

「んふふ、もう少しいぢめてもいいんだけどとりあえず座ろっか」

ひとしきりくすぐられた後、義姉さんが僕を引きずるように空いている場所に連れて行きました。

何か……、何か大切なものを失った気分です。

「んんんん、潮の匂いつてたまに嗅ぐと気持ちいいよねえ」

…まあ、そうですね。

僕が引いたピクニックシートの上に座って何事もなく笑う義姉さんにどんな表情かおをしていいかわからずに微妙な顔で微妙な相づちを打ちます。

「……笑えばいいと思うよ」

…ほっといてください。

「ぶはっ！ 冷たいなあ」

楽しそうに笑う義姉さんの隣に座ると、視界にはどこまでも続くような海が広がっていました。

なるほど……確かに穴場ですね。

思いのほか綺麗な景色に思わず息を飲みます。

「……前に海に来たのは施設にいた時だけ？」

……そうでしたね。随分前に行ったきりだったんでしたっけ。

「……そかそか。やっぱりいいね、海は。私は山よりも海派だよ」

……山は暑いですからね。

苦笑いしながらいつものように、どうとということもない会話をします。

何も海でそのような話をしなくてもいいかもしれませんが、何となく幸せです。

少しだけ沈黙が落ちます。

波が寄せては返し、寄せては返し。何回かそれを繰り返した時、義姉さんが口を開きました。

「……ごめんね」

一瞬、何故謝られているのか分かりませんでした。それが昨日のことだと思いつくまではそれほどかかりませんでした。

「あの日の朝にね、すごく怖い夢を見たの」

話し始め、すぐに俯いてしまった義姉さんの表情は、長い髪と麦わら帽子に隠れて窥えません。

僕の手のすぐ隣にある義姉さんの手は小刻みに震えていました。

「一人きりになっちゃう夢だったんだ。みんないなくなっちゃって、暗闇に一人取り残されちゃう夢」

子どもみただよね、と呟いて少し笑う義姉さんはそのまま話を続けます。

「……けど、朝起きてヒロの顔見たら、そんなこと忘れちゃって。ああ、ヒロはいつも隣にいてくれるんだって思って」

手の震えが少し大きくなります。まるで何かに脅えるように、カタカタと震えています。

「だから、ヒロと離れるのがすごく怖かったけど、サキもいるし他にもいっぱい友達もいるから怖くないって言い聞かせて学校に行っただ」

ぼたぼたと何かが落ちる音がしました。たぶんそれは

「サキと別れて、家に帰って。しばらくは大丈夫だったんだけど、ちよつとしたら震えが止まらなくなって、涙が止まらなくなって……」

風が吹いて、義姉さんの麦わら帽子が飛ばされました。

「もしかして、このままヒロがいなくなっちゃうんじゃないかって。あの夢が本物になっちゃうんじゃないかって。本当は私のことわづらわしく思ってた、そのまま帰ってこないんじゃないかって。怖くて怖くて……！」

…僕はここにいます。

震えている義姉さんの手に触れます。手がぴくりと跳ねて、やがて落ち着いたのか震えが止まりました。

「けど……」

…けどもクソもありません。僕は今、あなたの アキの隣にいて話を聞いて、話しをしています。

少し、汚い言葉使いましたがそんなこと構ってられません。

僕は竜也さんに会ってから……いえ、そのずっと前から考えていたことを口に出しました。

…僕はアキの隣からいなくなりません。例え何が起ころうとも、アキが望むなら、僕はいつだってあなたの近くにおいて、あなたの手を握ります。だから……

握った手に少し力を入れて、ハッキリと義姉さんに向けて言います。

「泣かないでください、お願いします」

嗚咽に震えていた義姉さんの身体が、ピクリと止まりました。

不意に空いていた右の手を引っ込めると、ぐいぐいと顔を拭い始めました。

「……そだね、ごめんね。ありがと、もう大丈夫だよ」

上げられた顔には少しだけ砂がついていましたが、浮かべられていたのははにかんだような笑顔でした。

そして自然な動きでコテンと僕の肩に寄りかかってきました。

…え、えーとこれは。

「充電中です。バッテリーを抜き差ししないでください」

どきまぎしている僕をよそに、義姉さんは目をつむったままじっとしています。

若干、声が上がっているように聞こえましたが何なんでしょうか？

雨が降る気配もないのに雲がかかった太陽を見て、少しだけため息を吐きました。

ありがとね、ヒロ。

『僕はいつだってあなたの近くにいて、あなたの手を握ります』

ヒロは優しいね。

私、本当に嬉しくて。

けど、少しだけ悲しくて。

たぶん、ヒロは私のことを思って、私のためにそう言ってくれたんだよね。

けどね、ヒロ。私が本当に聞きたかったのは、そんなことじゃないんだよ。

私が聞きたかったのはヒロの本当の気持ちなの。

姉びつくばん+ (ぷらす)

嫌いでも、好きでも。何でもよかった。

ヒロ、あなたは優しすぎるよ。

第六話 海と夢のあとに（後書き）

誰が泣こうとも世界は淡々と廻り続ける。  
誰かが辛くても世界は黙々と歩み続ける。

……人の想いなど顧みず、日常は再び動き出す。

次回『学園の大会長』

お楽しみに。

## 第七話 学園の大会長

大会長、それは尊きもので、崇められる存在である。

大会長、それは全ての生徒の代表であり、生徒会長の中の生徒会長である。

大会長、それはあらゆる手段でもって、学校をより良い方向に進める人間である。

大会長、間違っても大怪鳥ではない。決して、桃色のアイツではない。

…えーと、どうしたんですか？ タロ君？

「何でもない。ただ、ただただ申し訳ない」

…いやいやいや、土下座とかしちやってる時点で何でもないとかな  
いと思うのですが。

土日が過ぎ、いつものように学校に来て教室に入ると、僕の隣の席でタロ君が土下座をしていました。

状況がつかめません。現時点でわかるのはタロ君の謝罪対象が僕であることと、その理由が彼を土下座に駆り立てるほど重いものだということだけです。

…何かあったんですか？

「何があったかは言えない、殺されるから。……あと新宮、お願いだから黒板消しはやめてくれ」

すでに頭が三色くらいになっているタロ君が、波音さんのサイコキネシスで宙に浮く黒板消しを必死に止めようとしています。

「…ヒロ君イジメたら、ダメ」

「ぶはっ！ だから俺のせいじゃないんだって！」

顔面に黒板消しが直撃したタロ君はそれでも何とか弁明しようとして四苦八苦しているわけですが、波音さんはそれを聞き入れません。まあ、このまましばらく放っておいてもよいのですが、さすがに気の毒なので波音さんにストップをかけます。

「お願いだ。もう少しはやく止めてくれ……」

…まあ、あまり愉快な話してもなさそうなのでこれくらいは前もつて。

「…当然」

落ちついた波音さんの頭をなでつつポケットからハンカチを取り出してタロ君に差し出します。

無然とした顔でそれを受け取って頭を拭くタロ君はふと諦めたような表情でため息を吐きます。その様子を見て何となくピンと来ました。

…まさか『あの人たち』が動き出したんですか？

「まあ……そ、その何だ。俺から何とも言えないなあ」

明らかに動揺している様子のタロ君に僕は確信を深めます。

タロ君が話したからないのは、『あの人たち』のことですから盗聴器の一つ二つ自分に仕掛けられていると踏んでいるからでしょう。ちなみに先程からどごそのボスキャラみたいいな呼び方をされてい

るのは……

「おはよー、どうしたの？ 朝からそんなに騒いで」

「おはようございます。それにしても……チョークの粉が凄いいんですが……」

声をかけられた方を向くと、キョトンとした表情の真君と茜さんが並んで立っていました。

登校したばかりだと思われる二人を見て、逆に僕が目を丸くします。

「おはようございます。……ところで今日は二人で学校に来たんですか？

「ん？ うん、そだよ。それがどうかしたの？」

僕は苦笑いを浮かべて首を横に振ります。

(一応)クラスの人たちには付き合っていることを隠していたので、二人と一緒に学校に来たことはありませんでした。もちろん何人も集まって登校した時には一緒になることもありました。

その二人が急に一緒に登校してきたのですから、この休日に関わらずに何か転機となることがあったのは想像に難くないわけですが……

「…作戦、通り」

ポソリと呟いた波音さんの言葉を聞いて、この裏で暗躍している人物が誰なのかは何となくわかりました。

とは言え、それが結果的にいい方向に進んだのは目の前の二人を見ていれば明らかかなわけですからその行動を咎める必要はないでしょう。と言いますか、僕も過去の話なんかしちゃって真君を焚き付

けてしまったわけですから何も言えません。

「…共犯、共犯」

何も言えません。

取りあえず、憂さ晴らしに波音さんの頬をビヨンビヨンと引っ張っている、不意に校内放送を知らせる軽やかなチャイムが鳴りました。

基本的に校内放送は重要なことを伝えるときにしか使われないので、自然、クラスの中に静寂が落ちます。

「……えー、テストテスト。っとオーケーですね……。はい、ではこれから呼ぶ人は急いで生徒会室に来てくださいねー」

どこか気抜けしそうなほど明るい声が静かになった教室に響きま

す。  
何となく場違いなその声に教室が少しざわつきます。  
気のせいでしょうか？ 胸騒ぎが治まりません。

『一年の橘くん、至急生徒会室に来てください。生徒会長が呼びびですよー』

じゃあねー、とフレンドリーに校内放送が終わりました。

ふと、隣を見るとタロ君が再び土下座していました。

とりあえず生徒会室の前まで来たわけですが、何かもつ、猛烈に

帰りたいです。

…失礼します。

とは言え、そんなことは出来ません。

この学校の生徒会長殿は圧倒的な知識と人脈でもって一年後期に前会長を蹴落とし、その後釜に就任。以後、今に至るまで（会長さんは現在三年です）独裁政権を続けているわけです。

当然ながらそのような強硬な行動はあらゆるところで敵を作るのですが、それら反抗勢力をさらにあらゆる手段にて撃破していきました。

現在に至っては、何人かの教師を裏で操っているとかいなとか。実質、学校を牛耳っているのはあの人なんでしょう。

そんな人に呼び出されているわけですから、逃げるにも逃げられません。

「あ、ヒロくん！ 久しぶりねえ」

…お久しぶりです、奏さん。とりあえず放してください。苦しいです。

扉を開けざま、おっとりとした顔が印象的な茶髪の女性が手に持ったティーカップを置いて抱きついてきました。

僕も男の子ですから、こういったスキンシップはやめてほしいです。義姉さんにも常々言っています。女性はそんな簡単に男の人と触れ合っちゃいけないんですよ？

「だって久しぶりなんだもん。遊びに来てって言ったのに全然来ないし」

…タロ君に迷惑がかかってしまいますからね、しょうがありません。

室内に視線を巡らせると、白猫が眠っている大きな机に向かってパソコンのキーボードを叩いている眼鏡をかけた金髪の女性に行きつきました。

僕のその視線に気付いたのか、その女性が顔を上げました。

「久しぶりだな、義弟君<sup>おとうじ</sup>。大きくなったものだ」

…お久しぶりです、琴音さん。あと、前にも言ったと思いますが、その『義弟』というのやめてもらえませんか？

「何故だ？ 奏の伴侶となる相手を義弟と呼んで何の問題があるというのだ」

…問題山積です。

「私には無いけど」

…僕にあるんですよ。

ため息を吐きながら、とりあえず奏さんを元いたソファーに座らせ、慇懃に気をつけの姿勢などとってみます。

二人の顔を見て、僕は改めて心の中で思っています。ああ、似ていないな、と。

伊田奏さん<sup>いだかなで</sup>、二年生。茶髪をカチューシャで止めオデコ面積が広い方です。ちなみに副会長さんです。

伊田琴音さん<sup>いたことね</sup>、三年生。長い金髪をなびかせて目つきが鋭い方です。さながらその雰囲気はライオンでしょうか。言うまでもなく會長さんです。

苗字を見ればわかると思うのですが、タロ君のお姉さんたちです。

「ふむ、奏が気に入らんか……。姉の私が言うのもおかしいが奏は

いいぞ、性格とか身体とか感度とか」

「やだなあ、お姉えーったら！」

…もうツツコミを放棄してもいいでしょうか？

なんと言いますか、無性に泣きたくなくなってきました。

…それで、用件はなんでしょうか？ もうすぐ一時間目が始まってしまふのですが。

「ああ、その件は安心してもらって構わない。後々教師の一人でも脅せば済む話だ」

何か今、さらっと恐ろしいことを言いました。

とりあえず今のことは全力で忘れることにします。

「我が校がこれから冬に向かって行事が詰まっているのは知っているな？」

…ええ、まあ、知っていますが。

突拍子のない琴音さんの言葉。僕は思わず目を丸くして返事します。

—昨年までは夏に体育祭をやって秋に文化祭をやる、というスタイルだったらしいのですが、昨今流行りの地球温暖化なる理由から夏の体育祭は秋に変更になったのです。

そのため、現在は秋と冬の間で学校の二大行事を消化しなければならなくなり、『殺人ローテーション』などと揶揄されるほど厳しい日程となっているのです。

「で、だ。本題なのだが、義弟君にはそれら行事の警備監督をしてもらいたいのだ」

…は、はい？

「何、手駒の心配ならいらん。部下には私の私兵も出す」

眼鏡の奥に怪しげな光をたたえてニヤリと笑ってとんでもないことを言い出した琴音さんに、思わず口ごもります。

「最近、物騒な輩が多くてな。変質者や他校の生徒に良いようにされては我が校の名誉に関わる」

…な、何で僕なんですか？ 僕はまだ一年ですよ？

「上に立つ者の年など、重要な物ではない。要はそれらを纏め上げるだけの能力があるかどうかだ」

…僕にそんな能力があるわけ

「いや、あるな。義弟君には人を魅了するカリスマ性がある。音楽祭での君の裏での働き、新宮波音の暴走抑止、及びクラスへの順応化、悪漢への大立ち回り……どれも凡人なら何も出来ずに立ち尽くすだけであろうそれを、君は立ち向かって解決した。それは非凡と称しても過言ではない」

一息にそう言うと、琴音さんは僕をじっと見つめます。  
何でしょうか……、少し動揺します。

「故に、奏の婚約者に相応しい」

もつと動揺しました。

もはやどこからツッコミを入れればいいのか分からないので、とりあえず華麗にスルーします。

僕がスルーするのを気配で察したのか、なかなかやるな、とぼそりと呟くと琴音さんは僕をじつ、と見据えてから視線を外し、口を開きました。

「では、警備監督の件、よろしく頼んだぞ。詳細は追って報告する」

…え？ 僕の意見は無視なんですか？

「ああ、問答無用で無視だ」

机の上に置いてあるパソコンの画面を見ながら、決定事項だと言わんばかりに淡々と話す琴音さんは不意に顔を上げ、僕の顔を見てから盛大に顔をしかめます。

僕の不満げな顔が気に入らなかったのでしょうか。ですが、時には僕とてこんな顔をします。理不尽な決定がなされようとしている時なら尚更です。

「今回、我が校に体育祭の喧騒に紛れて乗り込もうという計画を建てている不逞の輩の情報が事前に入っている。義弟君の友人の神津クイナ嬢は優秀だな」

…えっ？ ええ、そうですね。

思わぬタイミングで思わぬ人の名前が出てきたので、驚きのあまりすつきりとしらない返事を返してしまいます。

クイナさん、そんなアグレッシブな行動をとってたんですね…。

本人は空回りしていたと言っていました。その結果、生徒会に貸しをつくったのですから驚嘆すべき行動力です。しかもただの生徒会ではなくこの学校の生徒会です。その貸しがいかに大きいものか、考えるまでもないでしょう。

とは言え、僕は普通のスクールデイズが送りたいのです。余計なことに首は突っ込みたくはないのです。

…それで、何なのでしょう？

「『帝陵高校』。聞いたことない？ 割と有名なんだけど」

…帝陵ですか？ えー……あつ。

「覚えがあるだろう。義弟君がぼっこぼっここのめつたためつたにした連中だ。駅前のファーストフード店と商店街の路地裏だったか？」

何でそんなことまで……。それに路地裏の件はクイナさんが教えたとしても、ファーストフード店でのことはクイナさんは学校に行っていたのだから知らなかったはずですよ。と言いますか、どっちかというとならされたのは僕ではなく茜さんですよ。

「あれだけ大っぴらに暴れたんだ。クイナ嬢がいなくとも情報は回ってこよう。ちなみにあのチェーン店の経営をしているのは私の遠い親戚だ」

…そうですね……ってさらっとすごいこと言いましたね。あのファーストフード店、全国チェーンですよ？

「今更だな。我が家も、昔の君の家までとはいかんが名家だからな」  
心底つまらなそうに琴音さんは鼻を鳴らしました。

自分の家が有名なことに一切興味がないといった様子です。

…では、あの豪気な店長さんは？

「あれは店長ではなく取締役だな。ああして神出鬼没に出現しては社員と共に働きますのだ。管理職は暇らしい」

なるほど……。あれだけ豪気な人はそうそういないと思っていましたが、変わり者が多いと言われる伊田家の関係者というならば納得です。

「愚弟は凡庸だがな」

…愚弟はかわいそうですね、さすがに。

琴音さんは殊更冷やかに夕口君のことを罵ります。その口元が三日月描いていることから、彼女がいかに夕口君をいぢめることを命を賭けているかわかります。

「愚弟のことは置いておいて、本題に戻ろう。つまりその帝稜の者が我が校に攻め入ろうというのだ」

「まさか、僕への  
「復讐でしょうねー」

優雅に紅茶を啜りながら奏さんがにっこりと笑います。

実際問題、笑いごとではありません。

…僕のせいで他の誰かを巻き込んでしまうのは非常に忍びないのですが……。

「あまり気に病むな。あの高校の風紀の乱れは酷かったからな、遅かれ早かれこのような結果になっていたろう」

僕が頂垂れて過去の過ちを後悔していると、珍しく琴音さんのフオローが入りました。

それに驚いて顔を上げると、そこには不敵な笑みとともに、モノアイばりに光ってやまない眼光のお二人がいました。

「けど、可哀想ですねえ。お姉えの世代に学校に攻め入ろうなんて」「ああ、後悔してもらおうじゃないか。……それこそ、母なる海（羊水）に還りたくなるくらいにな」

嗚呼、今、何か殺人予告めいた言葉を聞いた気がします……。

本当は止めるべき現場なのでしょうが、僕にはいささか荷が勝ちます。

姉びっくばん + (ぷらす)

「うっふっふっふっふ……」  
「くっふっふっふっふ……」

もう、本当にごめんなさい……。  
未だ見ぬ帝陵の皆さんに、心の中で深く謝罪しました。

第七話 学園の大会長（後書き）

心なしかふらつく足取りで教室に戻ります。

教室の後ろから、しずーかに入室して席に着こうとしたところ、一時間目の社会の先生と目が合って……逸らされました。

琴音さん、あなたは先生のどんな弱みを握ってるんですか……？

次回『第一次お弁当戦争』

お楽しみに……。

## 第八話 第一次お弁当戦争へ勃発編

日本には『家事のさしすせそ』なるものがある。

曰。裁縫。

曰。躄。

曰。炊事。

曰。洗濯。

曰。掃除。

まあ、ベタと言えばベタであるが、これらを完璧にこなしてみせるのは決して容易なことではない。

今回のお話はこの『さしすせそ』の中の『す』に悪戦苦闘しながらも、果敢に勝負を挑む乙女たちの物語である。

なんと言いますか、形容しがたい妙な思考が頭を駆け巡っています。

いうまでもなく、そのメランコリックな気持ちの原因は琴音さんと奏さんに押し付けられたアレのせいなのですが、押し付けられるに至った理由が自分にあるのですから、何かぶつけようのないもやもやとした感情が僕の中でくすぶっているのです。

止まる気配のないため息に、自分自身びっくりですよ、はい。

僕は視線を手元から窓の外へと飛ばします。

青い空に薄い雲のコントラストが素敵です。都会のなかでもこれ

ほど美しい風景が見られるんですね。忙しい日常では見落としがちですが、改めてこうやって見ると日常の一風景も一枚の絵画になりえるのではないのでしょうか。

そう考えると、自然と笑みが浮かびます。

あつ、小鳥が飛んでますよ？ かわいいですね。

「……や、現実逃避中に悪いんだがノールックで野菜を切るのはやっぱ危ないと思うんだが」

「あ、すごい。見ないまま鮭切りでしたよ」

…ん？ どうしたんですか？ そんな微妙な顔をして。

隣でエプロンと三角巾を着けたタロ君と真君が僕を気の毒なものでも見るような目で見ています。

手を拭きながら二人の方に向き直ると、目が合ったタロ君が苦虫でも噛み潰したような渋い顔をして口を開きました。

「……やっぱ大変か？」

…ぼちぼちです。若干眠いですが。

「少し眠いぐらいじゃ料理しながら寝たりしないと思うんだがな」

「お願いだから無理しないでね……」

僕の言葉と様子に若干苦笑しながらタロ君がレタスを水で洗い、真君が心配そうな声をあげながら危なっかしい手つきでジャガイモの皮を剥いています。

はい、もうここまでくればこの時間に何をしているのかはわかりそうなものですが、今の時間は家庭科の定番、調理実習なのです。

お題は特にありませんでした。

事前に欲しい食材を報告して、男女別れて三、四人のグループを作り、好きなようにご飯を作れ、というひどくアウトなものだし

た。

なので、今回は普段家事をしている僕が指揮をとることになったのですが、昨日、例の警備の配置について学校の見取り図を持ってきてくれたクイナさんと夜遅くまで頭を捻っていたので思い切り寝不足だったりします。

この学校の塀は軒並み平均よりも高いので、登って侵入するのは不可能のように見えますが、それこそ本気になればハシゴでも台でも置いてよじ登ることは出来ます。

そうなると正規のルートにだけ人員を割くことが出来ず、どうしても学校全体に人を配置しなければいけません。

ですが、人員にも限界があるのでしよう。風紀委員の方々を警備に回すからうまくやりくりしてくれ、と言われてましたが、一学年二十人、三学年合わせて六十人　その半分は女の子で人員として計算出来ないのです、男の子三十人しか人手が見込めません。さすがに三十人程度では学校全体をカバーすることは難しいのです。

しかも襲撃が確実とあらば一人で見回りをしてもらうわけにもいきません。三人組スリーマンセル、或いは四人組フォーマンセルで動いてもらわなければいけないでしょうから、実質、目が届く場所はさらに狭まります。

あちらが一点突破を目指してくる可能性、分散して一斉に攻め入ってくる可能性、はたまたどうにかして学園内に侵入して内外から同時に食い破ってくる可能性、などなど考慮して配置を決めると、どうしても警備が薄い場所が出てきてしまうのです。

一応、その旨を琴音さんと奏さんに伝えたのですが、『了解した』としか言われずに割と混乱しています。任せられたからにはこれくらい自分で解決出来なければいけないんでしょうね……。

「ま、なんだ。あんまり大変なようだったら俺にも声をかけてくれよ。一応、身内が迷惑かけてるわけだしな」

「僕も。友達が辛そうなのは見てられないよ」

… んんん。心配を掛けてしまい申し訳ありません。

ふと、気がつくとは僕は自然に笑みを浮かべていました。

二人が僕のことを気遣ってくれているのが、申し訳ないと思う反面、すごく嬉しかったのです。

友達とは、いいものですね。

昔の僕は人と向きあうことを恐れていました。施設にいた頃は、話しが出来たのが義姉さんと園長先生くらいでした。

義父さんと義母さんに出会っても僕の人見知りはあまり改善されませんでした。初見の人とは口を聞かないどころか、目すら合わせない始末です。いつも義姉さんの後ろに隠れて様子をうかがっていました。

たぶん、自分のことを理解されることが、自分の心に踏み込まれることが怖かったんだと思います。

同時に、誰かを理解することをも恐れていました。誰かを理解することで、自分が自分を保つことが出来なくなるのではないかと考えていたからです。

まあ、今にしてみれば、何言ってるんだこのすつとこどつこいは！とか思ったりもするのですが当時の僕は真剣にそんなことを考えていたのです。

結果、全てを失ってしまった時に誰にも相談が出来ず、塞ぎ込んだ僕は義姉さんを傷つけてしまったのです。

瘦せた腕。

閉じた瞳。

白い天井。

繋がった点滴の管。

僕が僕のことには気がついたのは、義姉さんが倒れてからしばらくしてからでした。

「んー…、お前やっぱすごいぞ。そんな状態でも料理って出来るもんなのか？」

「心ここに有らず、って感じだね……」

…ふえ？ 何か言いました？

「んにゃ、何でもない。とりあえず包丁と火イ使ってたから気をつけるよ」

…え、はあ。

タロ君が苦笑い、というか呆れたような表情で手のひらを僕の方に向けました。

…えっと、何ですか？

「ほら、貸せよ。代わるから」

「じゃあ、僕はお鍋担当しようかなー」

…ええ？ じゃ、じゃあよろしくお願いしますね。

包丁だけでなくお鍋も真君に持っていかれてしまいました。

焦げないようにすればいいんだよね、とか、魚を捌くのはなかなか難しいな、とか言いながらガヤガヤと料理を始めた二人を見て、ようやく二人の意図に気付きました。

お気遣い感謝します……。

やっぱり、友達はいいものですね。

私は割と悩んでいた。

一応、生物学的には女になる私だが、家事全般はあまり得意な方ではない。特に料理は苦手な分野に入る。

”料理はセンスが必要である”

誰かが言った名言だ。全面的に同意せざるを得ない。多分に私にはそういったセンスが欠如しているのだと思う。

一カ月ほど前に、卵ーダースを漏れなく産廃にしたところで私はようやくそれを確信した。

ちなみに作るうとしたのはダン巻き卵だ。

「私は認めませんことよ！」

「…それでも私たちには何も出来ない」

「それでも認めたくないものは認めたくないのです！」

隣で先程からぎゃあぎゃああと騒いでいるのは巻き髪と喋り方がいかにもな感じのお嬢様 ほっじょつか 北条美佳だ。

ちなみにその目は、目の前で良妻賢母よろしく、エプロンを着けて料理を作り続けている長身の彼女 たか 立川茜を睨み付けるように向けられている。

今更説明が必要とは思えないが、一応説明すると、今は調理実習の時間だ。

そして、私と巻き髪の彼女は何も出来ないどころか、手伝えば間違いない目の前の長身の彼女の邪魔になるため、大人しく椅子に座

っているというわけだ。

まあ、本当に何も出来ない、というわけではない。

時折出る洗い物を洗ったりするなど、一応、現時点で私達に出来ることをやっているのだが、普段料理をしている人間はさすがに違う。最低限の洗い物しか出ないのだ。

詰まる所、暇なわけだ。

「貴女は悔しくないんですの!? 私は悔しいですわ! こんなところでも彼女に水を開けられていたなんて……っ!」

キーツ、とハンカチの端を噛んで悔しそうにしている彼女を見てから、鼻歌まじりにリズミカルに包丁を扱っている彼女を見る。

まあ、何というか、器が違うのだなと思った。

とはいえ、そんなことを迂闊に口に出す程、私は空気が読めないわけではない。ここは黙って生温かい視線を送るべきなのだろう。彼ならたぶんそうするだろうから。

はたと気がついてその彼に視線を移す。

今日は彼にしては珍しく何やら眠そうな顔をしていた。心を覗いてみたところ、思考も纏まっていなかったから、相当なのだと思うが。

…彼は虚空を見据えながら包丁を握っていた。

いや、もう言うまでもなく危ないのだが、それでいて危なげなく野菜を切っていた。

手際の良さは熟練の主婦を思わせる。

……ちよつと悔しくなってきたかも。

「あら！ ようやく貴女もその気になったようね。やはり一人の女としてこんな所で遅れを取るわけにはいきませんことよ！」

「……………」

私の手を握って目に炎を浮かべる巻き髪の彼女に、周囲から冷たい視線が注がれている。

何かと長身の彼女に突っかかる巻き髪の彼女とその取り巻き達、という構図はこのクラスになってから一ヶ月後にはすでに出来上がっており、今までに挑んだ対決の数は十や二十では足りない。

三人寄れば文珠のなんとやら、とは言うものの、長身の彼女のスペックはちよつと異常だ。前に言ったような気がするが恋愛沙汰と蛙以外はあらゆる分野において隙がない。

まあ、そうなるとアンパンのヒーローに毎度懲りずに吹き飛ばされるバイキンの悪役、という予定調和的な関係が生まれるのは想定範囲内であり、たぶん、卒業まで変わることのないパワーバランスなのだと思う。

「あの娘をギャフンといわせる方法……………」

とは言え、巻き髪の彼女も中々に頭が切れる。

それこそ、名家の跡取りとして恥ずかしくない程度にはあらゆる能力がある。

問題があるとするならば負けん気が強すぎることで、次のパートナー候補が私だということくらいだ。

「そう……………、そうですね！ 来週の体育祭でお弁当対決をしましょう！」

巻き髪の彼女は、まるで名案でも思い付いたといった様子で手を打つと、瞳に宿した炎を更に激しく燃え上がらせてそう高らかに宣言した。

…斯くして、巻き髪の彼女と巻き込まれた私の、限りなく勝ち目の無い、薄氷の上でランバダでも踊るような戦いが始まったのだ。

悩みの種がまた一つ増えました。

よく茜さんに突っかかっつては返り討ちにあっている北条美佳さんが、スペシャルアドバイザーまたも茜さんに勝負を挑みました。

それだけならばさほど問題はないのですが、何故か僕がSAとして呼ばれてしまいました。

何でも、今回のお題目は体育祭に持つていくお弁当らしく、僕が家で家事を一通りこなすことを知っていた美佳さんが僕に、料理を教えてくださいませんか、と打診してきたのです。

本来ならば、そんな荷の重い大役は丁重にお断りするところなのですが、今回はお手伝いをさせて頂くことになりました。

何故そんな依頼を受けたのかですが、常に真正面から、決して諦めずに何度でも挑戦していく美佳さんの姿勢に心打たれたというのもあります、実は他にも理由がありました。

まあ、やるからには全力でサポートさせて頂きます。

何故かむくれている様子の波音さんの頭を撫でつつ僕は携帯を取り出しました。

「…ヒロ君が携帯を持つなんて珍しい」

不機嫌そうな表情が少し和らぎ、代わりに不思議そうに目を細めて波音さんが首を傾げました。

「誰にかけるんですの？」

…援軍です。僕よりもよっぽど頼りになる人ですよ。

波音さんと同様に、不思議そうな顔をしている美佳さんに苦笑を返しつつ、僕は短縮ダイヤルの一番を押して目当ての人に電話をかけました。

第八話 第一次お弁当戦争へ勃発編（後書き）

…と、いうわけで協力願えますか？

『いいよいいよー。みんなで作るご飯は楽しくておいしいからねえ』

…助かります。買い物をしてから帰るので家に着くのは五時過ぎになるかと思えます。

『うん、わかった。あー、あとこれで貸し二つ目だからねー』

…え？ 一つはわかるんですが二つですか？

『ふふ…詳しくは第一話を参照してくれたまえ』

…ちよっ！ アレって海に行ったのでチャラじゃないんですか!？

『何を仰る。アレは単なる私のわがままですよ。ってわけで！ 近

々その返済を求めるからよろしくねー』

…ちよっと待ってください！ もしもし!？ もしもーし ……

次回『第一次お弁当戦争 準備編』

お楽しみに。

第九話 第一次お弁当戦争へ下ごしらえ編 (前書き)

申し訳ありません。前話で予告したタイトルがあまりに適当であったためタイトルを変更します。  
とはいえ、このタイトルも中々に適当なのですが。

## 第九話 第一次お弁当戦争（下）しらえ編

生活力を付ける。

義母が彼に言った言葉である。

どんな時も。どんな境遇に陥ろうとも。腕一本でも余裕綽綽に生きられるようになれ、と。

そして義母はニヤリと笑ってこつも言った。

残った腕はお前の大切な人を護るために使え、と。

大方の予想通り、お弁当作りの特訓場所は僕の家ということになりました。

美佳さんの家、という選択肢もなかったわけではないのですが、タロ君の家と同等レベルの豪邸はさすがに気後れしてしまいますから、それ以外のどこか、と考えていたら結局僕の家でやるしかありませんでした。

まあ、勝手知ったる我が家でやった方が何をするにもはかどりますし、”助っ人”こと義姉さんに一から場所を教えるのも大変なので都合はいいのですけどね。

我が家御用達のことこりマートで帰り道に寄りました。

珍しげにお店の中を見て回り、感嘆の声をあげながら片っ端から買い物かごに商品をつっ込んでいく美佳さんを止めつつ、ある程度目星をつけて野菜や調味料を選んでいきます。

「今回の代金はもちろん私が持たせて頂きますわ。橘さんにこれ以上迷惑は掛けられませんか」

「今月は割とピンチだったので夜一食を浮かせる事が出来るのは助かります。」

トレーに入った牛ミンチを何パックも大量に持って帰ってきた美佳さんに苦笑しながら一パックだけ受けとります。

まあ、本当はさほどお金には困っていませんが、美佳さんにこれ以上気を使わせるのも悪いのでそう返しておきました。

「私のため？」

そんなことを考えていた僕に並んで、黙って歩いていた波音さんが不意に口を開きました。

ギリギリ意味が読み取れる限界点まで削られたその言葉は波音さんの心情を如実に表しています。

簡単に言つと怒っているわけですね、ものすごく。

「やっぱりバレましたか。」

「私に隠し事は通用しない」  
「ですよねえ。」

あつはつはつ、と空笑いをしてバツが悪いのをごまかそうとしましたが、波音さんが不機嫌そうに目を細めているのを目にして笑顔が引きつりました。

一学期の頃からクラスの雰囲気は馴染めずにいた波音さんは、その「力」も相まって精神に掛かった荷重に耐えきれずに暴走してまったことがあります。

このクラスの皆さんはそれ事態大したことでないと思事に受け流してくれたのですが、彼女自身はそうはいきませんでした。どうしても他の人と距離をとろうとしてしまうのです。負い目、とでもいうのでしょうか。

まあ昔よりは幾分良くなったのですが、このままでは……、と考えていたところでトラブルメーカー美佳さんが波音さんを巻き込んで勝負などを起こしてくれたので、これ幸いにその勝負のお膳立てを手伝ったのです。

「…余計なお世話」

「…そう言わないで下さい。」

「……………」

パイとそっぽを向いてしまった波音さんの頭を撫でますが、いつものように機嫌を直してはくれません。

ん……、かえって悪いことをしてしまったかもしれませぬ。

波音さんには波音さんのペースがあるでしょうし、むやみやたらにお節介を焼くのはひどく迷惑だったのかもしれない。

「…別にそこはそんなに怒ってない」

「…あれ？ それで怒ってないんですか？」

相変わらず波音さんは僕の心を覗き込んで話しを進めるわけですが、状況が状況なだけに何も言えません。と言いますか、僕のお節介に怒ってたのではないんですか？

「…違う。ヒロ君が私を気に掛けてくれるのは嬉しい」

「…んんん？ では何に怒っているのですか？」

「…ヒロ君は自分のことを気に掛けなすぎ」

「…へ？ 自分のことですか？」

「…いつも自分のことは二の次。私の時も、それで倒れた」

波音さんの不機嫌そうなおうらが少しだけ消えて、代わりに不安げに揺れる瞳で僕のことを見上げました。

前に波音さんが能力を暴走させてしまった時、テレキネシスと同じ時にサイコキネシス、テレパスまでもを完全に「開いて」いました。その只中にいて机、椅子、思念の嵐にさらされている波音さんを教室から救出しようとした際、僕がマズってしまい飛んできた椅子を避けることが出来ずに当たってしまったのです。

片手で頭部への直撃だけは避けたのですが、思いの外出血量が多く、波音さんと教室から抜け出た直後に倒れてしまったのです。

僕が次に目を覚ますとそこは保健室で、目に一杯に涙を溜めた波音さんに手を握られていました。

ああ……、そうでしたね。

自分のせいで誰かが傷ついてしまうのは、自分が傷つくよりもよっぽど辛いのです。

そんなこと、僕は誰よりも知っていたはずなのに。波音さんに同じ思いをさせてしまいました。

「…もう少し、自分のことを考えて」

…はい。

「…何か辛いことがあったら言って」

…はい。

「…私の言うこと、何でも聞いて」

…はい。……って、はい？

うなだれながら返事をしていた僕は、思わず顔を上げて波音さん

の方を見ます。

今のは……聞き間違いでしょうか？

「…違う。間違いはない」

してやったりな顔をしている波音さん。や、個人的には波音さんのムツとした表情が和らいだのでいいのですが、まさか波音さんがこのようなユーモア溢れる言葉遊びを展開してくると思いませんでした。見方によればこれもまた成長なのかもしれませんが……。

「…じゃあ最初の命令」

…もはや命令ですか。まあいいです、こうなったら何でも来いですよ。

「…ここからヒロ君の家に着くまで私に対して敬語はダメ」

…はい？ 波音さん何を

「…ダメ」

即座にダメ出しです。

どうやら僕には何かを言う権利すら与えられていないようです。

五秒ほど目をつむって唸ってから、一応最後の確認を取ります。

…小学校からコレだったので上手く喋れないかもしれないのですがいいですか？

「…構わない。さあ早く」

うう……、目が怖いのです。

瞳に剣呑な光を宿し始めた波音さんに少々怯えながら泣く泣く腹をくくりまします。

うーん……、何だかすごく変な緊張をしているのですが。

しょうがありません……、いきますよ。

両手に持ったもろもろの荷物を器用に動かして手のひらから手首に移すと家の鍵を取り出します。

家の鍵を取り出した右手でそのまま玄関を開けます。

…ただいまです。

「……おかえりー」

少し間を置いてから義姉さんの声と足音が聞こえてきました。

「ヒロさんは家でも敬語ですか？」

…はい、そうですね。何か変なところでもありましたかね？

「……いえ、まあ、何でもないですね。私も人様のことは言えませ  
んし」

明らかに妙な言い回しと態度をとって頭を振る美佳さんに首を傾  
げていると、廊下の奥の方の部屋から制服姿のままの義姉さんが姿  
を現しました。

「あつ、いらつしやーい。そこにスリッパがあるから使っ  
てねー」

「は、はい。わかりました」

「じゃあ、ヒロは荷物を……」

美佳さんに笑いかけたあと、僕の荷物を受け取るうとした義姉さ  
んが僕の背中を見て少し固まりました。

コンマ五秒ほど固まってからその顔は次第に苦笑い  
に変わって

きました。

「……デジャブ？」

…やっぱりそう思いますか？

僕も苦笑いを返します。

まあつまるところ、僕の背中には波音さんがいるわけです。

何故か帰り道の途中で顔を真っ赤にして気絶してしまった波音さんを背中におぶって帰ってきたのですが、両手に荷物を持ってカバンも肩に掛けているこの状態はいつぞやに体験した気がします。とはいえ、いつまでもこのままというわけにはいきません。

…波音、さん。起きてください。もう家に着きましたよ。

「…ん」

首だけひねって波音さんに声を掛けると、閉じられていたまぶたがゆっくりと開かれます。

波音さんは状況がわからないといった様子で辺りを見回したあと……僕と目が合いました。

…一人で立てますか？

「…問題ない」

そう言っただけで心なしか頬を引くつかせて僕から目を離すと、波音さんがよじよじと僕の背から降りました。

あれ？ まだ機嫌を直してもらえてなかったのでしょうか？

「え〜と、波音ちゃん、かな。こっちにどうぞ。ヒロは荷物貸して

…はい、お願いします。  
「…お邪魔します」

僕は義姉さんに買い物袋を渡す横で、波音さんはスリッパに足を通すとフラフラとした足取りで義姉さんの後を着いて家の奥に消えました。

「…あの方が噂のお義姉さんですか？」  
…はい、そうです…って、噂になってるんですか？

ちよつと驚きの事実思わず頬を歪めて美佳さんの方を見ます。  
たぶん、広げたのはあの人ですよ…。

「それにしても…噂に違わぬ美人ですわね」  
…いったいどんな噂が流れてるんですか？

何か色々と尾ひれが付いていそうな噂話に気のせい頭痛まで…  
…。

「確か、橘さんは義理の御姉さんと二人暮らしをしていて、その御義姉さんはとても綺麗だけど、少し変な人っす、と」

…変なところがあるのは事実ですけどねえ。まあ僕たちも上がりましょう。

僕は苦笑しながらスリッパを二足分用意すると、片手で携帯を取り出してメールを打ちながら義姉さんの笑い声が聞こえてきたキッチンに向かいました。

第九話 第一次お弁当戦争へ下ごしらえ編 (後書き)

いつもどおり私が情報収集に街を駆けずり回っていると不意に携帯が振動した。

「珍しいっすねえ……こっちの携帯にメールが来るなんて」

最近、電話としての職務を放棄していた携帯を取り出して送り主を見て驚愕した。それはもう盛大に。送り主の欄には、橘と映っていた。

メールアドレスを交換してから三カ月、すでにワンシーズン過ぎていくわけなのだが今の今までメールなど送られてきたことはなかったのだ。

(こっちからはよく送ってるのに……。不公平っす)

とは言え、今日、今、とうとう来たのだ。いったいどんな内容なのか……胸の高鳴りが止まらない。

意を決して震える指で携帯の決定ボタンを押した。

『……覚えておいてくださいね、クイナさん』

「……えっ、え？ 何すかこれ！？ 何か怒ってないっすか、凄く！？」

次回『奇跡の家事は』

ちよっ、せつかくハードボイルドに決めてたのにこんな終わり方っすか！？ っていうかヒロさんは何でこんな怒ってるんすか！？

姉びつくばん + (ぷらす)

お楽しみに

第十話 第一次お弁当戦争へ特訓編（前書き）

第九話で予告しましたタイトルを変更します。ついでに第九話のタイトルも変更します。

…それはそうと、更新が大変遅くなりまして申し訳ありません。しかも年内更新を目指してかなり急ピッチで仕上げましたので、後々手を加えていくかも知れません。またまた申し訳ありません。

## 第十話 第一次お弁当戦争〈特訓編〉

とりあえず頑張ってみよう。

義父が彼らに言った言葉である。

報われるか、救われるか、それに意味があるか、そんなこととはわからないけど、今、出来ることを精一杯やってみよう、と。

そして義父は優しく笑みを浮かべてこつも言った。

足掻くだけ足掻いても駄目だったなら、きっとその時は誰かが助けてくれるから、と。

今回、僕が義姉さんを援軍として呼んだのは義姉さんが僕よりも料理が上手というのがありますが、それ以上に別の理由がありました。

「こ、こんな感じで如何でしょうか？」

「んー、包丁はこう持って逆の手はこんな感じ。その持ち方だと木の彫り物みたいになっちゃっよ」

「…こつ？」

「そうそう。波音ちゃん上手だねえ」

「…当然」

「に、新宮さんにも負けてるのですか。さすがにシヨックですわ…」

姉びつくばん+ (ぷらす)

義姉さんには人に物を教える天性の才能があるのです。義姉さん自身はそのことに気付いていないのですが、小さい子に算数を教えたり漢字を教えたりするのが相当に上手かったりします。

とは言ったものの、小さい子がする勉強と大人が作る料理とは違いますから多少なり不安があったのですが、あの様子を見るかぎり問題はなかったようです。

僕はその何とも形容しがたい暖かな場面に、自然と笑みを浮かべながらもうそろそろ必要になりそうな物を取りに二階に向かいました。

「……痛い!!」  
「……っ!」

後ろから聞こえてきた美佳さんと波音さんの苦鳴に、今度は苦笑を浮かべながら足を早めました。

料理を作る際には、レシピより、材料より、才能<sup>センス</sup>より、まず必要になるものがあります。

それが経験であり技術<sup>スキル</sup>です。

如何にすばらしい料理本があろうとも、如何に豪華な材料があろうとも、如何に優れた料理器具があろうとも、料理の経験がなければカレーライス一つ満足に作ることは出来ません。

そしてそんな料理ビギナーが最初に積む経験は言わずもがな、包丁の扱いであり、野菜などの皮むきです。

この包丁の扱いというものは意外と言いますか当然と言いますか非常に難度が高く、ハンター稼業における桃色怪鳥の討伐のように初心者に最初に立ちはだかる登竜門的な存在なのです。

…と、言うわけでこれも経験なのですよ。

「うう、わかつてはいますけどやっぱり痛いですわ……」

「…油断した。痛い」

「最初の間はやっぱりしょうがないよ。私達もそんな感じだったもん」

絆創膏が巻かれた親指を忌々しげに見つめている美佳さんと波音さんに義姉さんが笑いながら言いました。

確かに僕たちも義父さんに初めて料理を習った時は酷く痛い思いをしたものです。今となっては良い思い出ですが。

…じゃあ、諦めますか？ まだ何も始まってませんが。

珍しく弱音を吐くお二人に、僕は努めていやらしい笑顔を浮かべてそう訊ねました。

「んー、美佳ちゃんも波音ちゃんもこんなところで折れちゃうほど意志が弱い子なのかなー？」

僕の狙いに気付いたのか、義姉さんは首を傾げながら二人に問いかけたあと、僕に続くようににやにやと笑みを浮かべ始めました。

まあ、あれです。僕も義姉さんもお二人を挑発しているわけです。美佳さんは当然ですが、波音さんも意外と負けん気が強いのです。こうやって二人でにやにやしながら挑発していけば……と考えていると美佳さんと波音さんが俯いて顔を伏せてしまいました。その肩は心なしか震えているようです。

もう少し、ですかね。

…こんなところで諦めているようでは茜さんには一生勝てないんでしようねえ。

「簡単な料理くらい出来ないようじゃ男の子にはもてないんだろっ  
な」

…こうしている間にも茜さんとの実力差は開いていつてるんでしょ  
うねえ。

「将来、仕事で疲れて帰ってくる大好きな人に美味しいものを食べ  
て欲しくはないのかなー？」

「……………なところで」

「……………だまだ」

棒読みよろしく、淡々とお二人を挑発していると肩の震えが次第  
に大きくなり、何か声が聞こえたと思うとピタリと震えが止まりま  
した。

「んー？ 何て言ったのか聞こえないな」

「……………こんなところで」

「……………だまだ」

美佳さんと波音さんはそこで一旦言葉切ると、まるで申し合わせ  
たように顔を上げました。

その表情は……

「負けてられませんわッ！！」

「…出来る。諦めない」

「んん、いいねえ。よーし、じゃあ実践編に行こー！」

あー、いい感じに瞳に炎が灯ってますね。

義姉さんはその表情を見て今まで浮かべていた笑みとは雰囲気

違う、いつもの太陽のような笑顔を浮かべると、二人のことを引き連れて台所に向かいました。

某RPGの勇者のように、後ろに美佳さんと波音さんを連れていく義姉さんの背中を見ていると、何となく昔の自分を思い出しました。

自然と頬が弛み、胸が暖かくなるのを感じながら、僕もお手伝いをすべく台所に続きました。

先に皮をむいておいたじゃがいもをざっくりと切り、お湯を張ったお鍋に入れます。本当はお湯で茹でたあとに皮をむいた方が栄養が逃げないのですが今回は熱いので先に処理をしておきます。

同時進行で軽く油をひいた(バターでもよいのですが後々に使うのでここは油を使います)フライパンに細かく刻んだタマネギとニンジン、牛挽き肉を入れて軽く炒めます。

炒め終わる頃にはじゃがいもも茹であがっているのでそれをボールに入れて潰し、炒めたものと混ぜ合わせます。この時にバター、塩、コショウ、その他調味料(うちでは少量のケチャップを入れたりします)を入れて味をつけます。

それらをよく混ぜたら小判形に形成し、小麦粉、卵、パン粉の順番でしつかりとつけます。ここで面倒がると後で油で揚げる時にバラバラになってしまうので注意が必要です。

あとは190度程度まで熱した油で黄金色になるくらいまで揚げたら、晴れてコロッケの完成! というわけです。

…と、まあこのような感じで実践終了です。大丈夫ですか？

「……ええ、まあ、何とか」

「……疲れた」

「二人ともお疲れさま」。はじめての料理は疲れたでしょう」

舞台は再びリビングです。先程と違うのは美佳さんと波音さんがテーブルに突っ伏していることと、そのテーブルの中央に出来立てのコロッケが乗っているお皿があることでしょうか。

「お二人とも手際が良すぎです……」

「料理っていうのは基本的に無駄な時間をかけないように作るもんなんだよ。素材の鮮度が下がっちゃうからね」

「……そ、そうなんですか」

「そうなんですよー」

突っ伏したまま、絆創膏が増えた手のみを動かしている美佳さんの頭を撫でまわしている義姉さんの表情は満足げです。

「なんかねー、妹が出来たみたいで楽しいよー」

「……あうあう」

……それは良かったです。あと、さすがに美佳さんの頭がぐりんぐりんなっているのを撫でるのは止めてあげてください。

「んん、残念」

義姉さんをどうにかなだめつつ、壁に掛かっている時計を見るといつの間にか七時になるうかという時間になっていました。

よい頃合いでしょうかね。

……波音さん、美佳さん。お二人が迷惑でなければこのコロッケを試食がてら、うちで夜ご飯を食べていきませんか？

僕の言葉の後に、キッチンの方でピーと炊飯器の音がタイミングよく鳴りました。

いつもよりも多めに炊いておいたお米が完全に無くなったことに  
少しだけ歓喜しつつ、水に浸しておいたジャーを洗います。あとは  
これに新たにお米を入れてタイマーをセットすれば明日も問題ない  
でしょう。

「…これで大丈夫？」

…はい、完璧です。お手伝いありがとうございます、波音さん。

「…当然」

お米の研ぎ方をマスターした波音さんはどこか誇らしげに頷きま  
す。

濡れた手をエプロンで拭こうとする波音さんの手をタオルで拭き  
つつ、洗い物にかかろうとしたところで腕をつかまれて行動を制さ  
れてしまいました。止めたのは当然、隣にいる波音さんです。

「…それもする」

覇気すら感じそうな力強い言葉と腕をつかむ力に幾分驚きながら  
も、その理由を聞こうとしたところで

「…これは私の戦いでもある」

とピシヤリと一蹴されてしまいました。

何故にそこまでお皿洗いに情熱を傾けているのかはわかりません  
が、そこまで言われてしまったては手を出す方がヤボというもの  
です。こつこつという心境は何て言うのでしょうか、巢立つ雛鳥を見守るよう  
な、一人で立てるようになった娘を見守るような、そんなほの温か  
い心境です。

さあ、どんなことがあっても黙って見守りましょう、という僕の

心模様は、波音さんがスポンジに食器用洗剤を大量噴射しようとしたところで早くも心変わりしてしまったのでした。

「包丁の扱いの基礎は今日教えた通りね。あとは練習練習」

「はい、分かりましたわ。……しかし、これだけですか？」

「ん〜……物足りないって顔だねえ。大丈夫だよ、っていうかこれ以上はやるだけムダ！」

「む、無駄ですか？」

「一日に覚えられることなんてそんなに多くないんだよ。それに何事もまずは基本から！」

… 作戦会議、お疲れさまです。どうぞ、お茶です。

白熱している義姉さんと美佳さんにお茶を出して、僕と洗い物が終わった波音さんもテーブルに座ります。テーブルの上にはどこから持ってきたのか、大きな模造紙が広げられていました。

書かれているのは……、日程ですか。

「…スケジュール表？」

「そ。敵は強力だからね〜、きつちり予定を詰めてかないと」

義姉さんは洗い物が終わりテーブルに戻ってきた波音さん抱きつきながらさらに二三書き加えていきます。

その状況から何とか脱しようとする波音さんはパタパタともがきますが逆にどんどんときつく抱き締められ、抵抗することを諦めたのかされるがままになっています。その光景はクモの巣にかかった蝶を彷彿とさせます。

「はい、このあとの日程はこんな感じで進むから。以後精進するよ

うにー！」

「は、はい！ わかりましたわ、頑張ります！」

いつの間にか奇妙な師弟関係が出来上がっていることに苦笑いしつつお茶をすすっていると、不意に義姉さんが時計を見て首を傾げました。

「そういえば二人は家に帰るのが遅くなってもよかったの？ もうけっこうな時間だけど」

「……………あ」

「……………」

義姉さんのその言葉に美佳さんははじかれたように時計のかかっている方に視線をおくり、絶句しました。波音さんは特に変わらずに義姉さんに捕縛されたままお茶を飲んでいきます。

「……………た、大変ですわ」

しばらくの沈黙のあと、美佳さんそう呟いて膝をつきました。

五秒ほど時間が止まったでしょうか。義姉さんがはたと思い出したように手を叩きました。

「あっ、あの時計って三十分くらい早くなってたかも」

「……………そ、それは本当ですよッ!？」

手をついて典型的な絶望の姿勢をとっていた美佳さんが義姉さんの言葉を聞いて起き上がると義姉さんにすがりつきました。

女性三人が絡み合ってる図は何と言いますか、ある種壮絶です。

「うん、確かそうだったけど……。違ったつけ、ヒロ？」  
…そうでしたつけ？ えーと……。あつ本当に遅れてますね。

ポケットの中の携帯を取り出して確認すると確かに三十分ほど遅れていました。今まで気付かなかった自分に驚きです。

「それならまだ間に合いますわッ！ 今日には本当にお世話になりました、申し訳ありませんが今日はこれで！！ 新宮さんは後でうちの車を一台行かせるのでそれで帰ってくださいまし！！」

美佳さんはバツと立ち上がり、ガバツと頭を下げてそう言うとかバンをひっ掴んで一気に家を飛び出しました。

「まるで嵐みたいな子だったねえ。んー、にぎやかで結構！」

その姿を見ていた義姉さんが楽しそうに笑ってそう言いました。

正直なところ、僕としては賑やかさなら義姉さんも負けてないと思っわけですが。

「…同意」

…ありがとうございます。波音さん。

「え？ 何の話？」

僕と波音さんのやりとりに義姉さんが何のことかわからないといった様子で眉根を寄せて首を傾げました。

第十話 第一次お弁当戦争へ特訓編（後書き）

……はい、恐らくそうでしょう。こっちでも強力な磁場の発生を確  
認したので間違いないと思います。

……今のところ大きな混乱は無いようです。とはいっても俺達も何  
が起きたのかすぐには把握できませんが。

……はい、俺にとってもアイツ等は兄弟みたいなもんですから。出  
来る限りは。

……それでは、また一週間後に。失礼します。

次回『大運動会開催前日』

お楽しみに。

## 第十一話 大運動会開催・前日

彼には命の恩人がいました。

小さい頃からどうしようもないほど劣悪な環境にいた彼を、どうにか元の世界に戻してくれた恩人です。

軽々しく、命などという言葉を口に出すのは彼の信念に反しましたが、彼としては本当に命を賭けてもいいと思えるほど大切な人でした。

それまでずっと独りで生きていた彼にとって、その人は陽だまりで。こんな日々が何時までも続けばいいのにと、ありふれた言葉に思いを乗せました。

「……何と云うか、相変わらず坊は押しに弱いな」

…別に押しに弱いわけではありません。あの人の押しが強いだけです。

「ぶはっ！ そんな仏頂面するな、面白いから」

ちょうど太陽が顔を出し始めるころ、僕と竜也さんは家の近くにある古びた道場で柔軟体操をしながらそんな会話をしていました。ちなみに服装は動きやすいように改良された拳闘着を身につけています。

「しかし坊の方から組手の申し出があるとは思わなかったな」

…最近では走り込みもろくに出来ていませんでしたからね。いざ動こ

うとしても身体がついてこないのでは話になりませんし。  
「たかがガキ同士の喧嘩だろ？ 何も坊が本気を出さなくてもいいんじゃないか？」

腕の柔軟をしながら不思議そうな顔をする竜也さんを見て、思わず苦笑がもれます。

… 買いかぶりすぎですよ。現に義母さんにも竜也さんにも組み手で勝ったことがないじゃないですか。

「や、それで十分だろ。そこらのガキじゃ幾ら束になっても坊に敵いっこないだろ」

それが買いかぶりだと思つのですが、いくら言つても僕のことを過大評価している竜也さんには無駄なようです。

取り繕つことを諦めて、少しばかり本音をもらすことにしました。

… 確かに、僕の身一つ守るだけならさほど問題ではないのですが、今回は違います。守らなければいけない人が大勢いますから。

苦笑を浮かべたまま今の心境を吐露すると、竜也さんは一瞬きよんとした顔をしましたが、すぐに呆れたような表情を浮かべてため息を吐きました。

「…… ったく、相変わらずの甘ちゃんぶりだな」

… 申し訳ありません。

「実はあんまり申し訳なく思つてないだろ？」

… はい、あまり。

竜也さんはもう一度大きくため息を吐くと柔軟体操を止めて半身の姿勢をとります。

「……そう言うことなら、手加減無しだ。受け身はしっかり取れよ」  
…わかってますよ。何回投げられてると思ってるんですか。

僕の返答にニヤリと笑いながら竜也さんは一息で間合いを詰めてきました。

僕と竜也さんの戦闘術の基本は、共に義母さんから教わったものなのですが、鍛錬を続けて行き着いた先は竜也さんは投げ、僕は打撃、という異なるスタイルでした。

そういった戦闘スタイルの違いは、習った格闘術によってももちろん変化するのですが、習得する側の内面の違いでも大きく変わるらしいのです。義母さん曰く、僕は意外と攻撃的なのだそうです。

瞬きの間に間合いを詰めた竜也さんが襟を掴むために伸ばしてきた腕を軽く払いながらその勢いのまま姿勢を低くして半身だけ回転します。

ムチのように思いきり振りかぶった右手で竜也さんの足を打とうとしましたが、弾かれた腕をそのままにして放たれたショルダータツクルで吹き飛ばされ、残念ながら不発に終わってしまいました。

「……お前、それ喰らったら三日は普通に歩けないの知ってたよな？」

…はい、もちろんです。

吹き飛ばされた勢いのままに後転して立ち上がりながらその質問に答えると、竜也さんの頬がかすかにひくつきます。

…怒ってます？

「いや、ぜんぜん。おにーさんはかんだいなのだA」

…いえいえ、もう完全に怒ってますよね？

語尾に星でもつきそうなほどの完璧な笑みを浮かべる竜也さんが完全に戦闘体勢に入ったことを確認しながら、今度は僕から間合いを詰めていきます。

半端な小細工は逆に自分の首を絞めることは、昔から格上相手と組み手をするが多かったので身に染みんでいます。そのため、あらゆる打撃を最速で放てる自然体のまま歩いて間合いを詰めます。

間隔が徐々に狭まりそれがゼロになった直後、ギリギリまで脱力セーフティしていた右足が身体の全ての力を受け止め、今出せる最高のスピードで上段に放たれます。しかし、それは目標である竜也さんを捉えることはありませんでした。

竜也さんが視界から消え

黒い影が一瞬、僕の軸足に絡んだのを見たところで、僕の身体は宙を舞っていました。

「不用意に足刀で攻撃しようとするな。確かに脚は腕よりも強いがその分バランスを手放すことになる」

…はい。

「各関節の連動が甘い。力の流れが一瞬だが阻害されて動きが鈍った。もともと体格がいい方じゃねえんだからそれは致命的だぞ」

…はい。

「対一の場合は一瞬でも相手から視線を切るな。打撃エリアよりも

更に接近を許せば坊の場合は確実に不利になる」

…はい。って言いますかそろそろ僕の上から退いてくれませんか？

「ダメだ。ペナルティだと思え」

思い切り投げられ、仰向けに倒されている僕の上で、どこからか取り出したタバコを吸いながら竜也さんは僕の要望を即座に却下しました。ヒドイです。

「喧嘩なら馬乗りになれる。戦場なら喉をかつ切られる。そんなもんとかよりいくらかマシだろ」

不満が顔に出てたのか竜也さんは笑いながらそう言うと、タバコを握りこんで火を消しました。

「ま、組み手も罰ゲームもこれで終了だ。今日は坊が朝食当番だから？ 急がないとお転婆姫が目え覚ますぞ」

…あー、それは困りますね。あの人、朝起きてご飯がないと暴れるんですよ。

「まるで酔っ払いの親父だな。嬢らしいよ」

竜也さんは苦笑しながら僕の上から腰を上げたところで、なにかを思い出したのかこちらに向き直りました。

「そろそろあの日だが準備は済ませてあるのか？」

ずいぶんと端折った言葉で、普通なら首を傾げるところですが思い当たる節があります。ありすぎます。

…はい。ですが今回は家でやるのではなく、どこか外に行こうと考えていますが。

「まあ、たまにはいいんじゃないか。あんまり暴れさせるなよ？」  
…善処します。

「ま、頑張っつてどうにかなるような相手じゃないけどな。せいぜい  
機嫌を損ねないように努力しろよ」

竜也さんは楽しそうな様子でそう言つと、そのまま道場の入り口  
の方向に歩いていきました。

…もう帰るんですか？ 朝食をご馳走するつもりだったんですが。

「ん、魅力的なお誘いだが今から仕事がな。今度時間があるときに  
また来るからその時な」

…おかしは何がいいですか？

「……んー、ブリ大根」

…了解しました。それではお仕事頑張ってくださいね。

「おーよ」

前を向いたままこちらに手を振って竜也さんが道場から出ていき  
ました。

仰向けのままそれを見送ってから、少しだけ目をつむります。

この道場を軽く掃除してから朝ごはんを作つて、義姉さんと一緒  
に家を出て学校に向かつて……。

一日の予定を頭の中で反芻し、ゆっくりとまぶたを開けます。

右手を持ち上げて、握つて開いて。

…僕の非力な手で、どれだけの人を守れるか。

誰にともなくそう呟き、最後に一際強く手を握りしめてから立ち  
上がりました。

「……ふむ、よく纏まっているな。さすが義弟君だ」

…よかったです。寝ずに資料作成をしていたか良かったです。

時間はお昼過ぎで、場所は生徒会室です。ちなみに今日は体育祭前日ということで半日授業となっています。

ソファーに深く腰かけている琴音さんの前に立って、昨夜ようやく完成にまでこぎ着けた資料の出来をうかがっていましたが、どうやら問題ないようです。

「まあ問題は警備の人員が足りないことくらいか」

…はい。そればかりはどう勘定しても足りません。他にいくつか手を打ちますがどこまでしのげるか、といったところです。

「他の手、か。コレだな」

琴音さんは資料の一枚をつまんでこちらに見せてきます。

…はい。まあオマケみたいなものですが、何もしないよりはいくらかマシだと思います。

「まあそうだな。こちらの指揮は……、奏が適任か。任せられるか」  
「はいはい。けど、通信機一式の用意は済んでるの？」

常は琴音さんが座っている机で、何やらパソコンに打ち込んでいる奏さんが首を傾げてこちらに向きます。

…手配はすでに終わっているはずですよ。そうですね？ クイナさん。

「……………あつ、は、はい！ ばっちりカンペキですよ！」

僕が何故か先程から隣で放心したままのクイナさんに話をふると、思い出したかのように首をかくかくと振りました。

「ふむ、大丈夫か、クイナ嬢？ この大切な時期に貴重な人材に風邪でも引かれるのはごめんだぞ？」

「は、はい！ 気を付けます！」

声を裏返ししながら敬礼のポーズをとるクイナさんの様子に、僕だけでなく奏さんと琴音さんも軽く笑みを浮かべました。

「……まあ、とりあえずはこんなものか。明日は二人とも朝早くから来てもらうことになるが構わないか？」

「はい。六時半でいいんですよね？」

「ああ、それで頼む。それと人員の件、こちらで手を打とう」

「あ、そうですね！ 助かります！」

僕が琴音さんの言葉に小さく小躍りをしていると、後ろからの不意な衝撃につんのめりそうになります。

後ろを向くと、先程までデスクワークに勤しんでいた奏さんの顔が目と鼻の先にあり、頬を引くつかせて慌てて前に向き直ります。

「いきなり突っ込んでこないでください。それとはやく僕の背中から下りてください。」

「いや、楽しみだね。まるでお祭り！ 最近は学校で問題が起らないからつまらなかつたんだよね」

僕の注意を軽くスルーし、嬉しそうに笑って僕の背中にブラブラしている奏さんをどうにかしてほしいと琴音さんに視線を送ります。その視線に気づいたのか、琴音さんは、ふむ、と唸ったあと、腕を組みました。その視線は心なしか少し厳しめです。

嗚呼、やりすぎだと奏さんをたしめてくれるんですね？

「見せつけてくれるな、義弟君。奏、もっとやれ」

「あいさー」

ですよねー。琴音さんなら僕のことを素直に開放したりしませんよねー。

僕は大きいため息をついて、この嵐が過ぎ去るのを待つことにしました。

奏さんに遊ばれること十分、ようやく退出の許可が出たので、放心しているクイナさんを引きずりながら生徒会室を脱出しました。

生徒会室から十二分に離れてから、適当な空き教室に入り、未だ放心中のクイナさんを頬を軽く叩いて目を覚ましてもらいます。

「こ、ここはどこっすか！？ 私は誰っすか！？」

…ここはA棟の三階で、あなたは神津クイナさんですよ。

クイナさんの定番のポケに丁寧にツツコミながら、僕は自分のYシャツのボタンを一個一個外していきましました。ちなみにYシャツの下には黒いTシャツを着込んでいます。

その僕の行動にクイナさんは何故か顔を真っ赤にして吹き出し、ひどく取り乱したようにあたふたしました。

「な、何やってるっすか！ いきなり！！」

…むしろ、クイナさんはどうしてそんなに焦ってるんですか？

クイナさんの質問に質問で返し、脱いだYシャツの首元や胸ポケットを探ります。無いですね……。

予想外の事態に少し思案していると、目の前で何ごとかまくし立てているクイナさんと目が合いました。

なるほど、その手がありましたか。

…少し、いいですか。

「え、は、何すか！！？ いったい何の許可を取ろうとしてるんですか！？」

脱いだYシャツを畳んで机の上に置き、じりじりと距離を詰める  
と、ちよつと申し訳ないくらい動揺しはじめたクイナさんにさすがに少し罪悪感がわいてきました。

なので、出来るだけクイナさんが安心できるように笑顔を作って口を開きました。

…なるべく、痛いようにはしません。すぐに終わりますから。

「……あ………はい」

顔を赤くしたまま急におとなしくなったクイナさんの様子に首を傾げながら、クイナさんの肩に手を置きました。その際、びくりとクイナさんの身体が震えました。

…大丈夫ですか？ 震えているようですか。

「……大丈夫つ………す！ 初めてじゃ、ないから」

初めて、ですか？ いったいクイナさんは何のことを言ってるんでしょうか？

疑問には思いながらも、とりあえずクイナさんの顔に僕の顔も近づけます。同時に右手でクイナさんのＹシャツの首元に巻いてあるリボンに触れます。

「こ、こんなところで……」

何となく非難がましいクイナさんの声が聞こえましたが、それよりも僕には早急に済まさなければいけないことがありますから聞こえなかったことにします。

…むむ、ここにも無いのですか。

「す、するなら早く済ませてよっ！」

…申し訳ありません。今、済ませますから。

先ほどから何故か目を瞑っているクイナさんに急かされながら、手を背中に回します。

…と言いますか、いつもの口グセはどうしたんですか？

「……ああ！！ もう今はそんなことどうでもいいでしょ!？」

…まったくもってその通りです、ね。ん、やっぱりありました、盗

聴器。

「……………ふえ？」

首の後ろ側の襟に挟み込んであった十円玉程度の大きさのそれを摘まみとってクイナさんに見せます。

閉じていた目を開きぼかんとした表情をするクイナさんについてい笑みを浮かべてながら、外した盗聴器に、空き教室に置いておきますよ、と話しかけ(？)、Ｙシャツを乗せておいた机の上に置きました。

…あのお二人の部屋に行つたあとは、盗聴器を仕掛けられてないか  
しつかりと調べておいた方がいいですよ。この前、僕も酷い目に会  
いましたから。

「……………」

Yシャツに腕を通してボタンを留めようとしたところで、対面し  
ているクイナさんの様子がおかしいことに気付きました。

もしかして、泣いてませんか……？

「……………」

…え？ 何でしょうか、うまく聞きと

「馬鹿馬鹿馬鹿あああああ……！！ この天然フラグクラッシュ

……………」

クイナさんは顔をこれ以上ないくらい真っ赤にし、涙を流しながら  
空き教室から飛び出していきました。

呆気にとられてしまった僕は、その場を一步も動くことができず、  
その背中を見送ることしかできませんでした。

遠くで琴音さんと奏さんの笑う声が聞こえた気がしました。

…僕がいつたい何をしたんですか？

ぼつり、と自然にそんな言葉がもれました。

遠くで聞こえる笑い声のボリュームが大きくなったような気がし  
ました。

第十一話 大運動会開催・前日（後書き）

疾走。疾走。疾走。

体育祭は明日だというのに、私は全力で疾駆していた。

何を期待していた？

笑顔を向けられてどう感じた？

肩を掴まれてどう思った？

そんな取り留めのない思考を置き去りにしたくて、思い切り駆けていた。が、脳が考えていたより早く、私の肺も、両足も、限界を迎えた。

脚を止め、肩で息をしていると置き去りにした思考が早くも追いついてきた。

今まで、誰かを好きになったことなんてなかった。そんなことよりも面白いことが私にはあったからだ。

それでいいと、何も知らなかった私は思っていた。

それがあの日、保健室で彼と再会してから、全ての歯車が狂いだした。

……否、ようやく正常に廻り出したのかもしれない。

次回『大運動会開催・午前の部』

姉びっくばん + (ぷらす)

ああ、認めよう。認めてやる。私は彼のことが

第十二話 大運動会編 壱・開会式（前書き）

1．はい、というわけで、天気予報並に当てにならない次回予告なわけです。今回もタイトル変更してしまいました。申し訳ありません。

2．春休みのくせして更新がいつもより遅くなりました。悪気は一切ないので、短編の下地を幾つか作っていたら遅くなってしまいました。……まあ他にも色々理由があるのですが言い訳にしかならないので黙ります。やっぱり申し訳ありません。

3．地味にユニークが一万ヒットしました。コメディスゲエっす。

一応、記念に外伝でも書こうかとも思うのですがリクエストありますか？ よほど無茶なシチュでなければ実現できるかと思えます。

## 第十二話 大運動会編 壱・開会式

血潮吹き出し、肉片弾けて、骨がめっきゃんめっきゃんになる学校行事、体育祭！

液体窒素ばりに心が凍りついた文系人と、赤道直下でサンバを踊りまくるみたいな暑苦しい体育会系人とが一堂に会する学校の大、大行事です！！

文化祭と並ぶ学校行事ですから、皆さん力の限り頑張りましょうね！！（生徒会副会長）

私は来年で高校卒業となる。

これはそんな私が手掛ける最後の体育祭だ。

気の利いたサプライズなどは用意出来なかったが、皆が楽しめる場くらいは死守しよう。

何の心配もいらない。好きなように楽しむといい。

最後になったが、目に余るような手抜きが発見された場合は……、まあ、皆まで言つまい。（生徒会会長）

（ひいらぎ通信9月号・体育祭特集から）

もう秋だと言つのに、ジリジリと肌を焼く太陽は未だ健在です。

「今日という日は皆の魂みなに刻まれる運命の日となるだろう」

そんな中、汗一つかく様子もなく、朝礼台の上に乗って全校生徒の前で演説をしているのは、本校指定のジャージを着た琴音さんです。

「皆が欲しい物は何だ？ 地位だろうか？ それとも名誉だろうか？」

ちなみにこの時間、本当は生活指導の先生が体育祭開催についての諸注意を話す予定だったのですが、琴音さんがそのマイクを奪いとり、今のゲリラ演説に至るわけです。

「ならば奪い取れ。この日、この時間ならばそれが許される。否、許そう、この私が」

一応、補足しておくのですが、琴音さんが先生からマイクを奪ったといっても力づくで奪ったというわけではありません。急に壇上上がった琴音さんが、先生に二三耳打ちをした結果、先生自身が恭しく両手で琴音さんにマイクを渡したのです。

「一年は死ぬ気でもがいて生を掴め。二年は下（下級生）を蹴落とす上（上級生）に媚びを売れ。三年はその権力でもって総てを潰せ」

まあそういったことはこの学校では珍しいことではないようで、ざわざわとした雰囲気は琴音さんが演説を始めるとピタリと静まりました。こういったところから琴音さんの求心力が垣間見られます。

「前置きはこの位にしよう。皆、悔いを残して散るなよ」  
『オオオオオッ！！！』

後半はいつものようにシニカルな笑みを浮かべ、琴音さんが演説を締めると、それを待っていたかのように生徒の一部……、いえ、大部分の怒号が学校を包みました。

…何て言うんでしょうか。皆さんやる気満々ですね。

「な。いくら二学期の成績にも影響が出るっていつても度が過ぎるよなあ」

未だ興奮冷めやらぬといった様子で方々に散っていった他の方々（ほとんどが上級生の方たちです）を見ながら隣にいるタロ君と僕はそんなことをぼやいていました。

『はあ……』

僕とタロ君、どちらからともなく大きくため息を吐きました。

とにもかくにも、一騒動も二騒動もありそんな体育祭が始まりました。

開会式が終了してから、始めの競技が開始されるまでには三十分ほどの間が空きます。

その時間に風紀委員の方々、総勢六十名に仮設テントまで集まってもらい軽く今回の活動の概要を説明します。

本来、こういった作戦会議は何日か前から段取りを組んで説明していくものなのですが、今回は少しばかり事情が違います。

簡単に言ってしまうと、敵の攻め手がわからないためです。攻め

手がわからない以上、この中に帝陵高校の方々と同じにいる人がいて、何らかの妨害工作に時間をかけられてしまう可能性もあるのがこのように直前まで作戦内容は伏せられていました。

また、いくら内密に事を運んでも多人数にそのことを話せば必ずどこかから話しは漏れます。そうなれば皆が心置きなく体育祭を楽しめなくなるだろう、といった琴音さんの配慮もありました。何と言いますか、つくづくいい人なのだと感じます。味方の間だけが。

「各自、今渡したスケジュール通りに行動してね。じゃあ女子は私と神津さんに、男子は橘くんについて行ってくださーい」

僕が思考にふけっている間に、集まっていた風紀委員の方々をまとめた奏さんが女子を連れて校舎のある方に歩いていきました。

「……………」

何でしょうか？ しばらくその場を動かなかったクイナさんが射殺さんばかりにこちらを睨み付けているんですが…………。

…な、何でしょうか？ クイナさん。

「……………何でもないっす」

僕の問いかけにぶくつと頬を膨らませてからそう答えると、そのまま奏さんの後を追って校舎の方に走って行ってしまいました。

やっぱりまだ何か怒ってるんですかね…………？

「まあ、あれだ。男にはそういう時もあると思うぜ！」

「おうおう。女に振られたくらいでよくよくすんな！」

うなだれる僕の背を叩いて励ましてくれる先輩方の心配りが胸に  
しみます。

何か勘違いをされているような気がしなくてもないですが、たぶ  
ん気のせいだと思います。

風紀委員男子の方々を連れ、人がまばらになりはじめた学校内に  
入り、とある場所を目指して歩いて行きます。

「なあなあ、これからドコ行くんだ？ やることは学校の警備だっ  
てのはわかるんだけどさ」

後ろを歩いていた先輩の一人にちよいちよいと背中をつつかれ、  
そんなことを聞かれました。

…伊田会長のところですよ。今は教員会議室にいるはずですよ。

「……あの会議室か。いくら体育祭の日だからって普通は貸し出さ  
ないよな」

…そこは伊田会長ですから。

「なるほど。あの伊田だもんな」

「まあ確かにアイツならな」

「大魔王だもんな。ウチの学校の」

その先輩だけでなく、近くにいた他の先輩方もうんうんとうなず  
いて納得しています。その様子から、琴音さんが学校でどれだけ畏  
怖されているかわかるというものです。

立场上、琴音さんの肩を持ちたいところなのですが、他ならぬ僕

自身が皆さんと同じことを考えていたので何とも言えません。

苦笑いを浮かべてそんな気持ちを誤魔化していると、突然、前方もつすぐ目の前に見えていた教員会議室から鬼気迫るほど大きな敬礼が聞こえてきました。しかも軍隊式の声を張り上げるアレです。

「……………」  
「……………」  
「……………」

僕を含めそこにいる皆さん全員が、それはもう盛大に引いているわけなのですが、いつまでも廊下に立っているわけにも行きません。動きたくないとこねまわっている心と体を叱咤し、一息に教員会議室のドアを開けて 閉めました。

変な人がいました。それも一杯。

「アレって軍服か…………？」  
「……………しかも結構な数いたぜ？」  
「いや、さすがにないだろ？ きつと見間違えただけ……………」  
「なるほど、じゃあ今のは夢か？」  
「ありえるな。最近部活が忙しくって疲れが抜けなかったんだよな、俺」

「俺もだ」  
「俺も」

「何をしている？ さっさと入って来い。あまり時間が無いのだぞ」

今見たものはすべて幻であつたという先輩方の希望的観測を、再び開いたドアから顔を覗かせた琴音さんがもの見事に粉碎しました。

痛恨、といった言葉しつくりくる顔をして眉間を抑えてため息をつく先輩方を一瞥<sup>いちへつ</sup>だけして、琴音さんがこちらに視線を向けます。

「ほら、義弟君も早くしろ。時間は有限だぞ」

…今さらで何なのです、その呼び名、せめて皆さんの前ではやめていただけませんか？

「何を今更。既に校内掲示板にも張り出したことがある公然たる事実であるぞ」

…えっ！　ちょ、そんなこといつしたんですか！！　初耳ですよ！？

初めて聞く、さりげなく僕の今後の人生を左右する事実にはさすがに動揺を隠せずに琴音さんに詰め寄ります。

「……ふふふ、相変わらずいい顔をするな」

…いえいえいえ、そんなことを言われても嬉しくも何ともないですからね！？　って言いますかさりげなく僕の質問を無視しないでください！

「安心しろ、ちょっとした冗談だよ」

琴音さんは詰め寄っていた僕の頬を軽くひっぱり、楽しげに笑ってからそう言うと、『さつさと来い』とだけ残り、僕の額を小突いて会議室に戻っていきました。

狐につままれたような心持ちで、それでも皆さんを会議室の中に誘導しようとするのを向くと、皆さんがまさに、『絶句』といった様子で僕の顔を見ていました。

何の前触れもなく、そんな視線を大量に浴びて思わず顔が引きつります。

…な、何でしょう？

「お前スゲエよ」

「あの氷の女が笑ったぞ……」

「……魔王があんなことするのか」

口々にそんなことを呟いている先輩方の後ろでは、一学年と二年の方々が顔を赤らめて、ぼーっとしています。

どうしたんでしょうか？

琴音さんがあのような表情をすることがそんなに珍しいのでしょうか？

確かにいつも不敵に笑っているようなイメージがありますが……、と考えたところで当初の予定を思い出しました。

…じゃあ皆さん、とりあえず会議室の中に入ってくださいーい。

琴音さんに怒られる前に、風紀委員の皆さん方を会議室の中に誘導することにしました。

「むうう………」

屋上についてから、あらかじめ用意しておいたパソコンを立ち上げて調整をしていると、隣で同じように通信機具の調整をしていた少女 神津クイナちゃんが唸り声をあげていた。

クイナちゃん、どうしたんだろ……ってまあ言うまでもないよね。

他の子達にはテーブルとか望遠鏡の設置をお願いしているから、しばらくの間は二人きり。

んふふふ、せっかくだからオネエチャンがクイナちゃんの心の深<sup>はな</sup>遠を覗いちゃおうかしら。

「ヒロくんのご事で悩んでるのかなあ？」  
「……………！」

遠回しなことは嫌いだからさらっと直球に。けど効果は絶大だったらしく、クイナちゃんはビクツと肩を震わせた。

「な、何言ってるっすか……………」  
「好きだけど今さらどんな顔すればいいかわかんないの、って感じかな？」  
「……………！」

余裕ぶって取り繕おうとしたクイナちゃんの顔がピシリと音を立って固まった。

いやはや、色恋沙汰には免疫が無いのか、いちいちわかりやすいなあ。

「けどヒロくんはなかなか倍率高いからなあ。後手後手に回ってる  
と誰かさんに持ってかれちゃうかもよー？」

「……………あ……………う」  
「私自身も気に入ってるし、あのお姉えすらも心を許してるぐらいだからねえ」

腕を組んで、目を閉じてもっともらしく頷いてみる。その私の――

つ一つの動きに、クイナちゃんはわかりやすく呻き声をあげている。もっともらしく、とは言ったものの、ヒロくんがモテるといっているのは本当の話だ。

本人は気付いていないかも知れど、アレだけ顔も性格も良くて、気配りも出来る人間がモテないわけがない。どこか浮世離れしているところや、逆にへんに所帯染みているところも好感度アップである。

なのに、特定の相手との関係が一切浮上してこないのだから不思議なもので。そのため一時期、いつも一緒にいる我が弟と良からぬ関係に発展しているのでは、という話題が学校中に流れたのだが、裏を取った結果、それもデマであることがわかったわけで（裏を取るために行われた手段は各人の想像にお任せ。ヒントはお姉えと拷問器具）。

てか、抱きついたりしたらきつちりと恥じらってみせるところから、男女関係に全然興味がないというわけではなさそうなんだけどねえ。

「今まで、誰かを好きになったことがないから、どうすればいいのかわからないっす……」

私がヒロくんについての考察を頭の中でまとめていると、クイナちゃんが苦虫を噛み潰したような顔をして、そんなことを呟いた。

なるほどなるほど。

まあそうだよー。最初のうちってどうやって相手に接すればいいかわからないもんだよね。

しかも相手がああ掴み所のないヒロくんじゃちょっと大変かもねえ。

「……さっきも、こっ、視線で、の、悩殺してみようとしたっすけ

どやっぱりダメで」

え、アレってそういう視線だったの？ 悩殺っていうよりは本当に殺してしまいそうな目だった気が……。

頂垂れて溜め息を吐く、頭一つ二つも小さい彼女を見て、本当に初々しいなあ、と感じてしまった。

私にも、こんな時があったのだろうか？ いや、たぶんあったんだろうなあ。

そんな懐かしい気分になりながら、どうアドバイスすればクイナちゃんが真っ直ぐヒロくんと向き合えるか考えてみる。

わざわざアドバイスをあげてライバルを増やす必要もないんだけど、変な方向にノンストップで突っ走っていく可愛らしい後輩を放っておくのはやっぱり可哀想だしね。

斯くして私は彼女に出来る限りのアドバイスをした。

何の変哲もないアドバイスだったんだけど、それでも、何も言わずに悶々とさせるよりはいいかなあ、とか思ったりしたわけで。

結果的に、この時のアドバイスが彼女の暴走に拍車をかけることになったりするのだけど、それはまた後々の話。

そのせいで、私がヒロくんにこんこんとお説教されたりもするんだけど、それもやっぱり後々の話。

第十二話 大運動会編 壱・開会式（後書き）

「さあ、とうとう体育祭編が始まっちゃいました」  
ベンベンッ！

「相変わらずヒロは流されに流されまくっているわけだけど、果たして任務を遂行できるのか!？」

ベンベンッ！

「そして恋に恋い焦がれる少女の運命は!?!？」

ベベベンッ!!

「次回『大運動会編 弐・彼の気持ち』！ お楽しみに!！」

…義姉さん、さっきから何やってるんですか？

「うるさい！ 出番ないんだから次回予告くらいやらせるこのヤロー!！」

第十三話 大運動会編 弐・彼の気持ち（前書き）

1. オマケ編はもう少しお待ちください（七割は完成しているので。
2. 携帯執筆 左キーを押す 消える、の工程を二回ほど繰り返しているのでクオリティが三割減位しています。生暖かい目で見えていただけると嬉しいです。

### 第十三話 大運動会編 貳・彼の気持ち

自信がなかった。

周りにはいつも宝石みたいに輝く友達がいて、その中に僕はいた。わからなかった。

僕なんかがみんなの隣にいていいのか。

怖かった。

みんなが、彼女が僕から離れていってしまうのが。

けど、わかってたんだ。

そんな考え、ただの甘えなんだった。

「と、いうわけだ。君達が自分の競技に出ている間の増援として、彼等を配置する。まあ、君達は予定通りに動いてくれれば構わん」

前に出て軍服の方々の説明をした琴音さんが白板の前から移動すると、代わりにリーダー格らしき一際大きな体をした方が前に出てきて挨拶を始めました。

…この方々が前に言っていた『私兵』の方々ですか。

「ふむ、二十人程度しか連れてこなかったがそれなりに『調教』くんれんを積んでいるからな。役には立つはずだ」

…気のせいですかね？ 『訓練』じゃなくて『調教』と聞こえたのですが。

…気のせいだろう。義弟君も疲れているのだな。

窓際に立っていた僕のところまで下がった琴音さんは、くつくつと楽しげに笑っています。

眼鏡をきらりと光らせて浮かべる笑顔が限りなく黒いわけ。きつと触れてはいけないことなのだと一瞬で理解しました。

「今回、帝陵以外にも注意しなければいけない存在も多い。文化祭のためにもここで幾つかは潰しておきたいな」

小声で他の方々に聞こえないように話す琴音さんの横顔は、珍しいと言っては何なのですが、薄く憂いを帯びていました。

そんな琴音さんの横顔を眺めていると、ふと琴音さんと目が合いました。

「……ふふ、義弟君は何で笑っているんだ？」

…笑ってましたか？

琴音さんに言われて両手で自分の顔を確認します。

いつもどこか人間味の欠ける琴音さんの人間らしい部分が見れたので、ついつい笑みを浮かべてしまったのかもしれない。

「酷いな、義弟君は。義姉あねの悩んだ顔がそんなに好きなのか。困ったな、禁断の係に発展だ」

…いえいえいえ、何急にそんなこと言ってるんですか？ まだお昼ですよ？

「夜ならばいいのか？ ふふん、意外とエツチなんだな。このむつつきスケベめ」

…いえ、だからそうじゃなくてですね。

「おっと、顔が赤くなっているぞ？ そうか、義弟君は罵られると

劣情を感じるのか。それとも他の人間に見られるのがそんなにいいのか？ ん、どうなんだ？ 言ってみるんだ、『私は見られて興奮する変態です』、と」  
…もうイヤアあああああ！

声を抑えながら哭く僕を、この上なく愉快そうに眺めている琴音さんから先程見えた憂いは微塵も感じられません。

あれ？ 僕、ストレス発散の道具としていいように使われてませんか？

「ほら、義弟君。鳴くのはいいが、直に話が振られるぞ」  
…へ？ どういうことですか？

僕が伏せていた顔を上げ、琴音さんの方を向くと前に向かって視線を飛ばしていました。

それにならって前を向くと、琴音さんが連れてきた部隊の隊長さんの話がちょうど終わるところだったらしく、こちらにアイコンタクトを送ってきていました。

その視線にはそこはかとなく殺意が籠っているような気がしましたが、気のせいなのでしょうが。

「それでは、今回の任務で総監督を勤める一年の橘君の話だ。皆、心して聞くように」  
…え、は、はい。

急に話を振られ少しばかり動揺しながらも、隊長さんの代わりに前に出ます。

ここでしっかりと志しを見せることが出来れば、後々、意思の疎通がスムーズになるはず（士気が上がる、とも言えますね）

。とはいえ、僕はお世辞にも口がまわる方ではありません。それならば、せめて精一杯の誠意を込めて皆さんにお話しをしよう、そう考えたところで、

「ちよつと待てよ」

そんな言葉が掛かりました。

声のした方　　琴音さんの連れてきた部隊が固まっているところに視線を向けると、僕と同じ年、もしくは少し年上に見える、髪をツンツンに立てている男の子が前に出てきました。

制止された理由がわからずに、はて、と首を傾げるとその男性は苛立たしげに顔を歪めました。

「すつとぼけた顔しやがつて、何でデメエみたいな優男がリーダーなんだ？　納得いかねーんだよ」

その男の子は僕の近くまで歩いてくると胸ぐらを掴まんばかりに詰めより、不満をまくし立てました。

困惑を隠さずに顔に出しながら、琴音さんの方を向くと、琴音さんはアゴに指を沿わせ、ふむと考え込んでいました。

「忠誠心が強すぎるというのも問題だな」

ポツリと漏らした琴音さんの言葉で、何となくですが要領を得ました。

つまり敬愛してやまない琴音さんが、自分たちではなく、どここの馬の骨とも知らない人間に仕事を任せたことに納得がいかない、ということでしょう。

隊長さんや他の部隊の方々が、困惑を顔に出しながらもそれを止

めないということとは、つまり同じ意見であるということですかね。

さて、どうしましょうか？

いたずらに刺激すれば一触即発の状態になりかねませんし、かといってここで簡単に引いてしまつては全体の士気が下がることは火を見るよりも明らかです。

あと十分少々で第一種目開始の合図である予鈴がなります。つまりは時間があまりないのです。

いっそのこと文句がある人全員をのしてしまおうか、などと物騒なことを考え始めていると、琴音さんが不意に口を開きました。

「……ふむ、ならばどうだ。お前が義弟君に片膝でもつかせることが出来たならば全権をお前に委ねようではないか」

相変わらずの気まぐれっぷりで琴音さんがそんなことを言い出したため、会議室全体が一瞬ざわめきます。

「本当ですかッ！？ 琴音様！！」

「ああ、勿論だ。私が嘘を吐くとも思つか？」

常のようにくつくつと笑いを噛み殺してそう言う琴音さんを見て、思わずため息を吐きました。

「お、おい！ 何やってんだよ」

これから始まるショーに私が心を踊らせていると、近くにいた三

年の男子が不安げな様子でこちらに話しかけてきた。

名前は…………… 忘れたな。

「何やってる、とは何だ？」

「『何だ？』じゃねーよ！ 何で変に焚き付けてんだよ！ お前が橘の味方にならねーでどーすんだよ！」

その男子 仮に男子Aとしよう が猛烈に捲し立ててくるので、思わず顔をしかめてしまう。ツバが飛んで眼鏡が曇るのだ。

それにしても、ほとんど義弟君の素性を知らないとは。義弟君は相変わらず日陰に隠れて生活をしてるらしい。

「大丈夫だ。問題ないだろう」

私はそれだけ言うと、話しは終わりだという意味を込めて前を向いて眼鏡をハンカチで綺麗に拭く。

その私の姿を見て、男子Aは舌打ち一つして前を向いた。その身体には何かあった時に飛び出して止めるためか、力が漲みなぎっているのがわかる。

他にも運動部と思われる男子が数人、四肢に力を溜めていた。心積もりは男子Aと同じなのだろう。

…………… 何と言うか、少し感動した。

我が校にはこれだけ後輩を思いやれる人間がいるのだ。彼らの所属する運動部には次回、多めに予算を配分しようと思う。

名前はわからないのだが。

「ハッハッハッ！ 俄然やる気が出てきたぜ」

両の拳を打ち付け、大分張り切っている我が部隊の新人、古賀こがの

様子を見てから私を見て、義弟君は深い溜め息を吐いていた。大変失礼だと思う。

まあ正直、その気持ちも分からないでもないのだが、下手な言葉を吐き出すよりも簡単に自分の力を見せつけることが出来るのだから、口下手な義弟君にはこの展開に発展させた私には感謝してほしいものだ。

例えば私が、義弟君には絶対服従だ、と命じれば我が部隊の人間は義弟君がどんな人間であれそれに従うだろう。そう、調きよ……訓練してきたからだ。

だが、それでは意味がない。  
人を率いる、とはそう言うことではないからだ。

大袈裟に言えば人を従えるというのは、その人間の命を預かるということだ。ならば、相手には自身の力を見せつけなければいけないし、真に自分に忠誠を誓わせなければならない。

良い例悪い例は数あるが、それが上に立つ者の責務なのだ。  
義弟君には確かに人の上に立つ資質はあるが、性格も相まってかどうしても強気に出ようとしない。それでも男子Aの様に気のいい人間はついてきてくれるが、古賀の様な私の強い性格の者についてはこない。

纏まりのない集団はたやすく瓦解し、忠誠のない部下は常に背を  
狙う。

『優しさ』と『甘さ』は、似ているようで全く違うのだ。

仮にも、我が妹の婚約者、そして私の義弟となる男だ。そのようなひ弱な精神では困るのだ。

少々手荒ではあるが、今からでも鍛えていかなばなるまい。

断わっておくが決して楽しそうだからという理由ではない。

「ハッハッ！ お前には恨みはないが、この田島たじまはじめの下克上のために散ってもらおうぜ」

獣のように笑って義弟君に向き直った田島　古賀ではなかった  
は姿勢を低くして戦闘体勢を整えた。

一応、私の部隊の人間には、幾つかの格闘技を学ばせている。何を  
するにしても、身体能力は必要であるからだ。  
そして、あの体勢は後の先、カウンターを狙う体勢だ。

「愚か者め……」  
「は！？ お前、いったい何を………っ！？」

思わず漏らした感想に、男子Aがすかさず反応する。が、その合  
間に、決着はついていた。

刹那の一撃。  
義弟君の右腕が霞む。

軽いタッチ、それだけだ。  
田島の顎に撫でるように当てた一撃は、それだけで勝敗は決する  
一打となった。

カウンター、というものは格闘技術の極致である。  
相手に合わせてから自身の動きを決める。故に、それを狙うには  
優れた動体視力と冷静な判断、そして何よりも経験が必要なのだ。

田島は、鳴り物入りで我が部隊に入ってきた新人で、身体能力及

びその他の能力は折り紙つきだ。ストリートファイトでも先のようなカウンター戦術を多用していたのだろう。

だが、例えそうだったとしても圧倒的に経験が足りない。

ただの喧嘩とは違う、一点の技術のみに心血を注いで繰り返しを行う反復練習の経験値。そういったものない田島のカウンターは、どこにでもいる凡夫が相手ならば多少は通用するかもしれないが、義弟君が相手ではとてもではないが通用するものではない。

事実、田島は自分から義弟君に触ることすら出来ずに地に伏している。しかも、意識を刈り取られただけでほとんど無傷で、だ。

実践は、時に十も百も経験を得ることが出来るが、その土台となる基礎がなければ幾ら勝利を積みあげようが全くの無意味なのだ。

しかし、私の部隊の者と義弟君の能力の差が、未だこれほどあるとは……。調教……ではなく訓練の計画を見直さなければなるまい。

そんなことを考えながら、倒れた田島の介抱をしている義弟君の元に歩いていった。

「さて、これで義弟君が指揮を執ることに異議がある者はいないか？」

昨日、久しぶりに竜也さんと組み手をしたせいか、思ったよりも身体が動いてしまい、ちょっといい角度で入ってしまったハジメ君の様子を見ていると、いつの間にか隣まで来ていた琴音さんはそう言って他の部隊の方々を見回しました。

『……はっ！ ありません』  
「よし、ではコイツを連れていけ。水でもかければ目も覚ますだろ  
う」

部隊の方々はきれいに詠唱して敬礼をすると、失礼します、と僕  
に言つと数人がかりでハジメ君を運んで行きました。

手のひらを返したようなその態度に呆気にとられていると、琴音  
さんが僕の耳元で囁きました。

「……もう義弟君に不信の念を持つ者はいない。次の指示を出すん  
だ」

…は、はい。わかりました。

琴音さんの言葉にどもりながらも、手短に皆さんに説明を始めま  
した。

「で、今に至るわけか」

…はい、まあそういうわけで。正直、朝からへビー過ぎて胃もたれ  
しそうです。

「姉貴たちの関係者はどいつもこいつもコユイからなあ」

悪い奴らじゃないんだけどな、と引かれたブルーシートの上に横  
になりながらタロ君が付け足しました。

第一競技からいきなり出番な僕は、とりあえずクラスごとに分けら  
れたグラウンドの一角に戻り、競技開始の時間までタロ君と愚痴の  
言い合いっこをしていたわけです。

まあ、言い合いっこ言つても愚痴の対象は同じ人なのですが。

…あつ、だけどタロ君も関係者ですよ。やっぱりそうなるならタロ君もコユインですか？

「H A H A H A、面白いこと言うな。だがお前もすでに関係者入りなんだZ E?」

…A H A H A、けどタロ君には負けますよ。何たって関係者どころか血縁者ですからN E。

「よし、いい度胸だなヒロ。お前をコチヨコチヨ一分間の刑に処してやる。覚悟しろよ」

…イヤー、才助ケー。

「……………ね、ねえ、どうしたの二人とも？何かものスゴく哀愁を感じるよ?」

虚ろな瞳で鬼ごっこを始めた僕とタロ君を見て隣に座っていた真君が引きつった顔でこちらに声を投げかけてきました。

…そうですか？ それはきつと気のせいですよ、真君。

「ああ、絶対に気のせいダ。俺たち、笑ってるだロ?」

「そ、そうなのかな? ……笑顔が逆に怖いよ」

壊れた人形のようにカタカタと笑うと、心なしか視界がにじみはじめたような気がします。

これが噂に聞いた『心の汗』なのでしょうか？

…それよりも、真君は準備出来ていますか？ すぐに僕たちの競技も始まりますよ。

心の汗を止めるために上を向きながら話題を変えます。

体育祭の第一種目は、多人多脚です。

簡単に言ってしまうと大人数による二人三脚でして、三人四脚が二組、四人五脚が二組、五人六脚が一組で行う二百メートル走です。体育祭の種目の中ではかなり大きな種目で、午前の部の最初にして、最大の目玉となっています。

その中の五人六脚に僕とタロ君、茜さんに波音さん、そして真君で出場することになっているのです。

「……う、うん。一応覚悟は出来てるかな」

…覚悟とはまた悲壮な決意ですね。

「もつと気楽にやれよ。転んだって別に誰も文句なんか言わないぞ？」

「けど、やっぱり僕が足を引っ張っちゃうんじゃないかな、って…」

真君にしては珍しく、暗い顔をしていることには僕もタロ君も気づいていましたが、そのことには触れませんでした。

真君は普段から笑顔を絶やさない、いつも他の人のために一生懸命になれるとても優しく、とてもまっすぐな人です。

真君のそんな姿を見ていると、こちらも自然に笑顔になってしまおう。いつかも例にあげましたが、まるで天使のような存在なのです。

ですが苦手意識があるらしい運動関係では、いつものような笑顔はなりをひそめ、憂鬱そうに肩を落とすのです。

僕が見る限り、それほど運動能力が劣っているわけではないのですが、心に植え付けられた苦手意識は思いのほか強いらしく、人前で走ったり飛んだり運動をするときには、緊張からガチガチに固まってしまうのです。

もしかしたら、過去に何か辛い出来事があったのかもしれないですが、それを知る術を僕は持ち合わせていません。

真君に無理に聞き出すことも出来ないことはありませんが、それをしたところで意味はありません。

乗り越えなければならぬのは、他ならぬ真君自身だからです。

僕たちに出来ることはほんの少し、迷う真君の背を押してあげることくらいです。

「……真君」

凜とした声が、体育祭の喧噪の中、妙にはつきりと聞こえました。

「……茜、ちゃん」

変声期を迎えていない、幼い声もまた、他のソレにまぎれることなく響きました。

今や、クラスの誰よりも真君のことを理解しているであろう人、茜さんが真君の隣に座りました。

…先、行ってますね。

「……はい。私たちの順番までには、必ず行きます」

僕とタロ君は立ち上がると、そのまま競技者の集合場所に向かって歩き出しました。

「…珍しい」

タロ君と無言のまま目的地に歩いていく途中、いつの間にか隣にいた波音さんが僕の方を見上げてそう言いました。

…何がですか？

「…お節介を焼かないから」

…波音さんの中では僕はそういうイメージなんですか？

「…当然。それに優しくて格好いい」

さりげなくスゴく恥ずかしいことをさらりと言ってくれる波音さんの頭を照れ隠しの代わりに撫でます。

「まあ、実際俺たちに出来ることなんてないからな。ヒロにしてはいい判断だ……………痛っ！ 新宮っ、砂はやべェ！」

「…何もしなかったくせに……………偉そうに」  
「けどヒロは他人のことに何でも首突っ込むから……………って、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！」

まだ競技が始まってもないのに砂まみれになっていくタロ君と、一心不乱に、かつ的確にグラウンドの砂をぶつける波音さんの様子に苦笑いを浮かべます。

とはいえ、僕たちにだって出来ることはあるのです。

慰めるのではなく。 励ますのではなく。

一人の親友として、彼を信じるのです。

真君ならば、そんな気持ちに伝えてくれる。

そう自分に言い聞かせるように、心の中で繰り返し、

姉びっくばん+ (ぷらす)

「…殲滅」

「新宮……さすがにそれは死ぬぞ………」

どこからか持ってきた、水分がたっぷりと含んだ砂（泥、と一般的に呼びます）の投擲体制に入った波音さんを見て、さすがに止めることにしました。

### 第十三話 大運動会編 貳・彼の気持ち（後書き）

僕たちの前の方々が、乾いた音を合図に走り出した直後、慌てた様子で真君と茜さんが走ってきました。

「ゴメン、遅れちゃって」

…構いませんよ。それより、早く足を結びましょう。

「うん！」

クラスカラーである青のハチマキを渡すと、真君はしゃがんで右隣の茜さんと足を結び始めました。

その真君の様子を見てから、茜さんの方を見ると、真っ直ぐにこちらを見据えながらコクリと頷きました。

その頼もしい様子に自然と笑みを浮かべつつ、僕も真君と足を結び始めました。

…全力で走って、ぶつちぎりますよ。

隣にいる真君にだけ聞こえるような大きさを呟くと、真君は一瞬驚いた様子でこちらを見たあと、いつもよりもずっと頼もしい笑顔を浮かべて返事をしました。

次回『大運動会編 参・女の戦い』

「……………あれ？ 私の出番は？」

…今回はお休みですよ、義姉さん。

「な、なんだってー!？」

お楽しみに。

第?話 何処かの誰が見る夢は(前書き)

1. はい、遅くなりましたが一万ヒットのおまけ話です。えらく長いので(通常の一話の二倍から三倍ほど)夜に見ない方が健康的です。

2. 本編ではどうしても張れなかった伏線をぐりぐりと詰め込んだ結果、結構なシリアスっぷりです、ごめんなさい。また、時系列はバラバラなのでご注意を。

3. どうでもいいことですが、隠しキーワード、『似非ファンタジ』が解放です。

4. 前置きが長くなりましたが、余話『何処かの誰が見る夢は』、始まります。

## 第??話 何処かの誰かが見る夢は

ケースA 橘家の場合

お鍋のなかに豆腐と水で戻したワカメを入れ、味噌を入れて味を調整していきます。

軽く火で炙った油揚げを最後に投入し、少しかき回してからお鍋の火を止めます。

後ろから炊飯器の電子音が聞こえてきたのを確認しながら、網焼きしておいたししゃもをお皿に乗せました。

「まだなにか手伝うことあるー?」

「えーと、じゃあご飯をよそってくださいですか?」

「あいあい」

テーブルを拭いてもらっていた義姉さんにお茶碗とヘラを渡すと、パジャマ姿の義姉さんは足取り軽く炊飯器の前まで歩いていきました。

義姉さんと僕しかいないこの家では、基本的に家事は分担して行っています。

ですが、一週間は七日間です。普通に割ると一日余ってしまうのです。

そのため、日曜日は時間がある限りは二人で家事を分担してさっさと済ませてしまおう、という方針になったのです。

そして、そんな説明をするくらいですから、今はやっぱり日曜だ

ったりするわけです。

木漏れ日がカーテンを通してリビングを照らしています。  
今日も快晴。夏の暑さが戻ってくるそうです。  
イヤですねえ。寒いのも好きではないですが、暑いのも好きじゃないです。

「ほら、ぼーっとしてないで用意用意。私はお腹が減ってるんだから！」

…はいはい、あまり慌てないで下さい。朝ごはんは逃げませんよ。

そんなことを考えていると義姉さんに背中を小突かれました。苦笑を浮かべながらとりとめのない思考を打ちきり、朝ごはんの用意を再開しました。

「これから出掛けない？」

朝ごはんを食べ終え、後片付けを済ませてひと休みをしていたところで、義姉さんがそんなことを言い出しました。

…出掛けるって、どこにですか？

「前にいた孤児院」

…はい？ な、何でまた急に？

義姉さんがそういうところは、長い付き合いですし慣れてるつもりでしたが、さすがに急すぎるというものです。

思わず呆けた声を出しながらも、一応何故そんなことを急に言い出したのかを聞いてみます。

「夢に出てきたからかなあ」

…いや、もう何て言いますか……………、まあ暇なんでいいですが。

「やたあゝ！ じゃあ着替えてくるねー」

ため息を吐く僕をよそに嬉々とした様子で用意を始めた義姉さんを見て、まあこんな日曜日もいいのかなあ、などと諦め半分で考えていました。

「うわっ、久しぶり！ 相変わらず何もないや」

…そうですね。でも、空気はとても綺麗ですよ。

電車を乗り継ぐこと一時間と少し。

僕たちは周りに何も無い、かなり殺風景な駅で降りました。

一応、関東圏内ではあるのですが、こういった秘境じみた場所はどこにもあるようです。

…次のバスは三十分後ですね。待ちましようか？

「んー、歩いてこ。三十分もかからないでしょ」

…まあ、いい天気ですしそれもいいですかね。

「そ、散歩がわりさね。それじゃあレッツゴー！」

バスのタイムテーブルを確認していた僕は、手を上げて元気よく歩き始めた義姉さんについつい苦笑しながらも、その後ろ姿を見失わないように早足で追いかけてました。

「やっつぱり、スゴい懐かしいや！」

乾いて地面が露出した田んぼ。

ぼつんぼつんとある無人のバス停。

鬱蒼と大樹が繁った深い森。

木漏れ日の形が無限に変化する神社。

久しぶりに来たにも関わらず、何一つ変わっていないその光景に義姉さんは感嘆の声をあげ、その場でぐるりと回りました。それに追従するように、義姉さんの薄手のブラウスとスカートがはためきます。

普段なら、その子供のような行動を、いけませんとたしなめるところなのですが、斯くいう僕も、幼少の頃の記憶とあまりに合致するその光景に、驚愕の声をあげていました。

… 凄いですねえ。どこもかしこも見覚えがあります。

「八年近く前なのに全然変わらないもんね」。あ、覚えてる？ あのバス停でヒロが迷子になったの」

… 忘れてたくても忘れられませんよ。あー、そういえばさつき通りすぎた森で義姉さんも迷子になりましたよね。あの時は大変でした。

「……うっ。そ、それはだねえ」

義姉さんが珍しく頬をひくつかせてあれやこれやと言いつつ、いるなか、これなら孤児院も前のように開いているに違いない、とそんなことをぼんやりと考えていました。

孤児院には義父さんと義母さんに引き取られてからも度々連絡をとっていたのですが、義姉さんと二人きりになってからはゴタゴタ

していたので連絡をとっていませんでした。  
なので、今日孤児院に訪問することになり、内心ドキドキだった  
りしたのです。

そんな気持ちだったからでしょうか。  
閉鎖された孤児院を見て、心臓が止まったのではないかと思える  
ほど、衝撃を受けました。

ありえないことなんて、ありえない。

そんなことは知っていました。身を持って体験しましたから。  
それでも、少し、ほんの少し目を離れた合間に、これだけ大切な  
繋がりが、簡単に消滅してしまうなんて、考えもしていなかったん  
です。

隣にいた義姉さんも、つい先程までの明るい表情かおではなく、何か  
我慢するような表情をしていました。

何か声をかけなければ、と口を開いた直後、

「なか、入ってみよ」

不意に、義姉さんはそんなことを口にしました。

回転が鈍くなった頭では、義姉さんの言いたいことを理解するま  
でに少々時間がかかりました。そんな僕が口を開くよりも早く、義  
姉さんは孤児院の入り口に張ってあった鎖の下を潜っていつてしま  
いました。

一瞬、その後ろ姿に静止の声をかけようとして……、止めました。  
正直なところ、僕も入ってみたかったです。なら、義姉さんの  
行動を止める言葉は、僕にはありません。

…足元、危ないですから気を付けてくださいね。  
「ん。だいじょーぶ」

義姉さんの後を追って、僕も鎖を潜りました。

…これは、また、壮大ですね。

思わず、息を呑んだのは、昔は子供たちの共有スペースとされていた大広間にたどり着いた時でした。

崩落していた天井から、太陽の光が差し込んで、残されていたピアノを照らしていました。

さながら、その光景はステンドグラス越しに光を浴びる聖堂のようで、驚くほど高潔な雰囲気醸し出していました。

「……夢に………だ」

そんな雰囲気飲まれていたため、義姉さんが何かを呟いたのを聞き逃してしまいました。

何て言っただんですか？ そんなことを聞こうとした時、義姉さんはトテトテと部屋の端に歩いていってしまいました。

「これ、覚えてる？」

置きっぱなしになっていた小型のソファアをどかした義姉さんが、その後ろの壁を指差してこちらを見ました。

義姉さんが指差す壁が見られるところまで歩いていくと、そこには赤い塗料でラクガキが施されていました。

…懐かしいですね。

「この時のヒロはいつも私にひつついてまわってたよね」  
…あはは、お恥ずかしい限りで。

昔を思い出すようにしみじみと語る義姉さんに僕は苦笑を浮かべて応じます。

そのラクガキは、確か油性ペンで書かれたものだったはずですが、時の経過を感じさせるように褪せてしまっていました。

少しだけ、残念で。

少しだけ、痛くて。

言い様のない感情が胸に去来しました。

「それでも、消えてないよ」

義姉さんが、ふっと笑みを浮かべて立ち上がりました。

「どんなに、薄くなっても。どんなに、色褪せちゃっても。消えてない、残ってるんだよ」

優しく、子供を諭すときのようにゆっくりと。

「私たちは、ここに居たんだよ」

僕に、そして自分に言い聞かせるようにしっかりと。

「そう。私たちは、ここに居た」

噛み締めるようにはっきりと、そう言いました。

「けど……それでも、どうしても辛かったら。私に言ってね」

そこで少しだけ間を置き、どこか儚げに見える笑顔を浮かべて、僕の頭を撫でました。

「私も、あなたをまもるから」

何にかえてもね。

そう付け足して、こつんと額同士を合わせました。

伝わってきたのは、暖かな体温と柔らかな匂いと。合わさった箇所からは心臓は遠いはずなのに。

とく、とく、とく。

とく、とく、とく。

確かに聞こえる僕と義姉さんの鼓動は、渴いてひび割れた心に染み渡って広がっていきます。

” 笑おう 一人じゃないから

僕たちは翼がないから翔べないけれど  
繋いだ両手があるから

キミを感じるココロがあるから

二人ならきつと何処へだつていけるんだ

結んだ手が 結んだココロがあるから

きつと世界の果ても超えていけるから

だから歌おう 怖くないから  
だから歩こう 一人じゃないから”

”唄”が、静寂に支配された孤児院に響きました。

少しの間呆けて聞いていましたが、未だに僕の頭に掌を乗っけている義姉さんの方に視線を向けると、はにかみながら笑っていました。

「……あはは、久しぶりに歌っちゃった。アカペラはちょっと恥ずかしいなあ」

義姉さんにははにかんだままググシと一際強めに僕の頭を撫でてから、手を僕の頭から下ろしました。  
少し残念に感じたのは内緒です。

「昔はここでよく歌ったりしたよね」

義姉さんは部屋の中央に置いてあるピアノに歩み寄り、そのイスに腰かけました。

昔、よくよく泣いていた僕のために、義姉さんが歌を歌ってくれたことが度々ありました。そのやさしい歌声を聞くと、自然と涙が止まったのは今でも覚えています。

…そうでしたね。義姉さんは昔から歌が上手でしたよね。音痴の僕には羨ましい限りです。

「あはは、そういえばヒロはなんでか音痴なんだよねえ。楽器全般はビックリするくらい上手いのに」

深くイスに腰かけているので足が浮いている義姉さんは、それをパタパタと前後させています。

…そういえば義姉さんは楽器音痴でしたよね。改善されましたか？  
「ぜんぜん。未だにけん盤のどれが『ド』でどれが『レ』だかもわからないよ。ヒロの方は？」

…僕も全然です。歌うと声が裏返って大変なことになります。

僕がそう言つと、お互いの顔を見合わせて、声を出して笑いました。

気が付けば、先程までの陰鬱な気持ちだが、嘘のように晴れていました。

今も昔も、僕は義姉さんに頼りきりなのかもしれません。

…そう言えば、このピアノは随分と綺麗ですね。

一頻り笑いあつたあと、はたとそんなことに気付いて義姉さんが座る。ピアノを見ました。

天井が崩落するほど時が経っているのに、目にも関わらず、目に見えるホコリはなく、ピアノ自体も損傷している様子がありません。

不意に義姉さんが鍵盤の一つに触れると、ピアノからは澄んだ音色が零れ落ちました。

…ありえない。

先程、自分でその観念を否定しておきながらも、思わずそう呟いてしまいました。

ピアノは、と言いますか楽器全般はまめに手を加えて調整しておかないと、すぐにダメになってしまいます。そしてこのピアノは見

ての通り、限りなく野ざらしに近い状態で、かなりの年月放置されていたはずです。普通ならば、弦が弛んでろくな音がしない、もしくは音自体しないはずです。

だのに、このピアノの音には一切歪みがないのです。

「いい音だねえ、心に染みるよ。アー、アー、アー………あつ！  
この音はここだね」

この不可解な出来事について頭を捻っていると、ただ純粹に楽しんでピアノをいじる義姉さんが視界に入りました。

…まあ、どうでもいいですかね、そんなことは。

そんな義姉さんの姿を見て、何だかもうどうでもよくなってきました。

竜也さんにも言われたことですが、僕は物事を難しく考え過ぎなのかもしれません。

わからないことは、わからない。それでいいのかもしれません。

…先程の歌、もう一度歌えますか？

「え？いちお覚えてるけど？」

…じゃあ久し振りに伴奏しますよ。せつかくこんな綺麗なピアノがあるんですから。

「うわっ、久しぶり！」

義姉さんは満面の笑みを浮かべ、跳ねるようにイスから立ち上がりました。

そのイスに腰掛け、指を慣らす意味もこめていくつか鍵盤に触れてみますが、やはりピアノにはどこにも違和感はありませんでした。

とん、という軽い音とともに背中に軽い衝撃を感じて振り返ってみると、義姉さんが背を向けて僕に寄りかかっていました。しばらくもぞもぞと背を動かしていましたが、ベストポジションを見つけたのかその動きを止めました。

「うっし、いくぞー」

とく、とく、とく。

さつきよりもはつきりと聞こえてくる鼓動を感じながら、ゆっくりと伴奏を始めました。

#### ケースB 新宮家の場合

「アンタ……、何でだろうね。料理だけはどうしても出来なかったわよね」

両親が仕事に出ている珍しい日曜日。私が家事一式の練習をする絶好日。

そんな日に、呆れたような、諦めたような声が開け放たれたドアから聞こえた。

手に持っていたフライパンを下ろし、声のした方を見ると懐かしい顔がそこにあった。

「…香音、いつ帰ったの？」

「ついさっき。一応、電話もしたしインターホンも鳴らしまくったけど？」

「…気付かなかった」

家の電話に目を向けると、確かに着信があったことを知らせるように『留守電ボタン』が点滅していた。

料理に集中していた上に、換気扇が全力で仕事をしていたので、まったく言っていないほど何も聞こえなかった。

「今日から一週間くらいは泊まるから」

急に帰ってきた我が姉、にいみやかのん新宮香音はそう宣言すると、居間のソファにだらしなく寝ころんだ。香音がはいっているスカートはそれほど短くはないが、行儀が悪いことには変わらない。

「…もつと行儀よく」

「……………へ？ あ、わかった」

私が眉根を寄せてそう注意すると、香音はちよつと驚いたような顔をしてから素直に居住まいを正した。

彼がいたらきつと同じことを言うのだろうな、と考えると少し気分が良くなる。

「……………何で笑ってんの？」

「…何でもない、気にしない」

……………どうやら顔に出ていたらしい。

少し前にも同じようなやりとりがあったような気がする。どうにも彼のこととなると私の顔の筋肉は仕事を放棄するらしい。

「まあいいけど。……それにしても、そのフライパンの中身は何？」  
「……………」

香音の指摘に、弛緩していた顔が盛大に歪め、それを誤魔化すためにそっぽを向いた。

……自分の手でそれを精製しておきながら、それでいてどこかのフライパンの中身は異次元の隙間からこぼれおちてきた『何か』なのではないか、と本気で思ってしまうほどそれは黒かった。

冗談のように黒いそれ ダークマター 暗黒物質 を、何も考えないように仲間の眠る場所に埋葬しようとしたところで、香音が帰ってきたのだ。

「で、何を作ろうとしてたわけ？」

「……………」

「もう一回だけ聞くわよ？ 何を作ろうとしてたの？」

「…バターライス？」

「私に聞くんじゃない」

近づいてきた香音にチョップされる。ついでに着けていたエプロンも奪われる。

香音の横暴な振る舞いに非難の視線を向けると、思い切り呆れたような視線を返された。

「お昼は食べてないんでしょ？」

「…まだ、だけど？」

「そ。じゃあ何か作るから待ってなさい」

「…私が」  
「待ってなさい」

香音はびしっとソファを指差すと、慣れた手つきで準備をしはじめた。

抗議しようとして口を開いたところで『邪魔っ!』とタイミングよく一喝されてしまい、所在なくなってしまった私は、しょうがなく言われたとおりソファで待つことになった。

「…おいしい」

……そして、おかしい。納得いかない。

使ってる材料は同じはずなのに、何故私の料理は漆黒の衣を纏っているのか。疑問でならない。

「それはこっちのセリフよ」

昼食はすでに済ませてきたらしい香音は、私が食べてる姿を見ながら隣のソファに腰掛けていた。

しばらくじっとこちらを見ていた香音だが不意に、ところで、と会話を切りだしてきた。

「何で急に料理なんてやり始めたの？ 例の彼のため？」

先程、片手間で淹れていたコーヒーを飲みながら、心底不思議そうにそんなことを聞いてきた。

彼の話しは、香音が前に帰省してきたときに軽くしていたのだが、その後何故か不機嫌そうにしていたので、香音の方からその話を振

ってくるのは少し意外だった。  
それでも、私は即答した。

「…そう」

「そっか……」

答えた私の顔を見てからやはり不機嫌そうな表情をする香音に、  
首を傾げていると香音の表情はさらに不機嫌そうになる。

「アンタ、家事の才能ないわよね」

「…言われなくてもわかってる」

今度は私が顔を歪める。自覚はしてても他の人間に言われるとそれなりに悔しかったりする。

「けど、それでもこうやって努力してる。……何で？ その子はアンタが家事が出来ないとアンタのことを嫌いになるの？」

「…それはない」

それだけは断言できる。

たぶん、彼は苦笑いを浮かべながら私の頭を撫でて、頑張ったんですね、と受け入れてくれるだろう。

けど

「…それじゃあ、ダメ」

そう、それではダメなのだ。

彼は何でも出来る。

勉強だって、運動だって、家事だって、私と比べるべくもなく、

本当に何でも出来る。  
だから、いつもいつでも、自分を差し置いてでも私を助けてくれる。

彼に意識してもらえるのも、気を使ってもらえるのも、正直、とても嬉しい。

けど、そのままじゃダメなのだ。

彼のためにも

私のためにも。

いつまでも、彼にとって『手を焼かせる存在』でいたくない。それだけで終わらせたくない。

彼の後ろ姿を見て歩くのも悪くない。だけど、どうせなら隣で手をとって歩きたい。

「…だから、こんなところで躓いている時間はない」

誇れる自分であるために。

今度は私が彼を守るために。

「……………アンタ、変わったわね」

私の、誰にでもなくした宣言を、黙って聞いていた香音はぽつりとそう呟いた。

何が、という疑問を視線に乗せて香音を見ると、大人びた笑みを向けられると同時に頭を撫でられた。

「少し前のアンタは、こんな正直に自分の心を表せなかったわよ」  
彼にされるよりも少し乱暴に、それでも優しく頭を撫でられ、目を細めてしまう。

……変わった。

確かにそうかもしれない。

誰の心の内でも容易くわかってしまう私にとって、心は恐怖の対象であり憎悪の対象でもあった。

剥き出しの感情と貼り付いた笑顔に、恐怖して、それを隠そうと憎悪していたからだ。

強くあるう、一人であるために。

実の親にすら一線を引いた反応をされていた私は、自身の心にそう刻みつけた。

結局、そんなことを続けられるほど私は強くなって、ぼろぼろになったところを彼に助けられた。

「……本当はアタシがその役目を担わなきゃいけなかったんだけどね」

自嘲ぎみに笑って香音は呟くと、撫でていた手を止めた。

香音は、私よりも四つ年上だ。

能力に戸惑う私を、姉である香音はずっと支えてくれていた。親すら目を逸らした私の能力も、心も、理解した上で抱きしめてくれた。

初めて理解者を得た私は、どうしようもなく泣きじゃくって、どうしようもなく甘えた。

「何だかアタシの出番がとられちゃつみたいで悔しいわ」

けれど、当時の私はそれを悟られるのが嫌で、一時が過ぎて心の波風が治まったら香音の気持ちなど考えず、意地っ張りに突き放した。自分のことしか考えてなかったそのときの私は、今からすればどうしようもなくみつともなくて、当時のことを思い出す度にその横っ面に全力パンチをお見舞いしてやりたい気分になる。

まあ結果がどうなったかは今更語るまでもなく、香音が大学に通うために一人暮らしを始めた途端に、心の均衡が崩れてさんざん他の人に迷惑をかけてしまった。

今でも、こうやって香音に心配をかけている。

「大丈夫」

だから、安心させるように胸を張って、

「一人じゃないって気付いたから」

頭一つ分高いところにある香音の頭にも手を乗せて、

「…そう気付けたのは香音のおかげでもある」

恥ずかしいけれど、少しだけ素直になって、

「ありがとう」

今まで、くだらない意地が邪魔して言えなかった、感謝の言葉を口にした。

香音は、一瞬、呆けた顔をしたあと、盛大に顔を歪めた。

「馬鹿……っ！」

そう言っつて、私に抱きついてきた。

その勢いを殺すことなど出来るはずもなく後ろにあったソファにもつれて倒れ込んだ。

「ばか、バカ、馬鹿………！！！」

鼻をすする音と、呪詛のように私を罵る声だけが延々と部屋に響いていた。

私はただ、香音の頭をいつかしてもらったように撫で続けていた。

「……………何だかいつもと逆じゃない」

「…たまにはいい」

「納得いかないわよ……………」

あれから十数分後、抱きついたまま悔しそうに呟く香音の頭を、私は未だに撫で続けていた。

いつもやられている側なのだが、人にやるのも悪くない感触だ。今度、彼にもやってみようと思う。

「……………アンタを変えた男の子ってどんな奴なの？」

まるで私の考えていたことを読みとっていたかのように、不意に香音がそんなことを言い出した。

「イイ男？」

「…いい男」

当然即答した。

私は彼ほど強い人を知らない。

同時に彼ほど弱い人も知らない。

強くて、弱くて。それでも前を向いている彼が、私は大好きだ。

私が即答した様子を見て、香音が口を開いた。

「私たちは姉妹よね？」

口を開かずに頷いた。

「好きなオカズも好きなテレビ番組も同じよね？」

頷いた。

「アンタはその子にベタ惚れなのよね？」

頷いた。三回ほど余計に。

「じゃあ私もその子に会い」

「…それはダメ」

当然のように即答した。ついでに彼がするように香音の頬をつまんで黙らせることにした。つまんだ部分が微妙に涙や鼻水で湿っている気がしたが、今日はまあ許すことにした。

ケースC 伊田家の場合

…ぴちよん。

今日は珍しくバスケット部の練習がなかったはずだ。

バスケットはまあ好きなんだが、高校の練習は中学の時のそれとは、質も量も違う。今でこそだいぶ慣れたが、それでも練習中ぶっ倒れるやつもいたりするくらいには大変だ。

…ぴちよん。

……つーわけで時には何も無い休みの日が恋しくなったりするわけなんだが

「……どこだ、ここ？」

俺は確か自分の部屋の布団で寝てたはずだ。

そこから今に至るまで一度も覚醒していないのだから、俺の寝相が壊滅的に悪くなければ見知った天井か壁が見えるはずなんだが…

…ぴちよん。

俺が目覚めて一番に見たのは荒削りな石が剥き出しになっている天井だった。

俺の部屋っていつの間にかこんなアウトドアなりフォームされたん

だ……、ってそんなボケをかましてる場合じゃない。

…ぴちよん。

あー、ちなみにこの『ぴちよん』ってのはさっきから俺の額にしつこく水玉が落ちてくるのな。

くすぐったいそれを拭うために手を動かそうとしたところで、更なる違和感に気付いた。

手が……、拘束されてる。ついでに足も。

ここにきて、寝ぼけていた頭が急激にクリアになる。脳細胞の一つ一つがしっかりと働いているのが感じられる。

そして、そんな脳細胞たちの首脳会議の結果は多分に正鵠せいこくを射ていたと思う。こんな非常識なことを何の前触れもなく行う人間、俺は一人しか知らない。

「上姉うしえねえええ！ この拘束解いてくれええええ！」

とりあえず、この状況を作り出したであろう人間の名を、全力で叫んでみた。

「ふむ。よく私が出たとわかったな。なかなか良い洞察力だ」

「そりゃそうだろうーよ。……ってか遅エエエエ！ マジこの部屋時間感覚ねえからってどんだけ待たされたと思ってたんだよ！？ 軽く二時間はこのまんまだぞ！？」

「……ふん、この程度で感覚を狂わせるとはな。私がお前を放っておいたのは四時間だ」

「まさかの倍プッシュユ!？」

叫び続けること四時間(体感二時間)、ようやく現れた黒幕の発言にかなり衝撃を受ける。

だが、試合でも枯れたことがない声が、今はガラガラなのだからそれも頷けることなのかもしれない。

とりあえずそんな状態になるまで叫んだためか、少し落ち着いてきたので(ただ単に騒ぐだけの体力がなくなっただけかもしれないが)、目の前の上姉こと伊田琴音に状況の説明を求めることにした。

「……何で朝っぱらからこんなことすんだよ? 下姉したねえとかオヤジは俺が拉致拘束されてることは知ってるのか?」

「何、少し質問がしたかっただけだ。上でするには少々具合が悪い話でな、下に同行願ったわけだ。奏は感じているのではないか?」

父様の場合は逆に知らないわけではないだろう」

質問した内容に、順番通り答えていく上姉の冷静さにそこはかかない苛立ちを覚えるが、もはやこんなことはいつものこと、と脳内処理を進め、現状を把握するために得られた情報を整理してみる。

一、上姉は俺に何らかの質問、てか詰問をするために朝っぱらからこんなところに連れこんだらしい。

二、この中世を彷彿とさせる拷問部屋は、地下にあると思われる。

三、下姉こと伊田奏と七色の遺伝子を持つなどと言われる変態にして現伊田家当主、伊田慎太郎いたしんたろうはこの割と抜き差しならねえ状況を知っていてスルーしている。

四、仰向けのまま手も足もキレイに拘束されており、外せる気がしない。

五、上姉は楽しそう。

もう、どこからツッコんでいいやら皆目見当もつかないんだが、とりあえずこれだけは言わせてくれ。

詰（死）んだろ、これ。

……いやいやいや、マジ大げさな物言いかじゃないからな！

見るよあの上姉の笑顔、あんな顔ドS星雲からやってきた女王様（二重の意味で）だってしねえよ!？

「まったく、好き勝手言ってくれるな、太郎」

「……………っ！」

こ、声に出てたらしい。

マズい、何とかして宥めなければ、と考えたところで上姉がパチンと指を鳴らした。途端、床屋のイスのように俺が拘束されていた台が起き上がり、角度が九十度になって足が床についたところでその動きが止まった。

「いったい何を……………」

「前々から考えていたことだがお前のその年上を敬わない態度、矯正しなければならぬな」

上姉が再び指を鳴らすと、突然、黒子くろこの衣装をまとった人間が数人、天井から降ってきて音もなく着地した。

何も無い天井からどうやって降ってきたのかは非常に気になるどころではあるのだが、それ以上にその黒子たちが手に持っているものに意識がいった。

「筆に……………羽？」

そう、どちらかというクナイや手裏剣でも持っている方が似合  
いそうな黒子たちは（いや、まあ実際持ってたらヤバいんだが）、  
習字用の大きささまざまな筆を持っていたり、真っ白な大振りの鳥の  
羽を持っていたりするのだ。

「剥け」

『はっ！』

意図が読めずに呆けている俺を無視し、上姉が黒子たちに指示を  
飛ばすと、女の声がキレイにハモって返事をする。

そのうちの一人がハサミを持って近づいてくると問答無用に俺の  
シャツを切り出した。

「ちよつと待て！ いきなりなんだってんだ！ てかアンタ女なの  
かよ！？」

「ぎゃあぎゃああと取り留めのないことを喚くな」

「うふふ……暴れると綺麗な肌に傷がついてしまいますよ？」

「だからアンタは何なんだよ！？ つーか鼻息荒げんなやああああ  
ああああ！！！」

興奮しているのか、ちよつと上擦った声を出す黒子に、色々と危  
機感を感じて暴れるも、手足を縛られた状態ではろくな抵抗も出来  
ずにシャツを切られてしまった。

もはや布切れと化した寝間着を黒子が手際よく取り除いていくな  
か、俺は上姉を睨みつけて声を荒げる。

そこ、無駄な抵抗とか言っな。

「服なんざ切つてどうするつもりだよ、上姉ッ」

そんな俺の様子を歯牙にもかけず、上姉は俺が先程まで否応なし

に見つめていた天井に視線を送っていた。

「太郎、頭は何ともないのか？」

「……は？ いや大丈夫だけどいつたい何だよ、急に」

相も変わらず言動が突拍子のない上姉に、思わず毒気を抜かれる。

……しかし、上姉が俺の健康状態に毛一本ほど、神経を割くだろうか？

……！

まさか遅ればせながら、とうとう家族の大切さに気付いたのだろうか？

だとするならば体の心配はいい。今すぐこの拘束を外して目の前で荒い呼吸を繰り返す黒子たちを退かしてくれ。

「お前に当てていた水滴、あれも拷問の一種だな。何でも、定期的  
に脳に振動を与えると浅い催眠状態になるらしい。お前の脳なかみ、身体  
と一緒に存外に頑丈らしい」

「あああああっ！！ わかってたよ、どうせそんなこったろっつ  
て思ってたよ！！！！」

……もう叫ぶしかないと思った。

実の弟にさらりと拷問を仕掛ける姉を持ってしまった自分の境遇  
に、泣きながら叫ぶしかないと思った。

が、そんな微かな希望すら叶えさせてもらえないらしい。

「ひっ！！！！」

突然身体に走った言い知れぬ感覚に、叫ぶことを中止し、代わりに変な声を上げてしまう。

おそるおそる、その感覚が走った方向　　足に目をやると、黒子の一人が羽を持った手を震わせていた。

「……………琴音様、そろそろ」

「ああ、そうだったな」

手だけでなく声まで震わせている黒子の言葉に、上姉が首肯した。

ここまでくれば、何をされようとしているのかさすがにわかる。

「う、上姉……………。止めてく」

「やれ、くすぐり倒せ。ただし、最後の一線は越えるなよ」

『はっ！』

「止める、来るなッ！……………ひ、ひ……………ひいやああああああッ……………」

目の前にはB級映画よろしく、ゾンビのようにフラついた足取りで近づいてくる黒づくめの集団。

……………もう絶叫するしかなかった。

最後に見えたのは、愉快そうに笑って紅茶を飲む上姉の姿だった。

「そういえば、お前に聞きたいことがあるのだがな。太郎、お前まさか義弟君とよからぬ関係に発展してはいないだろうな？」

「アハハ、才姉さま。サスガニソレハアリ得マセンヨ？」

「だろうな。何でも腐った女子とやらがそんな噂をしていたらしい  
のでな。ちなみにお前は攻めで義弟君は受けだそうだ」  
「ゴ冗談ヲ。僕八至ツテノーマルデスヨ？」

そんなことを聞いただけに……？

そんな言葉を飲み込んで、平坦な笑い声を上げる。

小一時間近くなぶられて、心も体もすでに白旗を掲げているのだ。

(ああ、俺、女性恐怖症になりそうだわ)

(何と言いますか……、頑張りましょう、タロ君)

脳内に浮かんだ我が友の励ましの言葉に、不覚にも涙があふれそ  
うになった。

ケースD ????

月が綺麗な夜、冬の到来を感じさせる澄んだ空気を裂いて目的の  
建物を目指す。

「ここ、か……」

程なくして見えたボロボロの建物の門に埋め込まれているプレー  
トを、黒革の手袋をつけた手でなぞり、ついていた砂ぼこりを落と

してその建物の名前を確認する。

周りに誰もいないことを確認してから中に入ると、小型のライトをつけて一直線に『ある部屋』に向かう。

もとより、さほど広くもない建物だ。すぐにその部屋にたどり着いた。

その部屋では、ライトがいらないようであった。大きく抜け落ちている天井から月明かりが射し込んでいたからだ。

歩みを止めることなくそのまま部屋の中央部 月明かりに照らされるピアノの元に向かう。

軽くピアノに触れて手袋に埃がついたのを確認し、開け放たれていた鍵盤にも手を触れた。

「……そうか。残された時間は少ないんだな」

すでにその使命を終えていたピアノにもう一度触れ、自分に言い聞かせるようにそう呟いた。

## 第十四話 大運動会編 参・女の戦い

- ・どの部活でも参加可能。
- ・各部活から五人を選出し、その内の一人を大将として更に選出。
- ・各部員は風船付きのヘルメットをつけ、その風船が割れると死亡判定。ゲームから除外される。
- ・勝敗は大将の風船（色付き）の破壊のみ。
- ・フィールドはグラウンド全域。ただし、客席まで飛び込んだチームは即時失格とする。

・武器等は支給されたもの以外は使用禁止（素手での攻撃、自然物の利用は可能）。支給されるのは、モデルガン（ペイント弾、五発装填済。使う場合は両チームにゴーグル支給）、刀（スポーツチャンバラ用）、盾（縦横一メートル半）、予備の風船（大将は選択不可。どこにつけるかは自由）、各部の特徴となるような物（要申告）の五種。そこから各部自由に五つを選ぶ。

…… e t c .

（ブリッツ・ルールブック『来たれ、ぐらでいえーたー！』より抜粋）

第三種目の呼び出しを遠くに聞きながら屋上への扉を開けます。校内にこもっていた少し冷えた空気が逃げだすかわりに、夏もかくやという熱風が滑り込んできました。

…あつあつ。

誰に言うでもなくそう呟いてから、覚悟を決めていやに張りきっている太陽の下に歩を進めていきました。

「あ、ヒロくん。意外と早かったねえ」

扉の開閉音で気付いたのか、簡易テントが張つてある屋上中央部にいた奏さんがこちらに手を振りながら小走りに向かってきました。他にも数人の方々がこちらに気付いたようで、手を振っていました。それに会釈を返しながら、予定調和の如く飛び込んだきた奏さんの両肩を掴んだまま回転します。

一回転して飛び込んできた勢いを殺すと、そのまま地面に立たせます。

「ぶ〜。なんか手慣れてきてるみたいないな対応で悔しい」  
…会う度に飛びつかれているんですからさすがに慣れますよ。それより、これ、差し入れです。

両肩にかけていたクーラーボックスを開けて中の飲み物と軽食を見せるとぶーたれていた奏さんの顔が輝きました。

こういつてはアレなんですが、琴音さんと違って大変御しやすいです。

「じゃあAグループとBグループの人は十五分休憩してー。食べ物は自由に、飲み物は絶対持つて行ってね！」

『はーい』

奏さんが振り向きながら手早く指示を出すと、AグループとBグループの方々が手を挙げて近づいてきました。

そういつた指示をほぼノンタイムで出せるところに伊田家の血を感じながら、クーラーボックスに入っている飲み物や食べ物を手渡

していきます。

三年の方、二年の方、同級生の方と手渡していくうちに、ここにいなければならぬ人がいないことに気付きました。

…えー、と。クイナさんはどこに行っただんですか？

本来、ここにいて奏さんとともに指揮をとっているはずのクイナさんがどこにもいないのです。

クイナさんは小さいので、誰かの影に隠れてしまっている可能性も考慮して注意深く周りを見渡してみましたが、やはりその姿を見つけることは出来ませんでした。

「んー？ 気になる？」

琴音さんがよくする、愉しげな表情を浮かべ、奏さんが首を傾げました。

…はい、気になります。クイナさん、昨日から何やら怒っているようですし……。

「……いやあ、さすがに鈍いなー」

僕がうなだれながら先程のクイナさんの状況を説明すると、奏さんは頬をかいて苦笑を浮かべました。

何でしょうか？ スゴク呆れられているように感じのですが……。

「……クイナちゃんは帝稜の様子を見に行っただよ」

更にうなだれる僕の頭に腕を乗っけながら、耳元で奏さんが呟きました。

その内容に思わず眉根を寄せます。

…帝稜、ですか。危くないでしょうか？

「もちろん危ないよ。けど止めても聞かなくて……」

深追いはしないようにとは言っただけどねえ、と呟くと奏さんにしては珍しく大きなため息を吐きました。

今年の体育祭は、例年の体育祭よりも大分警備に手を入れていきます。

去年、一昨年と警備についたのは数人の父兄の方々や、手の空いた教師の方々だけらしいですからかなりの強化といえるでしょう（人知れず琴音さんが私兵の方々を出していたそうですが）。

ここまで露骨に警備の人数を増やしたのですから、帝稜の方々も情報が漏れているのはさすがに感じているでしょう。そうなるかとガードが厳しくなるのは当然ですし、情報収集に伴う危険が増すのも当然です。

「橘さんには言わないでほしいってさ」

渋面を作りながら、携帯に手を伸ばしかけたところで奏さんにその手を握られました。

「信じてほしいって」

一言。奏さんにそう言われて思わず動きを止めます。

そんな僕の反応を見ながら、諭すような口調で奏さんが続けます。

「ヒロくんは何でもかんでも背負っちゃうからね。まあ今回の件はお姉えが悪いけど、本当はもっといろんな人に頼っても良かったと

思うよ」

…ですが、

「だーかーらー、そーゆうところがダメなんだよ。……誰かを信じて待つことも、時には必要なんだよ？」

そうビシツと言われ、反論も出来ずに口ごもります。

「たまにはさ、誰かに頼ってみなよ。『君』の背中も手のひらも、そんなに大きなものじゃないんだから」

『君』。初めて奏さんにそう呼ばれて少しばかり動揺します。その反面、心の別の部分は少しだけ冷静になっていきます。

…クイナさんは、大丈夫でしょうか？

「あはは、まあだ言ってる！ 大丈夫だよ。クイナちゃんはある見えてもたくましいんだから。それに……」

奏さんはそこで言葉を切ると、僕の背中を軽く叩きました。

「もし何かあっても王子様が助けにいけばいいんだからね」

そう言うと、頭にかかっていた重量感がなくなりました。

下げていた頭を上げ、奏さんの方を向くと、奏さんはすでに僕に背を向けて簡易テントの方へと歩いて行くところでした。

その姿を確認し、僕も小走りですそれに追いかけます。数歩走って奏さんに追いついたところで、他の方に聞こえないように呟きました。

…ありがとうございます。

「うん、どういたしまして！ じゃ、行こー」

振り返った奏さんは満面の笑みを浮かべて返事をしたあと、僕のジャージの裾をつまんで再び歩を進めました。

「南西、明らかに学生ではない人間を確認しました！」

僕が屋上に来てから十分ほど経った頃でしょうか、屋上の一角が、にわかに騒がしくなります。

どうやら、監視についていた方が侵入者を発見したようです。

「オーケー！ 目え離さないでね」

「はい！ …… あっ！ どうやら森の中に進入するようです」

「……森かあ。じゃあ集音マイク向けて。悲鳴が聞こえたら教えて。『回収』に向かってもらうから」

「ひ、悲鳴ですか？ わかりました」

その方が僅かに顔を引きつらせながらも言われたとおり集音マイクを向けた直後、少し離れたこちらにまで悲鳴が聞こえました。

この学校の校舎の南西側には山と隣接した森があり、その部分には簡易のシャッターしかありません。自然から学ぶことも多い、というモットーのもとにこういった特異な形で学校が創られたらしいです。

大樹が所狭しと生えているこの森は昼といえども相当に薄暗く、かつ何も考えずに歩を進めれば十中八九迷うほど広大です。

人の目につきづらいこの土地は、潜伏にはうってつけの場所であることは言うまでもありません。

守るにしても、攻めるにしても、この森が急所であることは間違いないでしょう。

かといって、かなりの広さであるこの森全域を見て回ることは当然出来ません。

そこで考えたのは、森の中、特に学校付近の森に大量の『罾』を仕掛けることでした。もちろんただ仕掛けるのではなく、どこに、どれだけ、どのような罾が仕掛けられているかを完璧に把握しなければいけません。

そして、今回その大役をお任せしたのが、

「ふぶん、これで今日三人目だね」

隣で得意気に笑っている奏さんでした。

当初、僕がある程度罾を仕掛ける場所を地図に起こしていたのですが(三日ほどかけてフィールドワークしました)、奏さんから言わせれば、甘い、とのことで今日の朝には大幅に罾の位置と量が変更されて設置されており、かつそれが全て地図の上に正確に印されていました。

僕としては、作ってきた地図に手直しを入れてもらおうと考えていただけだったのですが、まさかその日のうちに設置まで終わるるとは欠片も考えていませんでした。

奏さん曰く、得意分野だから、だそうです。

「非殺傷の罾は作りづらかったけど頑張ったかいたががあったね。……  
いっそのことちょっと怪我させちゃった方が楽なただけ」

さらつと恐ろしいことを奏さんが呟いた気がしますが、きつと気のせいです。

「えー、と。あそこの近くにいるのは……『隼』はやぶさだね。隼の人

たち、聞こえてる？」

奏さんは地図を眺めてから、無線機を掴みました。

今回の作戦は、部隊数がやたらと多いため、小隊毎に名前がついています。電撃参戦となった琴音さんの部隊にはアルファベットを、もともと組んでいた風紀委員の部隊（+補充に回った琴音さんの部隊の方々）には鳥の名前がつけられています。今し方呼ばれた『隼』という部隊は、確か二年生の方々を中心となった小隊だったはず。

ちなみに遊撃隊として個人行動する僕にも名前がついていたりするのですが、ちょっと恥ずかしいので内緒です。

『……………ああ、聞こえるぞ』

無線機から聞こえてきたのは小さなノイズと落ち着いた声でした。

確か、この声は……………

「あー、隼隊は静ちゃんだったね。じゃあ安心だ。ポイント・セブンの辺りにいる獲物の回収に向かって。どうせ盗撮にきた変態さんだろうけどねー」

『……………了解した。あと、俺の名前は静留だ。そこで略すな、女みたいだろ』

「静留だって十分に女の子みたいな名前だよ。それに外見だって綺麗だし」

『……………』

奏さんの主張に、無線機の向こう側にいる人物が黙り込みます。

確か、隼隊のリーダーは獅子道静留さんだったはず。

静留さんは剣道部の新部長であり、個人の部で全国大会に進出したこともある凄腕です。

外見は奏さんの語るように、女性が嫉妬するほど女性らしいのですが、静留さん自身はそれを気にしないようです。

ちなみに奏さんとは同じクラスらしく、度々先程のように絡まれているらしいです。励ましの言葉の一つでも掛けたいところなのですが、静留さんとは僕も面識があり、かつちょっと話じづらい事情があるので、心の中でエールを送るに留めておきます。

『もしやとは思うが、隣に橘がいるか?』

ですから、静留さんがそんなことを言いだした時には、思わず声が漏れそうになりました。

な、何故急にそんなことを……? 声に出ていた、なんてことはないはずなんですが。

「どしたの、いきなり?」

そんな僕の心境を察してくれたのか、奏さんが疑問を投げかけました。

『……………勘だ』

少しの間のこと、返ってきたのは非常に単純明快な言葉でした。

『何となく、頑張ってください、と慰められた気がした』

ニュータイプばりの反則的な直感を見せつける静留さんに、盛大に頬を引きつらせませます。

『橘め……、いつまでも逃げ回れると思うなよ。絶対に我が部に入部させてやる』

続く言葉に、今度は頭痛までしてきました。

静留さんとは一学期の頃の合同体育の授業の時に出会ったのですが、その時に目をつけられ、以降、顔を合わせる度に剣道部の入部を迫られています。体育の授業の時などは、基本的にのりくらりと軽くこなすようにしているのですが、それでも静留さんには見破られてしまったようです。

決め文句は『俺ならお前に（剣道をやること）幸せを感じさせてやれる』というものです。

（ ）の中身を言わない、いつも冷静な静留さんが情熱的にこのセリフを言う、放課後の教室、という色々な状況が重なり、その方面の方々に勘違いをされる事態となったのは記憶に新しいです。

「……んー、いないよ。今はお姉えのとこじゃないかな」

『会長か……。しょうがないな、今日は諦めよう』

おそらくしかめっ面をしているであろう僕の顔を見た奏さんは、さらりと嘘をついて僕を匿<sup>かくま</sup>ってくれました。

驚いて奏さんの方を見ると聖母のように慈愛溢れる笑顔を浮かべていました。常の奏さんならば何かしらイタズラを仕掛けてきてもおかしくないのですが、今回はそのような誘惑に負けなかったようです。

義姉さんと違って大人です。さすがですね。

「あつ、そういえば」

などと、思ってたのですが。

「頑張り次第ではヒロくんを一カ月好きにしてもいいって。お姉えが言ってたよー」

『な、何だと……？ 了解した。隼隊、至急現場に向かう！』

絶句、です。

穏やかに済みそうであった話題が奏さんの一言で予想だにしない展開に発展しました。

声を出そうにも、出した瞬間に静留さんに気取られてしまうので抗議の一つも口に出出来ません。

「お姉えのせいお姉えのせい。私は悪くないよ」

誰にともなく、白々しく呟く奏さんの声と、

『待つてろよ橘あああ！ お前は必ず俺が頂くからなあ！！』

通信機ごしに聞こえてくる静留さんの雄叫びだけが、妙に大きく頭に響きました。

「……あー、あの先輩も相当変わり者だからなあ」

「何で言うか……、キャラ変わったちゃってるもんね……」

太陽が頂点に上る頃、手が空いた僕は癒やしを求めてタロ君と真君の元にやってきていました。

普通、警備の責任者をしている僕の手が空くことはいはずなのですが、奏さんが

『休憩にいつてこーい！ 異議は認めん！』

と言って僕のことを屋上から追い出したのです。手持ち無沙汰になつてしまった僕は、琴音さんがいる本部（校庭の一角です）に向かおうとしたところ、腰にぶら下げていた本部直通のトランシーバーから琴音さんの声が聞こえてきました。

『こちらにも来なくていいぞ。そのまま休憩、一時には戻ってきてくれ』

僕の行動を見透かしたように琴音さんに釘を刺され、呻き声をあげてしまいます。

お二人が気を使つてくれているのはよくわかるのですが、さすがに他の方々に申し訳ないような気がします。

とは言え、お二人の言葉に僕が反論など出来るわけありませんし、実際問題それなりに疲れていたのです、お言葉に甘えさせて頂いたのです。

「そついや、あと何の競技が残つてたっけか？」

午前の部の最後の競技が終わり、お昼を食べるために方々に散らばつていく人たちを見ながら、不意に夕口君がそんなことを口にししました。

午前の部をクラス対抗戦とすると、午後の部は部活対抗戦といった様相で行われます。

運動部にとつて来期の部費を査定する意味合いもあるので、午前の部以上に盛り上がることもあるようです。

もちろん、クラス対抗の競技も最後の最後にあるのですがそこまで体力が保つのかは微妙なところです。

…確か部活対抗リレー、部活対抗障害物競争、あとブリッツなんか  
がありましたね。

「あーそうだ、ブリッツか。俺、出ないといけないんだよなあ」

「えと、ブリッツってなに？ 初めて聞いたんだけど」

首を傾げてこちらに問いかける真君の反応は、一学年で、かつ部  
活に所属していない人間としてはある意味当然の反応です。たぶん、  
日本中のどこを探してもこれほどフリーダムな競技を実施する体育  
祭はないでしょうからね。

ざっと真君に競技内容を話すと、しばらくぼかんとしたあと、お  
もむろに口を開きました。

「……そ、それってさ、危なくないかな、スゴく」

「危ないだろうなあ、スゴく」

事もなげに応じるタロ君に、真君は声も出ないといった様子で驚  
いています。

まあ、気持ちは痛いほどわかります。僕も関係者ということ  
で、事前に情報を得ていなかったならば、同じような表情をしていたか  
もしれません。

…けど人気なんですよ、この競技。

「え、こんなに危なそうなの？」

「やっぱり普通の学園生活じゃガチンコで勝敗を決めるって機会が  
ないからなあ。みんな何だかんだで楽しみにしてんのさ」

…それに皆さんの凝りかたも楽しいんですよ。去年なんか弓道部の  
方々、赤い服を着てみんな弓を持って来たらいいですからね。

「本当は双剣がよかった、とか言ったらいいな。さすがに許可が

降りなかったらしいが」

「…………へえ、それはちよつと楽しそうかも」  
「皆様！ お待たせしてしまいましたわね！」

真君が少し表情を柔らかくしたところで、不意に声が掛かりました。声につられてそちらを向くと、巻き髪とクラスカラーの八チマキを風になびかせている美佳さんと、げんなりといった様子でそのあとに続く茜さんと波音さんが目に入りました。

「さあ！ 決闘の時間ですわ、茜さん！」

「は、はあ…………」

さながら、台風のような存在感を放つ彼女に、つい苦笑を浮かべてしまいました。

情報は命である。

私の座右の銘だ。

大げさな物言いではなく、情報の真偽は時に人の命をも左右する。私が幼い頃、父は多額の借金を背負っていた。理由はあまりに単純。普通に考えれば、あり得ないことだとすぐにわかるようなふざけた情報に踊らされて、見込みのない物に投資をした。

奇跡は、当然のように起きなかった。

綺麗な家も、大きな家具も、私の服までも。

全部全部持って行かれて、残されたのは当時の私では数えること

が出来ないほど膨大なゼロが並ぶ借金だけだった。

……結局のところ、そんな私達を助けてくれたお人好しがいて、その人のおかげで今こうして生活が出来ているのだから、奇跡は別の形で起こったのかもしれないのだけど。

まあ、そのような過去を持っているだけに、正確な情報がいかに重要なものであるかは他の人間よりもずっと理解しているつもりだ。

そんな私が、現在、息を殺して潜伏しているのは学校にほど近い廃工場だ。

人目が少なく学校に近く、かつ適度な広さを持つこの建物は学校に攻め込む前の決起場としては絶好の条件を揃えている。

そんな見るからに危険なスペースをそのままにしておいたのにはもちろん理由がある。

まずは、単純にこちらの頭数が揃わなかったことが挙げられる。頭数として換算出来ないと思われるいた女子を屋上からの監視役にして全体の動きをスムーズにしたり、生徒会長がどこからか軍服の人を連れてきたりしたものの、外に攻めていけるほどの人数が揃っているとはとても言えない。というか、あくまで大切なのは学校を守ることであり、生徒を守ることなのだから目的を履き違えてはいけない。

また、この廃工場がかなり寂れているとはいえ、人の出入りがまったくないわけではない。ここで大人数が激突すれば、一般人を巻き込む可能性が出てくる。学校を守るためとはいえ、そのために他の誰かを傷つけたのでは話しにならない。しかも、最近では小学生の遊び場にもなっているようで、うかつに罠も仕掛けられなかった。

……小学生というワードで嫌なことを思い出した。

頭に浮かんできたのは、よくよく微笑する男子の顔だった。前

に、小学生みたい、とからかわれたからだ。

最近、その男子の顔を度々思い出してしまい、その都度顔を赤らめてしまう。

恥ずかしい話だが、たぶん惚気おぼけているのだと思う。

『オオー!!!』

大音量の鬨の声。

瞬時に思考を打ち切り、頭も切り換えて、その声が出た方へ気配を殺しながら歩いて行く。

「テメエ等アア！ 汚ねえ手使われて負けたんだよな！？ なら全面戦争だ！！ 遠慮はいらねーぞ！！」

『オオー!!!』

建物の中、学ランを着た人物が鼓舞するように声を張り上げていた。

それに応えるのはまたも大音量。

しかし……、

「多いつすね……」

事前の調べでは二十人、或いは三十人ほどが集まると思われていたが、今この場には軽く六十人は集まっている。

……これは、致命的な失敗だ。相手戦力を測り間違えることは、説明の必要もないくらいにマズイ。

舌を打ってウターンしようとしたとき、ドサツと物音がした。

「……………あ、あ……………あ」

小学生の低学年だろうか。集団から見える位置で、幼い女の子がこの場の雰囲気<sup>あ</sup>に中<sup>あ</sup>てられたのか腰を抜かして座り込んでいた。

「ああん？ 何だ、このガキは？」

サングラスを掛けた男子がその女の子に気付き、近寄っていく。

帝稜の人間が如何にガラが悪いとはいえ、これほど小さな子供に何かするとは思えない。

きつと廃工場の出口まで追いついてそれで終わりだ。

だから、ここでその子を助けに行つてむざむざ見つける必要はない。第一、子供一人を連れて逃げることなど到底無理だ。

論理立てて、今の状況を整理して。自分が行く必要がないことを何度も確認して。

そちらに構うことなく廃工場の出口に向かう

「あ！ 何だ、テメエ！？」

ことは出来なかった。

「お、おねえちゃんだれ？」

「いいから！ 早くつかまって！！」

我ながら甘すぎる……………！

思わず浮かぶ自嘲の言葉を頭を振って掻き消しながら、うるたえ  
る子供の手をつかんで一気に出口まで走りだした。

第十四話 大運動会編 参・女の戦い（後書き）

「運動会編もついに動き出しました！」

ベンベンベンツ！

「敵地で発見されてしまったクイナちゃんは果たして無事なのか！  
？」

ベベベンツ！

「そして、謎の競技『ブリッツ』はどのような展開を見せるのか！  
！？」

ベンベンベンツ！！

「次回『大運動会編 四・フルバーニアン』！ お楽しみに！！」

…義姉さん、どうやらブリッツという競技にはもう触れないらしい  
ですよ？

「え？ じゃあ何であんなに細かく設定したの！？」

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0873e/>

---

姉びっくばん+ (ぷらす)

2009年6月13日21時00分発行